

# 高名太平記

服  
部  
仁

## 〈解 説〉

赤穂浪士一件を題材にとった演劇・小説は、事件以降現在にいたるまで枚挙に暇がない。このなかで、事件が起った元禄十五年から四十七年の間に書かれた演劇・浮世草子の集大成が、寛延元年八月十四日大坂道頓堀の竹本座で初演された『仮名手本忠臣蔵』である。そして以後、赤穂浪士一件に関するものでこれを超える作品はない、と言っても過言ではあるまい。以上のことは周知のことであろう。

ところでいわゆる義士物の紹介は、すでにかなりものが諸先学によってなされている。よって本稿では、そうした義士物のうち未翻刻の浮世草子『高名太平記』を活字にしてみることにした。

『高名太平記』は、『今昔物語』の形式をかりた、各話完結の短編小説集である。なかに中国の故事の説明等の、冗漫な啓蒙教訓的な話も見られる。こうした部分が、成立過程から言えば後補されたものであることは容易に推測できるが、その理由は明らかではない。名を借りた『太平記』に倣ったのか、売値を高くするための書肆の要請か、あるいは、教訓臭を付加することによって為政者の眼を誤魔化すための作者鷺水の小手先の小細工（または書肆のさかしら）か、いずれかであろう。いずれにしても、こうした部分の存在によって大幅に本書の興味が減ぜられていることは否めない。

本書は、「明和八歳辛卯仲夏日／京師書林印行」の『禁書目録』（宗

政五十緒氏・若林正治氏共編『近世京都出版資料』所収）「絶板之部」掲載の五十一書中の一である。本書が絶板になった経緯は、今田洋三氏の『江戸の禁書』によれば、

『太平義臣伝』が発行されるや、たちまち絶版処分をうけたのである。それにともなうて、享保二年刊の浮世草子『忠義太平記大全』（二巻、吉川盛信画、作者不詳）、正徳二年刊の江島其磧作の浮世草子『忠臣略太平記』（六巻六冊）、宝永年間刊の白梅園鷺水作の浮世草子『高名太平記』の三点が絶板処分となった。

いずれも赤穂浪士を浮世草子に仕組んだものである。一挙に四本の書物が禁書に指定されたことは、かつてない事件であった。

ということである。今田氏が、この時点（享保五年八月二十四日）においての義士物の禁書をこの四点とされたのは、板本についてのことであり、前記『禁書目録』「絶板之部」所載の五十一書中に義士物はこの四書だけだからであろう。このほか同書「本書」の部に義士物の禁書が多数あること、もちろんである。この『太平義臣伝』等の赤穂浪士一件に関する板本類が絶板になったことは、今田洋三氏が前掲書で引用しておられる『月堂見聞集』（『続日本随筆大成 別巻3』所収）巻之十二の享保五子八月廿四日の条に明記されている。

○八月廿四日、京都本屋共へ被<sub>レ</sub>仰渡<sub>二</sub>候太平義臣伝十五冊、右は赤穂大石氏の事を記す大坂板也、右売高何部と申書知れ可<sub>レ</sub>申間、売付候処へ代銀持参仕買戻し可<sub>レ</sub>申候、遠国へ参知れ不<sub>レ</sub>申候も可<sub>レ</sub>有候間、知れ不<sub>レ</sub>申候部数何程と書付可<sub>レ</sub>指上<sub>二</sub>候、右之書物絶

板被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候、此外に新板物無訳草紙、吉良殿事等の草紙絶板、また大阪図書出版業組合編『享保以後大阪出版書籍目録』所載の、享保五年以降の絶板になった有名・事由・板元が挙げてある『絶板書目<sup>（売買差留開板不允許）</sup>』の冒頭にも、

年月 享保五年九月 署名 太平義臣傳

事由 差構有之本屋行司え仲間流布の殘本詮索不殘差出方申付

附記 元祿十五年赤穂四十七士の義舉に關する刊行物は悉く之を禁止し、時代、場所、人名等を變作したるものにて其の内容、筋

合同一のものとは總て板行差留渡さる。

とあり、以後も、元文四末年八月に『精忠傳神錄』が「『太平義臣傳』之類書」ゆえに、宝曆六年三月には「泉岳寺之圖」が「赤穂義士に關係の圖書なるため」に絶板となっている。なお井上隆明氏の『近世書林板元總覽』によれば、『高名太平記』の板元芳野屋徳兵衛の出版事業は本書をもって終るようである。本書の絶板という処分に關連してのことと推測される。

本書の刊年については、長谷川強氏が『浮世草子の研究——八文字屋本を中心とする——』において、「正徳より享保初までの間の刊行か。」としておられる。また今田洋三氏は先引のように「宝永年間刊」としておられる。が、ともかく享保五年八月以前であることは間違いない。

今回の翻刻にあたっては家蔵本を底本とし、小川武彦氏所蔵本、東京大学総合図書館所蔵本を校訂本とした。そして本稿を書くにあたって、大谷篤蔵氏、長谷川強氏、長友千代治氏、小川武彦氏、石川了氏、小高道子氏よりいろいろの御示教をえた。記して御礼申し上げます。

（昭和五十九年三月二十四日）

## 〈書 誌〉

九卷十冊。白梅園鷺水著。序、白梅園鷺水「<sup>（水）</sup>」（花押）「<sup>（白梅園）</sup>」（落款）。袋綴。浅縹表紙。縦二五・六糎、横一七・一糎。匡郭、四周单边、内法縦一九・九糎、横一五・五糎。行数、序文六行、目錄九行、本文一二行、すべて無野。本文柱刻「高名太平記 魚尾 卷之（一）（九）（丁付）前集」（惣目錄は卷数の数字がない）。丁数、惣目錄（九丁半）、卷之一（一六丁）、卷之二（一八丁半）、卷之三（一七丁半）、卷之四（一九丁半）、卷之五（一八丁半）、卷之六（一九丁）、卷之七（一九丁）、卷之八（一九丁）、卷之九（一七丁）。原題簽（卷により一部または全部剝落のものもある）、子持梓、内法縦一七・九糎、横三・四糎、<sup>（近世繪入）</sup>高名太平記 一（二〇九終）（惣目錄は下部剝落）。内題「高名太平記物目錄」、「高名太平記卷之一（二〇九）」。刊記「京寺町通御池下ル町／芳野屋徳兵衛板／洛陽書林」。惣目錄九ウに後集十卷の広告（本文参照）。ただし後集は未刊か。

翻刻『高名太平記』

〈凡 例〉

一、漢字は、旧字・異字体とも概ね当用通行の字体に直した。

例 寐↓寝 逃↓逃 富↓富

耻↓恥 取↓最 珎↓珍

ただし(躰・体・體)(付・附)のように、さまざまな字体が用いられている文字はそのままにした。

二、仮名は特に片仮名の意識をもつて記していると考えられるもの以外は、すべて平仮名とした。

三、濁点の表記は原文どおりとした。また原文は半濁点に読むと思われるものも濁点で表記してあるが、これも原文どおりとした。

四、踊字の表記は原文どおりした。

五、句切に打ってある「。」と「・」に意味上の差異が認められないので、「・」に統一した。



〔口画〕〈表紙見返——オ〉(図1)

(図1)

序

臣事<sup>しんつか</sup>君<sup>きみ</sup>以<sup>もつ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>忠<sup>ちゆう</sup>とは何<sup>なん</sup>そ己<sup>おのれ</sup>を尽<sup>つく</sup>すをもつて忠<sup>ちゆう</sup>とすとかや今<sup>いま</sup>此<sup>この</sup>十<sup>じゅう</sup>卷<sup>くわん</sup>に述<sup>の</sup>る所<sup>ところ</sup>の数<sup>す</sup>篇<sup>へん</sup>は普<sup>あまね</sup>く世<sup>せ</sup>間<sup>かん</sup>の人口<sup>じんこう</sup>にある若<sup>めい</sup>話<sup>わ</sup>たりといへとも其<sup>その</sup>忠<sup>ちゆう</sup>におゐては今<sup>こん</sup>古<sup>こ</sup>一<sup>いっ</sup>片<sup>ぺん</sup>の忠<sup>ちゆう</sup>なるへし後<sup>のち</sup>の見<sup>み</sup>へ一<sup>いっ</sup>ウ人<sup>ひと</sup>その章<sup>しょう</sup>句<sup>く</sup>鄙<sup>いひ</sup>くその文<sup>ぶん</sup>義<sup>ぎ</sup>の野<sup>や</sup>なるは敢<sup>あへ</sup>て採<sup>と</sup>事<sup>じ</sup>なかれたとは人<sup>ひと</sup>あり口<sup>くち</sup>吃<sup>きつ</sup>して音<sup>おん</sup>便<sup>ひん</sup>清<sup>きよ</sup>からすといへとも意<sup>い</sup>見<sup>けん</sup>におゐて訥<sup>と</sup>せす噤<sup>げん</sup>せさるか如<sup>ごと</sup>く此<sup>この</sup>卷<sup>まき</sup>また一<sup>いち</sup>字<sup>じ</sup>の忠<sup>ちゆう</sup>のみ

白梅園驚水「水」(花「白梅」(歌落)

兩朝高名太平記惣目録

前集

卷之一

江州浅世高見丞歌の会に出給ふ事

野上吉之悪口に依て闘諍に及ぶ事

高見丞家臣大西浦之介忠義の事

片岡伝五郎か母賢にして子を諫る事

もろこしの王孫賢か母の賢なりし事

大西浦之介殘党の心ざしを見る事

一子力之丞十五才にして父を諫し事

海野九郎臆病にして降参に出る事

山岡角之進夫婦忠義の事

妻夫をすゝめ腹を切せし事

〈二ウ〉

角之進か魂乳のみに入かはり敵を

ねらひける事

卷之二

堀江屋五郎兵衛忠儀に葦若壳と成事

小山長左衛門不臣にして盜せし事

扇屋五郎右衛門赤豆や清兵衛など

五郎兵衛が肝煎によりて忍の者となる事

史記の貨殖伝の事

吳王夫差越王勾踐を囚にせし事

范蠡忠儀によりて魚壳となる事

矢田丹三郎十才にて義心ある事

按摩とり近松丹六養子の心をためす事

不思議の縁ありて古傍輩をはごくむ事

足輕寺中吉右衛門忠節の心ふかき事

伯父伝太夫無得心にて甥を手討にせし事

落城の刻士卒心くゝの事

卷之三

浪人の妻奉公に出たがひに義をたつる事

詩の心によりて寵愛にあひし女の事

偏執にて忠義に心をきあふ事

不破笠右衛門徳義高かりし事

城下に火事ありし節諫言して主人に

〈三才〉

目見えを乞し事

牢人となりて後亡君の廟所にむかひ

御扨氣を申なけく事

忠儀によりて科をゆるされし事

茶の湯者不寒武士の義を立る事

矢川三平太氣にて馬をとらるゝ事

落城の刻人の命を預る事

卷之四

八田兵助他の契約違変せしを恨て病死の事

同名兵七古今のためしをひいて父を諫事

並二父が心さしを繼て忠義をつくす事

頼朝範頼義経兩人に對して軍配替事

楠と義貞の事付りみなと川にて

正成うちしにの事

娘子軍の事付り孫武か事

吳王闔閭孫子をめして軍法を見給ふ事

帝の妃百八十人を出して勢そろへの事

金岡伝五主人の敵をねらふ事

僕源助忠節の事

太平記講談の事

伝五主従講尺によせてたがひに義をたつる事

夜討の節源助殊に忠をつくす事

〈四才〉

〈四ウ〉

〈五才〉

敵討の後主人の行衛を聞て源助殉死の事

卷之五

妻賢にして夫を諫言せし事並離別の事

吉之愚にして諫を用ず却て立腹の事

老臣他国より来りて忠言を奉る事

鼻のなき猿鼻のある猿を笑ふ事

莊子が渾純のはなしの事

余りに珍しき事を好むは却て仇と成事

猿猴か月をとるといふ故事のおこりの事

漢の董宣法を立る事

死をおそれざる諫言誠に忠臣のする所なる事

公主の寵愛し給ふ乳母の子といへども

科あるにおゐてはゆるすまじき事

竊のものとも注進の事

主將愚にして浮説を信じ敵を恐るゝ事

七仏といふ隠し文の事

卷之六

大西浦の介鐘木町にかよひ放埒の身持有事

競馬香といふ酒もりの事

三島久次大將基によせて酒もりの事

吉之方の忍ひの者欲にふけりて本心を

あらはせし事

〈五ウ〉

新田藤王丸足利基氏家臣となる事

浦の介智略にて鎧を誂 袴をあつらゆる事

落し文並二反簡の 謀に落いりし事

疑竊鉄の漢といふ事付斉の田単か事

梵字党と名つくる忠義の士の事

銘くくの智謀を知らんため題を出して軍

の仕第を入札にせし事

卷之七

海野九郎素姓の事並二公事を誘事

欠落者の妻賢にして夫の死せざるを知事

貪欲の侍みたりに人をあやまちし事

伊藤五近藤六 阿附不臣の事

籠城評議違変につき家臣等心くくの事

小野九内吉田長左衛門忠義の死を勧る事

海野重代の恩をわすれ臆して欠落の事

大西力の烝義勢富林等勇氣の事

大西方一味のもの義に依て命を軽する事

海野方配当の金を貪り取逐電の事

片岡伝五磯川十郎大西が命をも請ず

忠義の勇をあらはす事並浦之介か目かね

に違す海野たちまち敗北の事

卷之八

〈六ウ〉

〈七オ〉

〈七ウ〉



浦之介亡君の母君をとふ事

陳の吳明徹齊の国を攻し謀を用ひし事

官金配当のあまりを以て母公に奉る事

赤小豆屋清兵衛と不破笠右衛門か事

忠義ゆへ互に疑を生じ義絶せんとせし事

浦之介夜討の手配十ヶ条の掟を出す事

堀江屋五郎兵衛首途をふるまふ事

人数たての事付タリ夜討の事

一揆のものども亡君の仇を報し事

卷之九

忠臣四十余人亡君の廟所に首を手向事

大西浦の介殉死をいましむる事

片岡善五はやまりて切腹の事

野見宿称士偶を造りて殉死にかへし事

織部弥平兵衛亡君をしたひ切腹に及ぶ事

波多宗右衛門切腹の刻愁歎し未練に見ゆる事

妻義をすゝめんとして一子をさしこらす事

小野郷右衛門自殺の事父九内なげきの事

浦の介四十余人の忠臣のために金をた

くはへし事

帝都の勅によりて浦の介立身栄花の事

高名太平記惣目録終

高名太平記後集 十卷 板行

右の書に洩たる義士悉注し之者也

高名太平記

〈八オ〉

○卷之一

江州浅井高見丞歌の会に出給ふ事

野上吉之悪口に依て闘靜に及ぶ事

高見丞家臣大西浦之介忠義の事

片岡伝五郎か母賢にして子を諫る事

もろこしの王孫賈か母の賢なりし事

大西浦之介殘党の心ざしを見る事

一子力之丞十五才にして父を諫し事

海野九郎臆病にして降参に出る事

山岡角之進夫婦忠義の事

妻夫をすゝめ腹を切せし事

角之進か魂乳のみ子に入かはり敵

をねらひける事

〈九オ〉

〈九ウ〉

〈一オ〉

〈一ウ〉

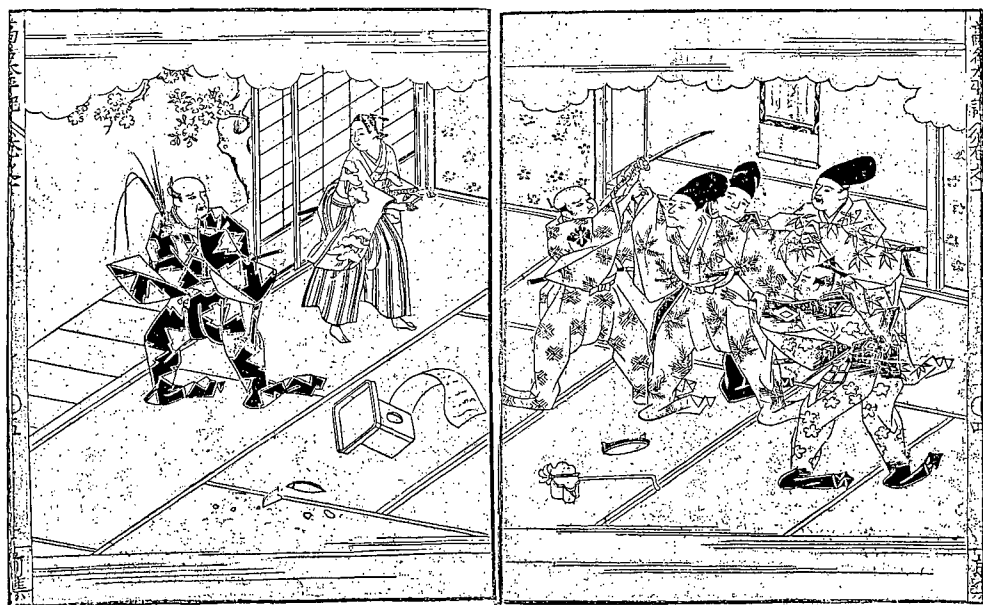
## 高名太平記卷之一

○浅井高見の系家臣忠儀の事

今は昔、浅井高見之系といへるは、双なき弓馬の達人なり。いかめしき武功の家に生れて、恩賜の菜地に居住し、代々忠臣の名あり。寛仁にして民をなで、綏約にして身の奢をつゝしむの賢才ありしかば、其国の民うたひて、堯舜遠きにあらず、いかんぞ古をしたはんと。徳になつき、風をしたひて、四方の人爰に家をうつさん事を願ふのみなり。されば日月あきらかならんとすれば、雲かならず是をおほひ、樹しづかならんとすれども、風先枝を動かす習ひ、野上吉之といふ武士といさゝか口論の事ありて終に早世の端となれり。其おこりは、一年鎌倉におゐて「二才」百首の和歌興行せられ会満座の後、おのゝの歌を書あつめ一卷とし都にのほせ、為家卿の批点を取、点の高下にまかせて、座の甲乙を敷、ほうびの品を定て、それゝにもてなしけるといふ。東鑑の説にまかせ、いてや今もなを此会を催し隣国の因をもせば、興ありてやさしき遊びなる物をと、いにしへの例をひかれ、四海一とうの御代、干戈の光りながく絶、弓はふくろにおさまれる。聖神文武の春の日の永き、つれづれをなくさむには、是にまされる事やあると。その比のもてあそび草となりけるまゝ、おのゝ当番を繰て、次第に此会を催されけるに、ある時、何某とかやいへる国司の許にて、花為久友といふ兼題を出され国々へ飛札をつかはし、行李の往来、日きたまりて隣国の諸武士諸代官、高下をいはす、和歌に「二ウ」心

さしある。輩は、皆まねかるゝ事にぞ、ありける。爰に野上吉之といふ人あり、そのかみ連歌師の塩くちて、さながら道の達人ともあらず。歌も比ちからにて、すこしは口はしたなく読かほなりけれども、つやく敷島の道、ふみわけたる筋にもあらぬが、今度和歌の当番、つとめ給ふ方に出頭して、和歌の事は、ひたすら此吉之が指図のまゝに、何事をも打まかせらるゝ事なりしかば、おのづから世に鼻高く、人を人共おもひわかず、おのが一筋の読方に叶はされは、只いたつらにねほれ言ひふ、あた人とのみ、おもひとりたる多せものなり。しかれども年高き人といひ、高見の系も歌道には今すこし、覚束なき所もあり、殊に今日の亭主かたなる人の、打まかせて、もてはやさるゝ程の人「三才」なれば、諸事につきて、うかゝひ給ふやうにあかまへすゑられ、いと高ぶりにちにてその日の披構も事おはりぬ。やかつて例に任せて、当座の題五十首を認おのゝの前に引わたしけるに、吉之がとりしは連筆照射といふ題なり。これに屈託して、さまゝと案し、いりける所に高見の系吉之にむかひて、拙者か取あたり候は、秋夕傷心、といふ題に候、此題にむかひて、もし恋の心など、うかび候はんはいかゝと、尋ねられけるを、吉之のおか当座の歌、おもひめくらすに、さしあわせてかしましく、むつかしとおもひければ、只うちうなつて居ける。高見の系さても物しらぬやつかなし。諸侍の老を老として、あがまへ仕まつるほどにしてみものを間に返答こそせさらぬ、そらうそふいてうち「三ウ」うなつきたるこそ、物めかしけれとおもひながら、とかく詠しすまし、やがて清書したゝめらるゝ時にいたり

て。衆議判ありけるに。高見の烝の詠せられしは雑の題なるを恋に詠られしは。いかゞ雑の題にむかひて恋はよむべからず但述懐の心をこめて詠したるは。恋の歌に似たるもあれとそれはくるしからずこそ申伝へ候へなど。人く申けるに高見の烝当座に赤面せられ尤かゝる事の覚束なければ膝を屈して敬ひ問にひが事を教へて。人に恥をあたる条。奇怪のやつかなと。いきとをり思はれけれども穩便にもてなし。静に詠し候はんとて。此数には洩給ひける程なく批点出来して。京都よりまかり着ぬとて。武具馬具の引出物とも。山のこつく積せ。旧例にまかせ。膳部を（四オ）（図2）とくへ。和歌の連衆。もてなしのくわい文なども。まわりければ。高見の烝また。吉之かたへ行。京都より御点の巻到来いたし候由。某明日の席の事。心もとなく候点式いかほどの座につき候はんや。御内意うけ給りたき由。尋られけるに。只中ほどに候とはかり答へられしかば習日いつもの座より。少上座に着んとしたまひけるを。藤井何かしと申胴坊。御座は爰の程に候と。いつもの座よりは。よほど下りて一間あきたるに。引入しかば。高見の烝いよく辭憤の端となりて。我もと高ふるの心ざしあらずして。けふのふるまひ心にもあらぬ不覚を取しも。ひとへに是吉之か心より出たるの恥辱。もはや堪忍なりかたしとおもひつめ給ひしかばひそかに勝手に立給ひけるを。高見の烝の家臣大西浦の（五ウ）介。書翰を以て急用の由申来りけるを。高見何事やらんとひらき給へは詞はなくて。越王呉の囚となりて恥てせさる事は。范蠡世にあるを頼てなるへしと書て。五一首の題を以て。おのく歌あり。会稽の雪。君ふ



〔挿画〕〈四ウー五オ〉（図2）

かくあちわひ給へと書たり。高見の丞やかてその心をしりて懷にかれ何となくその日を勤られけるに夜に入て又、当座五首の題出たり。取て見たまふに、浦の介か詠して奉りし題、ことくあり高見の丞の取あたり給ひしは雪中鶯とありしを、見たるまゝにて、用に立給ひける跡にて吉之またひそかに、我とりたる夜鷹橋といふ題と、とりかへて置たりしを夢にもしらず、立かへりて件の題を見たまふに、各別の題なり。口惜き事かなとおもはれるへ六才が急度おもひつて彼浦の介か詠し来しける。詠草の内の歌をぬき出しあらぬ体にて、こよひの間を合されけるに、殊に秀逸の由、衆議判ありけるを吉之例の偏執にて、それも犬の蚤とかや、但は古かるへしと、つぶやきとるか。高見の丞の耳にいりける程に、最早堪忍ならぬ所と、つかくと居より、真二つにと抜討にせられける。此太刀陰におとろき、日ころのおく病たちまちあらはれ、のふ悲しと打あふのきに仆れけるゆへにやうく眉間を切れたるまゝにて、打ふしたるを、高見なをくたみかけて仕とめんとせられけれども、ありあふ人くおしへだて本望を達し給はず、無念の上に裁許にいたりて吉之が弁舌や勝りたりけん。高見の丞はやみく切腹にぞ極りける

〈六ウ〉

○片岡善五郎が母賢なる事

今は昔、善五郎といふ武士あり父片岡の何がしは失て母ひとり、養育の功をつみ、父か誉をつぎて御側用人の数にくはゝりける。一とせ主人高見の丞、ふとしたる口論によりて、切腹ありける比、供にはづれて屋しきにあるが、高見殿口論のよし、聞とひとしく、人ませも

せず、御居間にかけられたりける。手鍵おつとり、召替の逸物に乘て、息をもつがす馳付けれども、諸武士立合の場なれば、門戸をかため番をきひしくして、みだりに出入をゆるす事なく、おのくの供まはり、めんくの主君を、心もとなくおもひけるより、たがいに心おきて、身をかため、かたづをのんで、ひかへたる折からなれば、誰に断て、詞を返すべき由もなければ七才、いたつらに馳かへりぬ。その母はさきだちて、早御やしきにつけ、奥がたへつめられたりしか。善五か帰りと聞て、ひと間なる所によび、たいめんしていはく、や善五どの物がたりして聞せん、それ人に三つの品あり、上品の人は教ず字はすしておのづから善なり、中品の人は訓をうけ、心に学ひ得て後に、はしめて善なり、下品の人は師にしたかい教をうけ、日夜に心をはけまして学ふといへども、曾て露ばかりも、善にすまず、是をなづけて愚人とし不忠のともがらといふ、されば教されともおのづから中庸の道にかなふは、聖人にあらずや、学びて道にすむ人これを名づけて賢人とし智ある人といふ、善は吉事の心なり、不善は悪のから名也。善人の善をおこなふ事へ七ウ君に忠あり父母に孝あり兄としては愛あり、弟に敬あり毎事におゐて誠をつくすに日も不足として、猶道におこたりある事をなげく、愚人の不善をなすにおゐても又一年の目を不足として、日夜に不善不義不忠をおこなふ、善五そなたは此二つ道におゐて、いつれの道にすまんとおもふそ、父片岡の何かし、常にたまひしを忘す、我もといやしき農民となりし身なり、天下道あるの時にあひ、此君に知られまいらせ、忠義を以て仕

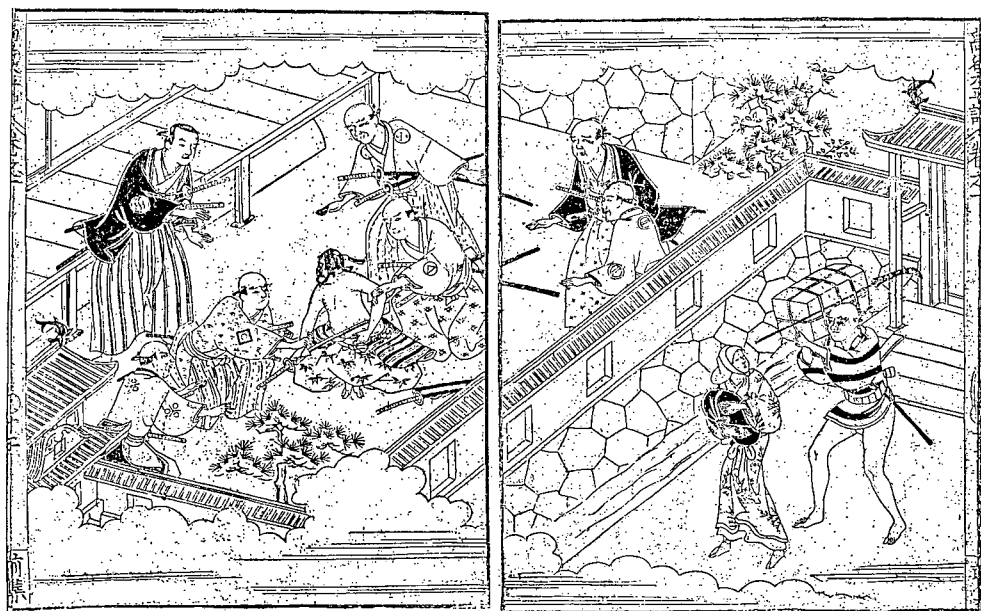
官し。纔に家の名をおこせり。深くねがふ所は。我子孫。かりそめにも道にたがひ非道のふるまひある事を聞ずして勤仕せば。たとひ小身にて永代ほまれなくとも。我かつて恨とせしと。兼くのたまひしぞかし。今君口論によりて身をうしなはへ八オセ給ひぬと聞。親の仇さへも共に天をいたかずといへり。まして主人の敵をや。つたへ聞もろこしの王孫賈は齊の閔王につかへたり。渾齒か乱にあひて。閔王のかれかくれ給へり王孫賈その王の供にはぐれて。いたつらに家にかへりけるをその母のいはく。汝あしたに去りて晩にかへる時は。我門に倚て待。もし暮に出て帰らざる時は。我閭に出て待。汝今君に臣たり。君乱にあいて身をのかれんために。外にかくれ給へりと聞ながら。その隠れ給ふ所たへしらすして。我汝を待べしと。帰りきたるは何事そや。我なんちを子とせしといかりけるといふためしをしらずや。今われ王孫賈か母におよはすといへども。何のめんぼくありて。汝に面をあはすべき。死て義をすめんも。奥かたのおはしませは。此御ゆくゑ定りてへ八ウこそ。とにもかくにもなるべけれ。けふよりして母ありとおもひそ。我また子ありとおもはすと。はらくとなみだをこぼし。袖をかほにおしあて。立わかれ給ひけり。善五このいさめにあいて。いよく義心すゝみければ。家老大西浦の介に對談し。二心なき誓紙をかため。吉之か屋形にしるび入終に本望を達しけるは。只ひとへにこの母の賢によれりとぞ

## ○大西浦の介が事

今はむかし。大西浦の介といへる。文武才智の侍あり。相伝の主人を

討せ。落城におよふ事あり。浦の介城中の武士をあつめ。おの／＼に對して申出しけるは。それ智者は三度おもひて一度いひ。九度思慮して一たび行ふといへる本へ九オ文あり。しかるに我きみ。愚にましく。此短慮をおこしわつかの口論に命をうしない給へり。それがし家臣の役をかうふり。昼夜御おんを請て候といへとも。いたづらに祿をいたたき。妻子を愛するの利にのみほこりて。君をいさめ行跡を正し奉るの忠なきより。発りたるの禍なれば。我先その罪を得へきの当然たりといへども。今さいわいに。わがつみをいふ人なく。城をひらき刃をすて。降人となり候は。一命をたすけ。こと／＼くゆるし給るべしとの内通を得たり。これ天のゆるし給ふ所とおもへば。それがしにおゐては。千顆万くの玉を得しよりも。悦ひはなをあきたらず候。しかるうへは。先それかしの妻子をはじめとしておの／＼の所縁につきて。家財を運び出しへ九ウ候はん存の間。いづれも御同心の御かたは。その用意あるべし但おもひ入れたる筋も候は。遠慮なく仰いださるべしとありしに。いづれも目と目を見あはせ。しはし詞もなかりける所に。浦の介か相役海野九郎といひし人。すゝみ出て申けるは。誠に我くも数ならぬ身ながら。数代の厚恩わすれかたく貴殿と某。ころをあはせ。思慮のおよふ所。ずいぶん御諫申といへども。只生得短氣の性にして。かたむくろなる生れつき。おもひ入たる筋は。誰か御異見申せども。御用ひなき心からかゝる不覚の死を遂給ふのみか。あまつさへ相手をもしとめ得ず。やみ／＼と犬死したまふ事。皆これ下愚の性にして。智恵のいたらぬか致す所。自業自得

の道理、たとひ此軍勢をもつて、一戦におよび、城をまくらへ十オにして、打死したりとも、名を恥るものゝする所にあらざれば人もつて替る事あるまし、なるほどく、浦の介との申ぶんにしたがひ、外はしらず某は、一番に降参し、城を渡す衆にくわゝり申へしと、いひもあへず、はや落支度専なり一国の権をとりおこなふ、海野が降人に出んといふ事なれば、まして一往の義をおもんし、身をかへり見て、しはらくためらひし、武士とも、死はおそろゝ所、生はこのむ方なれば此一言に色めきたちて、ひそくといふほどこそあれ、いはんや一旦のわたり奉公に身をよせしものども、なしかはもつてためらふへき親をすて子をすて、一騎二騎づゝ、白昼ともいはず、ぬけゝに落ゆきければ、始こもりし時式万余騎もあるへしと見へし軍勢の、わづかに七八百騎ならては残りへ十ウとゝまるものもなし、それもなを海野に心をよせ、諂をつくして、軍用の金、兵糧の残りを、配当にあつからんためとぞ聞へし、かゝりければ死を輕んし命を捨て義を金石よりも堅くする事は、まことにありがたき物とそ見へたりき、かくて浦の介、城中の人の過半すきて、落うせ今は心やすしとおもひければ、子息力の悉をまねき、軍勢の多少を窺はせしに、城中曾て人なし、纔こゝかしこに残りとゞまりける武士、やうく三百人ばかりなり、それも落したくの相談と見えて、打よりくしめやかに、何やらんつぶやきゐたり、力の悉何となく城中を見めぐり、立かへりて浦の介にむかひ、右の様子をつふさに語り、手づから提子土器をたつさへ来り、みづから三こんほして浦の介か前に置、さしぞへを、すへ十一オ（図



〔挿画〕〈十一ウ—十二オ〉（図3）

3) るりとぬき既に切腹の気色なり。浦の介あはてゝ、とひかゝり太刀もぎとり。こは心得ぬしかた。おことは氣ばし違ひたるかなに事をおもひ入。かくは見ゆるぞと尋るに。力の丞はたゞ何事をいはず。父のさしそゑを奪ひて。なをく死んと狂ひたり浦の介今はせんかたなく。人はなきか是たすけて給。一子力の丞は物か付て。腹をせんとするなるはと。声をあげてよはゝりけるにそ。片岡善五小野九内。吉岡富林をはじめ。有あふものどもかけつけ。先双方へひきわけたり。中にも織部弥平兵衛といひける老武者。力之丞をかたはらへまねき。さまゝにすかし尋ねしに。力の丞申やう。それ身をたて。道をおこなひ。名を後世にあけて。もつて父母をあらはすは。孝の終とかや。孝経にもしるされ侍り。我生て孝をつくさんとすれば。不忠のへ十二ウ名をとらん事のかなしく。敬して違ふといへとも。父が心さしのしたかふましきを見て我子たるの道を行ふ事を恥とす。所詮は身を立んとすとも。此幼弱の身をもつて。万人の中に切いる事ありとて。逆も本意を達する事あたはし。されば道をおこなはんには。我死て父をはけまし。忠を黄泉の主君につくさしめんとおもふより。かくは物にくるふなりと。なくく語りけるにぞ。ありあふ人く目と目を見あわせ。年にもたらぬ少人の。智は各別の武士の手本かやうに忠あり義ある人の親はたましゐのくさりたる事よと。つゝやきさゝやきもろともに。感涙にむせびながら。小野九内すゝみ出。さあくおのく此上はいよく後たてつよくなりしそ。此人を大将とさだめ。一味同心の誠をあらはし。力の丞殿に安堵させ給へ。もつともといふほど

へ十三才。こそあれ。落のこりたる一座の兵。卅五人うちより。力の丞をかこひ。さあ浦の介のがれぬ所。尋常に腹をきれ。おそしくとつめかけられ。浦の介なみだをなかし。誠に父あらそふ子ある時は。身不義におちいらすとは。かゝる事を申て候。正しき力の丞は子ながら。恥いりたる心底。我とてもそれほどの心さしなきにはあらず。いかにもして主人のかたき。吉之を一太刀恨たく骨髓にとりておもひ入候といへとも。おのくの心はかりかたく。かゝる乱世の折からは。子とても油断すへきにあらねば。曾て口より外に申出さず。心ひとつにあんじわつらひ候也されはこそ一度城をわたし降参せはやと申出し人くの心を引見て候へは。片腕とそんし候海野がありさま。おのく御存知のところなり。かやうに頼かひなき人非人と。一大事をかたり候は。中く本望をとくるのたよりへ十三才とはなり申まし。今金鉄の心さしをもつて。我のかさしと仰候おのくも。御心底は早しれて候へども。上は遠し無勢と申。いたつらに朝敵の名をとるばかりにて。とても宿意はとげ申まし張良は世々韓の相たりしが。韓をほろぼされて。高帝に仕へ万金の資をおします終に国のためには仇を強秦にむくひたりと申さずや。我数ならず候へども。一旦城を渡し降参の名は取とも。晋の予諒か謀をもちひんとするにあり。君たちもし今の心をもつて。永く一命を主君に手むけ給んとならば。我いふ所にしたかひ給へ。日本の神祇の冥慮をかけて。此事いつわりに候はすその証を見たまへと。肌のもりより取りだすを見れば浦の介が直筆にて。頭より血をしぼり。君のために仇をへ十四才。むくはずんば。

永く阿鼻のそこに身をしづめんと。一通の願書あり。おのく横手を打て感してさやうの深きたくみありとはしらず。一すちに貴殿をこしぬけさむらひとおもひこみ。さまく恨ぞんぜし事やと。喜悅のあまり目のまへにて。神水をのみ誓約をしたゝめ。おのく一味したりしなり。

### ○山岡ふう忠義の事

今はむかし。山岡角之進といふ人あり。そのいにしへはならびなき武士なりしが子細ありて山城の国伏見といふ所に引こもり。所からとて身過のために。簾をあみ習ひて売ものとし。かすかなる暮しをたのしひ。夫婦の中に角太郎とて。二才になりけるをてうあいし。何とぞ此子を成人へ十四ウさせしかるべき奉公にも出してみたしと。夜をふかして家職をはげみ。日は一日みやこに出てことくく売しるなし。仕なれぬ業に身をこなしけるゆへか。ある時ふと風をひきたる由にて。かりそめに打ふしけるが。次第に病おもりて医術を頼むべき便りなく。今はいかにしたりとも。たすかるべき様にも。おもはさりしかば。その妻をひそかにまねきわれいやくも弓馬の家に生れ。忠義の道をまなび武門の数にもくはりし身の。今いたつらに。匹夫士民の前に手をおろし。ならはぬ業に氣をいため。あさましき渡世に。貧なるかまどを見せ申事。恥かしき事に候へども御ぞんじの通。身に望ある事に候へば。くやみ給ふべきにはあらねども。口おしや天運いたらず。おもふ事を達せずへ十五オして。それかしは相はて候なり。その方事。いたわしく候へども。その若をつれ何とぞして。国もとへ立かへり。

しかるべきかたにつきて。身よせ。その若をも人になし。我あともとふらはせてたべと。なくく声のしたにかたりければ。女房きゝて。さてく角之進のを。武士とおもひ。今まで馴なしみまいらせし事。神ならぬ身とて。あまり口おしく候そや。いかに御身のやまひにひがみ給へばとて。わらはをさほどの比興ものとおほしめし候かや。生ては仇をむくひん事を願ひ死にのぞみて妻子を悲しむは勇士の心にて候や。仮令存命つがなく。敵にむかひて太刀をあはせ帰り討にあふも習ひ。その時にのぞみて。妻のゆくゑ子のかあひさ。未練をおこして。言置のために。うしろを見せて。へ十五ウ帰り給はんや見さげたる君の御所存と。さんくに恥しめければ。角之進につことわらひ。実は我つま也。よくこそいさめ給ひしよな。何しにみれん候べき。たとひいたづらに病死するとも。たましいは。世にとまり。本意達せでをくへきか。とはおもへどもやゝもすれば。恩愛のわかれ心くるしく。又はやまひにくるしめられ。最後の一念心もとなし。しよせん今我たましいの。たしかなる内に。へんしもはやく死をいそぎ。角太郎か手をかりて。いさぎよく本意をとくべし。介錯したまへつまと。おもき枕をかへられながら。腹一もんじにかき切しを。妻かいく敷おしふせ念仏ともるともに。ふゑのくさをさしとをし。おしふせんとしける時。角之進がむくろより。白き雀毫羽とび出へ十六終オかの妻がふところに入ると見えしが。纔二才なりける角太郎ふところより這出。さてくうれしや我病は平愈したり。いそぎ此かはねをかたづけ。見ぐるしき物どもとりはらい。はやく旅の用意し。明日さう



く我をつれ、山科のかたへともなひ給へ。我生をへだてつれば、この肉眼をもつて三界を見るに、いさゝかもさはりなし。ましてや日本六十余州の内、たな心の中のものに同じ。されば浦の介が住所を尋ねかねいろく、とあんじわづらひしも今山しなの里にあり。吉之か屋かたの内通は向後われものびく、に。ちからをそゆる手だてあり。あらくといひてからく、と笑ふ。妻あはて、角太郎か口に手をあて、天に口あり壁に耳といふ。本文をつゝしみ給へと、乳をふくめてすかしければ其後二度物いはさりしと也。夫も夫妻も妻、めづらしきあやしき忠せつの人くなり

へ十六終ウ

## 高名太平記

### ○卷之二

堀江屋五郎兵衛忠儀に眞若売と成事

小山長左衛門不臣にして盗せし事

扇屋五郎右衛門赤豆屋清兵衛など

五郎兵衛が肝煎によりて忍びの者となる事

史記の貨殖伝の事

呉王夫差越王勾踐を囚にせし事

范蠡忠儀によりて魚売となる事

矢田丹三郎十才にて義心ある事

按摩とり近町丹六養子の心をためす事

不思議の縁ありて古傍輩をはこくむ事

へ一オ

足輕寺中吉右衛門忠節の心ふかき事  
伯父伝大夫無得心にて甥を手討にせし事  
落城の刻士卒心くの事

## 高名太平記卷二

へ一ウ

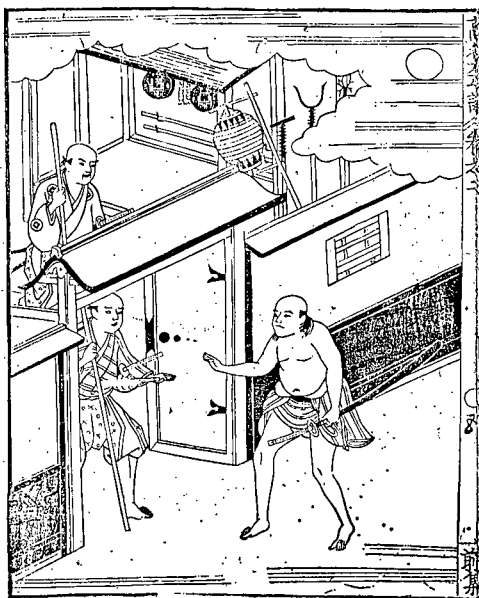
○ほり江屋五郎兵衛が事並小山ぬすみせし事

今は昔、堀江屋五郎兵衛といへるたはこ売あり。去大名の家に出入し、あきなひ手ひろく、殊に新みせながら。此ものゝみせほど。賑なるはなしと、隣つからにも羨れける。そのとり入し始は元来五郎兵衛そのいにしへ、名ある武士のよしにて、鎌に妙を得たる人なり。此ゆへ若かりし時迄、仕官の身なりしが、子細ありて身を隠し、名をかえて今町人となれりける。此人の旧き友に、小山長左衛門といふあり。無二のまじはりにて、是も牢浪せしを、相互の事と身をつみて、不便をくわへ、一飯をわけをひとつにして、養ひはごくみ、しかるべき有つきもあらば取立もせはやの心さしなりなと、人はいひて我身ばかりかへ二オへり。朝も星をいたゞき、暮には灯をとほして帰る。彼御やしきの用しげきを聞て、何とぞ取いりたく、さまくの縁をもとめしゆへなりとそ此かゝり人小山の何がし、人のせわになりて、身のゆたかなる儘に、ありつきの手筋など聞つくらふといふを楯につきて、酒色の二つに夜をふかし日をかさねておもしろかりけるまゝ、さなき

だに浪人の身の。一重ある物も洗濯に遣すよしにて、こそく／＼と持出しが。今は代なすべき矢種もつき、せんかたなき遊び好、つねの産なき物は恒のころなしかや。貧にせまりて盗気となる習ひ。五郎兵衛ある日旦那かたに隙とり、夜ふけて帰りけるを、よき時節と悦ひ。戸棚の鎖ねぢきり、小袖蒲団など、ちからの及ぶたけをぬすみとり、あしにまかせいづくに行へ二ウ」ともしらず、欠落しけるを、五郎兵衛はかくともしらず、荷をになひて酒きげんに、鼻歌心よくうたひて帰りけるがおもはず、此ぬす人に行あひ、小袖の紋ところ、蒲団の色あひなど、さへのほる月かけに見とがめ、あやしさに荷を、すて、跡をしたひてよく／＼見ればまがひもなき我着類なり、所こそ多きに此道すぢを通りあはせ、我に見つけられしは、運のつきたる奴にこそと、思案をきはめ、いさぬす人め遁すましと声をかけしに、小山は肝をけし、跡をも見ずして命かぎりと逃てゆく、今すこし手ひどく追つければ、逆も人外なるやつばら、かれていのものを追つめ面鉢を見ては、中／＼生ておきがたし、きやつを殺しへ三オ／＼て自然に名所をとれなば、あきなひのさまたげ、殊に我願ひの屋しきへも、出入の邪魔なるべし、所詮はこれをさいわいに偽りてみはやと、ぬきたるふところわき指そのままながら、髪おしみだき大はたぬきになりて、心がけたる屋しきの門を、あはたしく叩、当番の武士たち出、様子をたづねけるに、某は此御近所に住申候、たはこ屋にて御ざ候、今晚わたくしの宅へぬす人参り、資財雑具こと／＼盗とるのみならず、

金銀のたくはへ有べし、今日去屋しきより請取たる、金子の員数も知りたれば、いそいで渡せと申によりその金子はすぐに問屋へ相立候よし、事をわけて申といへ共ぬす人とも承引いたさず海道へ引いだし丸はだかにして僉議せよとて、二三人打より、引はり申所を、身命をおしまずへ三ウ／＼むねうちなどあて候て、爰まできりぬけ罷越候、あとよりぬす人ども、ぬき身にて追かけ申候あはれ影を御かくし下され候はゞかたしけなかるへきよしたのみしかば番のものとも、評定しかね終に家老の耳に入れるに、此屋しきもその折ふし、用心の事ある比にて、弓箭にたづさはり、一芸あるものは、情をかけて召つかふべし、これ楠か常にもちひし軍法なりと、主人よりいひつけられし事ありしをおもひ付、町人として武辺の仕かた、たのもしきやつなりとて、其夜は長屋に一宿させ、あまつさへ御屋しきへ出入し御用をも達すべし、猶此御恩をわすれず、自然の事もあらば、一命をもさし上候へと、御家老まで目見への節ねんころなる御詞、五郎兵衛のぞむ所なれば、金銀をついやしへ四オ／＼損をしてもかへりみずいよく忠節がほに輕薄をつくりければ、彼が申事は何事も真実となりて、出頭あまりに然べき女奉公人もあらば御肝煎申べしとあるをさいわいに、これも式人ありつかせふたころなくはたらきければ、いよく御家中の取さたよく、後には打とけたる物かたり、御家には敵ありて、方に御氣づかないなきにもあらず、さりながら手にたつほどの事にもあらざれば、さのみきひしき用心にもおよばねども、家臣としてその忠をつくさずしではあるべからず、汝を向後敵のかたへしのはせ遣べき間何事をも

つゝまず、注進いたすべしと、誓紙の上にて、上かたへものぼせ。先年高見の丞がめしつかひける。家臣の内、浦の介が行跡、よきにつけあしきにつけくわしく見届てまいるべしと、金銀をあたへ申渡しける。五郎へ四ウ〇兵衛元来手だてにて、出入せしものなれば、肝のつぶれたる顔つきして、涙をはらくとこぼし、誠にかすならぬ私ふぜいの人とおほしめされ候て、かやうの一大事御たのみある事、身にとりて面目、何しにそりやくいたすべき。此うへは、某無二の知音一兩人もちて候。かれらが魂もそれかしにおとらぬものに候へば、此ものともをも、陰ながら御扶持下さるべく候はゞ、ともにちからをあはせしるのびくくに、浦の介が行跡を、御注進申べしと、いよく頼しくひけるに、さらばめせとて、招かれしに一人は米原屋の猪之介とて切売なり。一人は扇屋にて五郎右衛門といふもの。今一人は赤豆屋清兵衛とて五穀を売もの共にてありける。是ら何のとりゑもありげに見えず。埒のあかぬもの共かなとおもへと、出頭の五郎兵衛きもいる事なれば、おのくくに〇五才〇(図4)切米を給り、おもてむきはあき人にて、御出入の分にきはまり、心やすくとりいりしより、二人見ゆる時は武人不参し。武人不参しつる時は、かならず浦のすが方の行跡、はうらつののよし委細にかたり。今は病身日にそひて、生ながらふべき所存もなければ、主もたぬ身の忝さ。酒に長し妾に足さすらせ。田島を買牛馬をもとめ、史記の貨殖伝をしたひ富貴を子孫にのこさんとのみ、かせかれ候と申ものはかりなれば始のほどはうたがひをおこし、中く油断なき体なりしか。次第に心はゆるみやすく、つとめも



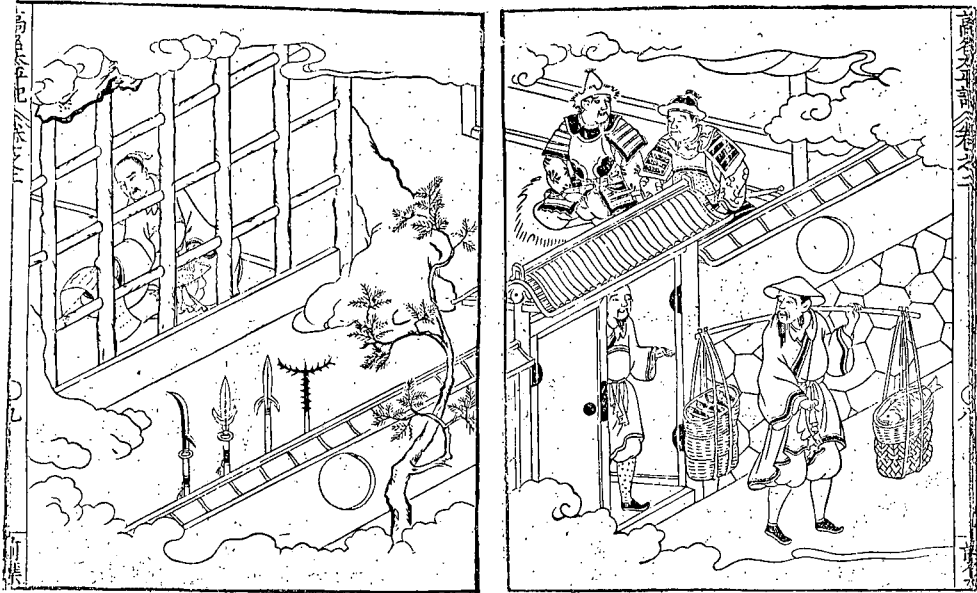
〔挿画〕〈五ウー六オ〉(図4)

夜づめも物うくなるにまかせて。実はかれらが何ほどにおもふとも、浪人の分際、さのみかはりたる事もあるまし。おそろゝにたらずなど、閑居の、つれく暮しかたく、碁双六に長じ酒色におほれ、おのづから油断へ六ウの端となりしも、一つは五郎兵衛か才智より出て、忠節のはたらきは、後にぞおもひあたりける

### ○貨殖伝の事

しのびの者ども。史記の貨殖伝をしたふといひけるは、昔呉と越と国をあらそふ事、年久しく絶ず。ある時は、呉を亡し、ある時は、越ほろぶ。この恨つきさるがゆへに、たがひに軍を練り兵をとゝのへ時をうかゞひて挑ける。そのころの帝を夫差と名づけて、呉の国にあるしたり。越の国は、勾踐と申帝。范蠡といふ臣下に心をあはせ、呉を亡さん事を謀給ひぬ。呉王の臣下には、伍子胥とて智仁勇を、かねしものありて、さまぐと謀をめぐらし、軍勢を手あしのことく、情をかけてつかひしかば、越の臣下范蠡も、尋常へ七オゝならぬ智徳の人なりけれども、軍利なくして、越王ついに呉のために囚給ふ事あり。伍子胥呉王にむかひて申けるは、今越王の軍利なくして、君の御手にいりし事、天のあたへ給ふ所、御運のひらくる時いたりぬ。此たび越王いかに降参申て、永く呉のために臣となるべしと申とも君もちひ給ふべからず。すみやかに勾踐か首を伐給へとすゝめしに、呉王よちひ給はずして、越王を牢におしこめいたづらに日数を送りける。ほどに、越の臣下范蠡、魚完となりて彼越王のとらはれて、歎きまします。獄屋のほとりを徘徊しけるが、人

なき透を見て、一つの魚をとりて、此獄屋になげいれけるを、越王は見わすれ給ひ誰が此うをゝなけ入たりけん。あやしみながら、取あげてへ七ウ見給ふに、彼魚の腹中に、一通の文あり。いよくあやしめてとりあげ読て見給へば、その詞にいはいく。西伯囚二姜里、重耳走二翟皆以爲二王霸、莫二死許二敵とかきたり。此心はそのかみ西伯といひし人の、姜里に囚となり給ひ、重耳といふ人の、翟といふ所に走りかくれし事ありしも、時を得て命を全くせしかば、皆のちくゝにいたりて王霸となり給ひしかし。此ためしをおもひ給ひて、君ゆめく命を軽んじ、楚忽に死罪を願ひ給ふ事なかれ、我命なからへてあらん程は、二たび呉の国をほろぼし、君の御手にいれ、今の仇を報せずしてはおくまじきぞといふ心を、かくのごとくいひ聞せしなり。勾踐この文を見たまひてより、たのもしくおぼしめし、囚となりたる事を恥とせず、いかへ八オゝ(四〇)にもして今一度、此獄屋を出ん事をのみ工夫したまひたり。折しも呉王石淋といふ病を得て、苦しむ事あり。医師のいはく、誰か此淋のあちはひを嘗てみるものあらんや、その味によりて治すべしといひけるを、越王きゝ給ひて、人を以て申ていはく、それがし石淋のあちはひをなめ候はんとなり。さらば嘗させよとて、呉王の尿をあたへけるに、越王又いはく、我君に臣たらん事をねがふかゆへに、かくのごとく尿をなめて恥とせず。我か先祖の廟所を絶て祭る人なからんか悲しくおもふがゆへなれば、あはれ此忠心を以て、命をたすけ国に帰し給へと、血のなみだをながして願ひしかば、呉王此心ざしに感して、



〔挿画〕〈八ウー九オ〉(図6)

二度ゆるし帰しぬ。勾踐本意のごとく越にかへり給ひしかば、范蠡また越につかへ九ウへて、呉をほろぼさん事を謀ける。その折ふし、越に西施といへる美人あり。越王めして愛し給ふきこゑあり。呉王かの美人の事を聞つたへ、越に人をつかはし、西施を、呉につかはし給へと乞給ひければ、越王も彼か顔よきにほだされいささかおしみ給ふ気色ありしに、范蠡いさめていはく、是天のあたゆる時なり。呉をほろぼさんとおほしめさば、呉のねがふ所にしたがつて、此女をつかはし給へといさめしかば、是非なく西施を呉につかはし給ひけるに、呉王此西施か色にまよひて、終に天下の政をおこたり給ふ。臣下の伍子胥いさむれども用ひず。淫乱にして酒に長し。むかしにかはりたる事ともなり。范蠡此おりをうかぐひ。ひそかに軍をもよほし、兵をすゝめて責きたりしに、呉国おどろへ十ノ五オきて、軍兵をすゝめ防たゝかはしめんとすれとも、夫差が心さしみだれて、政あしかりければ、一人もあへて、命にしたがふものなく、つゐに呉国の軍たゝかひまけ、呉王越のためにとりことなり。はじめ勾踐か命をたすけし恩を、今また我をたすけ帰し給へと、歎きしかども越王きかず。夫差を殺して多年の憤をさんじ給ひき。されば是ひとへに、范蠡が忠より出て、二度世にいづる事を得たれば此度おもく賞して大身とし、大国をあたへ永く越の守りとせんとしたまひしか共、范蠡きかずして、重き禄を辞退し、高き位を歸し奉り、そのかはりに西施を申うけて妻とし、功なり名遂て身退は天の道なりといひて、五湖といふ所に引こもり商となりて世

をわへ十ノ五ウゝたるに、大富貴を得たりといふ事史記といふ書に見えたり。今此しのひのもののども、貨殖をしたふといひし事。主君まします内は功を以て身をたて、城没落の刻は、義勢をもつて名遂たれば今は此身をしりぞぎ、世事に心をいゝよしかくのこくと申聞せけりとぞ

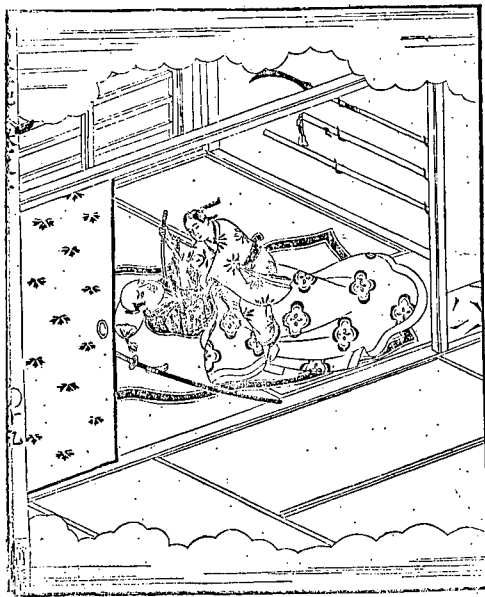
### ○矢田丹三郎忠義の事

今は昔、近町丹六とて按摩、とりありくものあり、経路を取事上手なるよし、そのころのもてはやしおろかならず、かなたこなたの屋敷かた、町かたに出入て、心やすく暮しけれども、いかゞおもひ入けん妻子とてもなく、供の一人もつれざるを、さき／＼の家にても念ころなるかたへ十六才ゝにては、その方の暮しにて、人の吾人武人をかゝへたりとて、さのみなる事もあるまじ、下人をめしつゝ、事人めもあしとならば、しかるべき養子こそよけれ、病いたみの時もしらず、うか／＼と過して、事あるおりに、おもひくやむともかへるまじき、たゞ老ゆくすゑの湯水とりにもなし給へかした、ねんごろにすゝめられ、さる町屋の心やすげなる家にて此はなしをしけるに、此家のあるじ聞て、さいわいの事こそ候へ、爰に父もなくて母ひとり、やもめすみにくらし、御はりといふ事に、かすかなる暮しして居給ふ人あり、そのいにしへは、何とかや、よしある人にておはしける、さふらひの内義とかや、むかしの劔にて今の名は妙雲と申か、吾人の子あり、十はかりにもへ十六ウゝやと見ゆるを、いつかたへなりとも普通の養子につかはすべきよしおなしくは貴殿のやうになる、さもしからぬ身すぎのかたへと望なり、是や似合しかるべきなどゝ、たのもしけにかた

るまゝに、丹六も心うこきて、されはよ此方ものそむ所ぞかし、それを何とぞ肝煎て給れなど、一つ二ついふとせしが、程なく首尾なりてやしない取ぬ、此子また利発ものにて、年よりはおとなしく、よろづにさいかんなりければ、丹六も実の子のやうにかわゆさもまさりて、月日をかさぬるに、此子もまた父の二度帰り給ひつるごとくに、孝をつくし普通といふ事を子心にも、かてんせしにか、母こひしともいはず、明暮丹六かかはからひのまゝに、あんまとりならひへ十七才ゝ灸の穴所をさぐりならひ丹六か所用ある時は、父が名代とて、ちかきあたりはめぐり、按摩とりけるほどの心さし、人もいたひけにおもひて、われも／＼と頼むたり、ひとしほ取さたよく、家業の妙をあらはしける、ある夜ふけて丹六ひとり、寝もやらずともし火のもとに、たはこひきよせ来しかた行すゑの事、おもひつゞけ猶身にとりて大望の事なきにもあらず、とかくと屈託のていを見て、丹三郎父かまへに居たりしが、涙のはら／＼とおつるをおしかくさんとして袖おほひしなからふと立けるを、丹六目はやく見付いかにそ丹三郎、故郷の事やこひしき、我父にかはりて不便をくはゆるといへども、母のなきはいとさう／＼しきものにこそといはれて、丹三郎につこと笑ひ誠によしなき色の見へへ十七ウゝ候へは、さおぼしめすも理なり、さりながら私におゐてさら／＼さやうの未練なる心、つゆばかりも候はず、誠に此ころ仮初なから、親子のけいやくいたし候とて、つねならぬ御慈愛われかたき御事とも、たとへは蒼天のはかりがたきがごとく、報しても報

しかたきは恩なり。しかるにそれがしゆへありて、死のちかくなり候に付、恩を請し日は永く孝をつくさんとする日は短き事をなげき候と。丹六おとろき。何条死の近きとはいかなる事にかと尋ねけるに、丹三郎なくくいひけるは、今は何をかつゝみ申べきもとそれしか父は矢田五郎と申ものにて去年の春まで去方に仕官の身にて、上見ぬ驚とさか多候ひしが、故ありて主人を逆心のものに討せ、憤のあまりそのへ十八才〇仇をむくひんと、妻や子を捨ていくともなく、まよひ出て候、されば、某か母の申候は、汝おさなきとても智あり、智あるもの誰か義しさらん、それ人間の三宝は衣食住をもつて、本とし、福祿寿の三つをもつて末とす、今父この三宝を主君に請、妻子を泰山のやすきに置しか、逆心のものゝために主君を討せ、我三宝のみなかりを絶、されば父此いきどほりによりて、妻を捨てて、身を雲水のさだめなき旅によせ、命を風前のともしびにあらそふの謀をなせり、汝おさなしといへども、男子は家を継て父が忠心の撓るをたむるの器たり、なんぞ老たる母をかなしとして、弓箭の家の業をおもはさるべき、いそぎ謀をめぐらし、父が心ざしをたすけまいらせよと、いさめ給ひつる、一言もたしがたく、跡を、しへ十八才ウ(図6)たひ道をたづねて、二たび父にめぐりあはんとそんし候へども、幼弱の身をもつて、万里のかぎりもしらぬ道に、いたらん事難ければ、仮に養子となり父とたのみまいらせ、此一筋をたのみて、父かゆくゑをたづねたく候といへども左すれば養父の恩をうけ、慈愛のかたしけなき恵を報するに日なし恩を報せんとすれば、武名の我においてつた

なき事をいかにせんと、此二つにせまりて、たゞいまの落涙御はづかし候と、おとなしやかに語りけるに、丹六いよく興さめたるかほつき、何と申そ汝はおそろしき心ねあるものかな、さやうの敵などあるものは、我子にもちて何かせん夜も明ば早く帰しおくるべきぞ、あらけうこつやと舌をふるひけるに、丹三郎色を變じ、仰天の氣しきにてへ十九才〇しばらく物をもいはざりけるが、いかにおもひけん手をつかね誠はさやうの事あるものにも候はず、おぼしめしても御らん候へ、あさましき御針などの世倅風情の、何しにさやうの事候べきなど、いひまきはしけれども、猶心ゆかすやありけん、明日はそれかしも用の事候へは、母のかたへも帰り申べしとて、夜着引なをし丹



〔挿画〕〈十九才〉(図6)

六をやすませ。我も寝るさまにもてなし。しばらくありて。丹六よくねいりたるを見すまし脇指をぬきはなし。丹六か上にのりかゝり。ちかごろ恩を見て恩をしらぬに似て候へども。若気のいたりとして心中の大事をかたり。若世にもれてはいたづらに。存念をむなしくいたし候が。口おしく候へば。たゞいま手にかけ申なりと。さしとをす小腕を丹六すかさずしかと取。むくくとおきておし「甘オ」ふせさてくけなげなる心てい。それほど心ざしなどか無足にさすべき。なるほど汝をともない。父がゆくゑをたづねて得せんさりながら楚忽なる事にてはなきかと。つぶさに様子をたづねけるに。まがひもなき傍輩の。矢田五郎が子なりければ。たがひにそれと名のりあひつれて旅路に出けるとぞ

#### ○足輕の忠節の事

今はむかし。寺中喜右衛門といふものあり。足輕奉公をつとめたるものなりしが。去子細ありて。浪人の身となりけりそのはじめ去かたにつとめ居たりける比。主人。口論の事につきて。討果し給ひしかば。家中の騒動なめならずこれにつきて武士ども。われさきと。城を落て。ゆかりのかたを心がけ。ぬけくにしび帰るもあり。渡り奉公人など「甘ウ」はいふにたらず。御普代ぞ家老ぞと。つねに鼻高にかまへられし人くも。今はの時は本心あらはし。恥をもいとはず嘲をもかへり見ず。おもひくゝのありさまなり。されば喜右衛門も城下の士民に出て。雑兵なみにおもひあなどられし数なれば。何をいかにと噂あるにもあらず。落ば落ぬべき身の。日かすふれども城内をはなれ

ず。ひとへに心つかぬものゝことくなり。こゝに喜右衛門が伯父。伝大夫といひて。そのころ七十はかりの男。喜右衛門にちかき一門とてはこれはかりなりしかば。喜右衛門も此伝大夫を。親とたのみて。万にもてはやし。末のおとゝの十八になりしをも。此かたにあづけ置ぬ。しかも病身なれば物のやうにもたちがたく年ひさしくわづらひけるゆへ。是がゆくすゑのためにとて「甘一オ」喜右衛門わづかなる給銀の内より。すこしの田畠をもとめて弟の養ひに付などして。つねくやさしき心づかひなり。しかるに此たび。喜右衛門彼騒動にも気がつかぬさまにて城内を出ざるを伝大夫氣みしかき性にて。人はしをかけ喜右門を呼よせ。主人もなき城の内に。何のさりかたなき用のあれば。うかくと住事。皆われ人ともに身じまひして利口なるものは早落ゆく中に。見ぬふりして忠節だて。かへつてあほうげに見ゆるぞ。是ほどの事指図請へき事か。こよひにも部屋をしまひ。さうく城を出よと。あらゝかにしかられ喜右衛門しばし詞もなく赤面してゐたりしが。やゝありて申やう。よくおほしめしても。御覽候へ。それがしは元来いやしき士民の家に生れ。何の道といふ事もしらず。忠義「甘一ウ」のかたはしをも弁へしりたるにあらず候へとも。先年都より太平記の講釈をいたし候とて。参り候ものゝ詞に。人の道といふは。親子の間むつまじくして孝あり。君と臣との間には義をもつてするより大きなはなし。されば臣としてはもつらは忠と義をもつて。君につかふまつの物とかや。此ゆへにいにしへの伯夷といひし人は。その君にあらざれば仕へず。悪人の朝に立す。悪人と物いはずと申事



を。唐の人もほめ敬ひて。書物にもしるして日本にも渡し我が朝にも又これをほめて。今の世までも人をおしゆるの的とし侍る。しかるうへはそれかしも。身はかすならぬ足輕なりとも心はなだか武士の心にうつさばうつらざるべき。此心をもつて。恥ある上くの人たち。打より主人のあたをむくひ候へ廿二オはんとその事も候とかや。うけ給り候へば。われらもほそ心ざしを以て。主君への忠をたてんと存るなれば。けふまでも城を出す候と。理をつくしていひ聞せけれども。伝大夫ゆめくせうゐんの色めなく。大に色をそんじ。何といふぞ不孝ものそのもろこしの事は。しらず。八まん大ぼさつのしんたくを聞ずや。他の国より我國。人のおやより我おやとの給ひしそやいらぬ汝か忠義だてして。伯父親の不孝は何とするぞ。おのれ今宵の内に城を出すは。七生までの堪当ぞと大にいきりけるまゝ。喜右衛門ぜひなく立ちへり。あらましの物とりしたゝめ。城を出て宿にはこひ。さあらぬ体にもてなし一日二日すくして。又城中にかよひ。さま／＼忠貞の心をつくすある日相談のうへ連判の事ありて。夜にいりければ。心なら廿二ウ。ず城中にあかし。翌日宿にかへりけるを。伝大夫かねく。城中の武士と心をあはせ。さらに身上のかせぎを。心にいれざるよし腹立のうへ。此夜の事をなをくいきとをり。不孝ものゝ喜右衛門。とても死神のつきて。ものにくるふ奴。いで物見せてくれんと。病ふしたる喜右衛門が弟を。高手小手にいましめ。喜右衛門か前に引はり。何と伯父親の命にしたがはずして。死を好むゑせもの。城内のあほうととも。同じやうに忠義をたて。此やうなさまになり。そのとき

おもひしれやと。ぬき討に弟が首。水もたまらず討おとす。なを腹やみさりけん。喜右衛門かはこびたる。着類ともひき出しさん／＼に引やぶり。おとりあかりて土足にかけ。喜右衛門が生つらを。二つ三つ蹴あて。おくに入しありさま。物がつきて廿三オ。狂はするとぞ見えし。喜右衛門今はかんにんしがたく。すゝむなみだをおしかくし。いや／＼是も大事のまへの少事。とてもすてたる一命ながら。一たび主君にたてまつらんと誓約せし命なれば。われながらわが物にあらざと。むねおしさすり。すごくと。城内にたちかへり。これよりいよく義心ふかく。城没落の後も。いよく忠の心ざしを見せければ。本意をとぐる時節も。一かたならぬはたらきあり。殊に敵の城のりせしにも。敵もし城の外に伏勢ありて。跡より味方に。まぎれ先後をつゝみて討事もやと。たゞ一騎屏のうへにたちて。斥候してゐたる事あり。かやうの勇士をそのまゝにて。足輕にせんも本意にあらずと。家臣大西何かし。亡君の御廟にむかひ。御存生の時のごとく。喜右衛門事を廿三ウ。申おろし。侍ぶんにいたしけるよし。君ききたれば臣もまた臣たり。これらや誠の勇士なるべきと。その比のとり沙汰なりさりながら此喜右衛門。敵の城を乗とりて後。かいぢんの刻何とかしけん。高塀より飛おるゝとて。こしのほねを打そんじける。人／＼たすけかへて。その場は事ゆへなく立のきしかとも。行歩かつてかないがたく。ひとつは弟が最後の事など。おもひつゞけし心のいたみ。かれこれにやまひ付程なく世をはやうせしゆへさのみ忠義をする人おほからずとかや

高名太平記

○卷之三

浪人の妻奉公に出たがひに義をたつる事

詩の心によりて寵愛にあひし女の事

偏執にて忠義に心をきあふ事

不破笠右衛門徳義高かりし事

城下に火事ありし節諫言して主人に

目見えを乞し事

牢人となりて後亡君の廟所にむかひ

御扨氣を申なげく事

忠儀によりて科をゆるされし事

茶の湯者不寒武士の義を立る事

矢川三平大氣にて馬をとらるゝ事

落城の刻人の命を預る事

高名太平記卷之三

○奉公人の女たがひに義をたつる事

今は昔、さる人の妻女、夫のために義をたて、敵の家に宮つかへし。

高名太平記

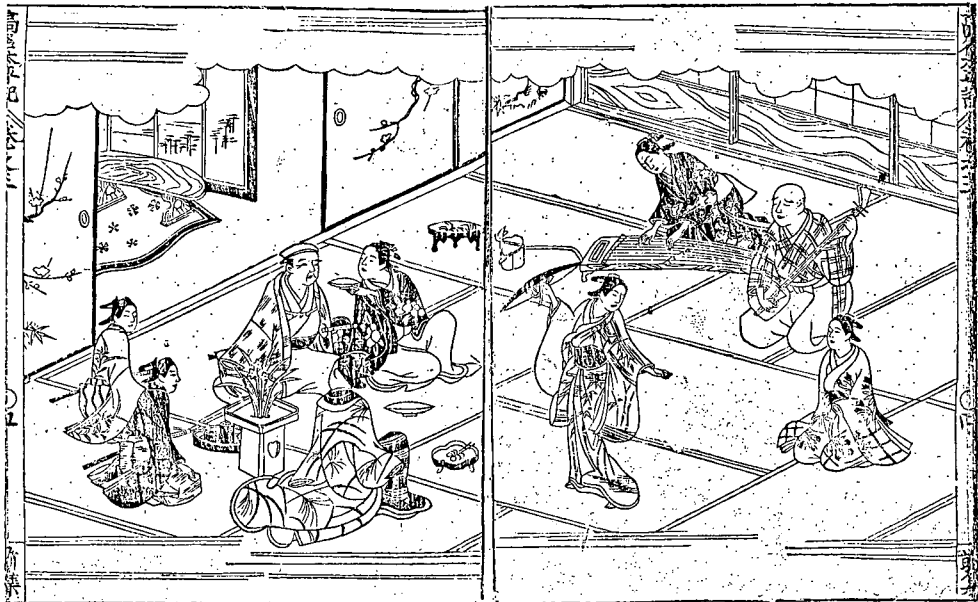
〈廿四終オ〉

〈一オ〉

〈一ウ〉

内通のたよりとなれる人あり。一人は種の御方といひ。今一人は磯の御かたといへり。二人ながら容儀よくよろづの道にかしき。才韓のきりやうありしかば、ともに奥がたの氣にいりて、御かたはらをはなれず。新参のものなれども、物になるべきものとて、殿の御目にもとまりけるゆへ、をのづから傍輩とちもかろしめす。利発の人みなれば、そねまるゝ事もなくて、日をかさねける所に、ある夜時雨はれて、木の間の月、あかゝと光、さむぐさしのぼる氣しき。ものさびしきにあくがれ給ひて〈二オ〉御おくかたの御まへに、人くをあつめ、歌がるたとらせ脇息に肱かけてながめいり、つれくとなたらせ給ふ折しも、殿の御わたりのよし、けいひつのおといとしのひながら、物あはたゝしく、とりちらしたる調度など、おしかくし、歌がるたもそこく、けうかる中をふみわけて、はや御つま戸口まで御なりありけるが、かくおもひかけず殿の御いりを、人くの立さわきつゝ、かくれまどふを、殿にもおかしとおほしめさるゝ氣しきなり。かくて御まへには酒などまいらせあけ、御かゝゑの座頭、御そばちかくまいり平家一二句すみて、しやみせんにつり、当世の小歌上かたのはやりぶし、さまゝ手をつくして、おもしろきあそひなりける。やゝその夜もふけすきぬらん〈二ウ〉ちかき遠き寺くのかねなど、心もなくひゞきわたるを、殿の御みゝにきこしめし付られ、いあいじのかねもかくやと、仰られたるに、磯の御かたふと立て、御まくらをすゝめたてまつりければ、殿は御心もつかざりしにや、御当話もなかりけるを。御かたはらにありける。何かしとかやいふ小性、枕をそばだてゝ御き

もやと申上しに。殿うちゑませ給ひて。礪はしほらしき心入のもの  
 かな誠に朗詠の詩をふと思ひ出て。遺愛寺といひしに枕をすゝめたる  
 は。近比のはたらき。いにしへの清少納言にも。ひとしほの御機嫌な  
 りける。此ころは。朗詠の詩に。遺愛寺の鐘の聲は枕を敲きくと  
 白樂天か作りけるを。おもひよせたりけるゆへとそ。殿はこれより此  
 礪の「三才」御かたに御ころをよせられ。ひたとめし出させ給ひけ  
 るより。いよくの御まへよしとなりけり。かくてかた時も隙なきこ  
 ろ。礪の御かたの宿よりとて。御ふみありしに。種の御かたこれをふ  
 ところにして。みづから礪の御かたの部屋にゆき何かのはなししめや  
 かに。わざと少夜をふかしすぐして。ひそかに礪の御かたのそばにゐ  
 より。さても此ほどその御ありさまを見まいらせ候に。何とも心え  
 がたき御事のさふらふゆへちと御内意をうけまいらせたく。わざと人  
 つてなれて。御ふみのとり次をも申するなり。そのゆへは。もと童も  
 御身さまにも。身の望ある御事御ぞんじのまへにて。彼事のひとつを。  
 夫のかたへ申さんとの。誓紙もほうごにはなるまじく候に。などやら  
 ん「三ウ」御まへの御用などもしげく。奥かたの御つとめならでも。  
 御夜つめあるよし。さなきだに男の心は堅て変じかた。女はかた  
 むきやすくして乱にちかしかやむかしの人も申てさふらふ。われも  
 人も貞節の道を心がくるとはいたし候へども。色のひとつには何とな  
 く。むつまじうなるならひに候。よもや御まへの今の御ころにては。  
 中くさやうの事あるべきにはあらねと。御前の首尾よろしきに付て  
 は。みだりかはしからずおはしまし候様にとのみ。おもひ参らせ候よ



〔挿画〕〈四ウー五才〉(図7)

し。ねんころに申されしを。礪の御かたつくくと聞居たりしか。さればこそ是は種の御かたの。我出頭をそねみおもひて。かゝる詞を出し給ふにやと。さればに候。わたくし事。数ならぬ武士の家に生へ四オ(図7)れ候へども。さほどの事わきまへしらざるにもあらず。さりながら此ごろいさゝかの事につきて。殿の御もてはやし他に異におはしまし候事。身にとり候て一つはめうがにかなひ候やとぞんしさふらふ。そのゆへはそこもとわたくしも。あさましくさもしき。宮つかへに出候事。御おんうけ候君のため身のため。恥ある武士の矢たけころに。何とぞしてとおもひたれ候妻のために。しばらく此屋しきにいらたち候なれば。いづれの道により候てなりともしたしく心やすきかたにとりいり候はゞ。打とけたる内くの首尾もなどや知らで候べきなれば。よそめにはともいかにも見もし。つゝやきもいたし候へ。此身さへ清くもちかため候はゞと存るに候と。おとなしうはいひながら。なをうしろへ五ウめだけにつゝましなければさのみいふ事もおほからずしてわかれぬ。かくてよりのちは。たがひに心をきかほに。おのづから疎くもあらねど。まじはりも間どをに。礪の御かたはいよく奥の御まへにもしげくめしまつはされ。御なりの夜はなを隙なき身となりて。いやましに遠さかりぬれとも。をりふしの音づれば絶ざりける。種の御かたにはさればよあやしとおもひしもたがはず。かくて殿の御てうあいもひたすらならば。此手だてのひとつもいたづらに。もらすとはあるまじけれども。内くの首尾よしあしに付ては殿をいとふ心もあるまじきにあらずなど。女ころにおもひうんぜし

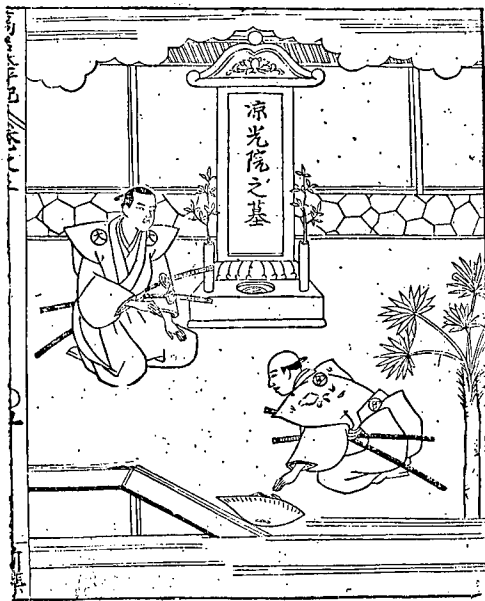
かば。我身ひとつに心をつくして。たがひに隙をうかゝひけるが。此人くの夫とも。時ありておのくへ六オ討いり。永く本望をたつしける比めいくに出たちければ。一所には出あはずありしかども。二人ともにいさぎよく奥より切て出つゝ此夜討をふせぐ躰にて。城のあんないはしたりけるとそ。

○不破笠右衛門忠義ある事

今はむかし。不破笠右衛門といふ人あり。そのかみ去大守に仕へて忠勤のさふらひなり。主人此人の忠義ありて又徳量の高きを愛し。次第に引あげ給ふかゆへに。新参よりぬきん出。百五拾石の禄をいたゞきて。いよく我をつゞまやかにし。めしつかふもの。それく忠あるを賞し。なさけありて恩をほとこせしかば。名譽日にそひてあらはれ家門年ごとに賑ひけり。ある年。城下に失火の事あり家中へ六ウのめんくをははじめ。おのくかけつけて早速に此事しづまりぬ。されば此さわぎによりて。主人も先山屋しきへ立のき給ひたりしかば。一家中のめんく。御山屋しきへ馳むかい。御悦を申さんとして。我さきと馬をはやめけるほどに。彼山屋敷の門前には。馬人市をなして。いやが上にむらかりたり。されども御門はいまたひらかれず。主人は亭におはしましけるよしにて。御門外よりはるかに見上て。おのく頭をさけ御取次をもつて御よろこびを申いるゝなり。笠右衛門も御目見へのため。此所にきたりけるが。御門外にたゝすみ。立はたかりて中く御礼を申さず。しはらくして座につきたれとも。なを御よろこびを申出すにおよばされば。亭より。主人はるかに見おろしへ七オ

給ひ御取次をもつて仰いたさるゝは、城下の失火事ゆへなくしづまりぬ。これによりて家中のめんく、その悦をいはんため、さいぜんより馬をさせ、取つぎをもつて右のよろこひを申通するの所に、汝一人さいせんより来りて、目通りともいはず、無礼をつくし、猶一言を申しださるゝは何事そと也。笠右衛門つゝしんで申やう。城下の失火と承り候まゝ、沓をさかさまにして、早速馳さんじ候事、御安康の御ありさま、拝見いたすべきために候事、それがし一人にかぎらず家中の衆中もつて同事、しかるに御取次の口上をもつて、愚心をさため候はん事、誠におほつかなく存ぜられ候が、全くかやうに申候へばとて、御取次をうたがふにあらされとも、理の当然を御監察下さるべきへ七ウゝよし申しれしに、主人その心ざしを感せられ、最初よりつめたりし、人々をはじめ、一同にめしだいし、御目見へ仰つけられ、そのうへ笠右衛門に当座の御加恩として、五拾石給り先知あはせて貳百石の身代とぞなりにけるされば此よろこびとして、手ぢかくめしつかひける。小ものはしたまで旧功のものにも、それゝに恩をほどこし、引あげて侍としなど残りなくさばきしに、笠右衛門が譜代のさふらいなりける。専十郎と聞えしものは、就中笠右衛門が父より、つきしたかい、影のこづくに付そひて、もつぱら律義のものなりける。専兵衛といひしものゝ子にて、これまた忠義を専とし、いさゝかも落度なきものなり。大かたは家中の取さたにあふほどの器量なれば、主人もかねぐはへ八オゝしり給ひし事なるに、此加恩のよろこひによりて、それゝの恩賞をわかちおこなふ数にもるゝのみか、半月ばかり、あり

て専十郎はひまを出され、浪人の身となりて、いづくともしらず、なりぬと、ひそゝと爰かしこに噂あり、つゝに事ひろくなりて、主人の御みゝにたつ事あり、主人これをきこしめして、御本意に違ふ事ありしかば、譜代旧功のものを追出し、新参のものを引あぐる所存、依怙のいたす所と、ふかく御にくみありて、笠右衛門もほどなく御勘気を請しばらく浪人のごとくになり、町屋にひきこもりて居たりける内、此主人不慮の事につきて、口論を仕出し敵のためにむざくと討れ給ひぬ、笠右衛門此事を聞とひとしく、とる物もとりあへず、家臣大西浦之介方へゆき、それへ八ウゝ(図8)がし儀御ぞんしのごとく、御かん気をかうふり罷あり候、主人御在世の内は、さりとも一旦は此



〔挿画〕〈九オ〉(図8)

御なげきを申ひらかんと存まかりある所に、御ふりよの御仕合ゆへ、御赦免のねがひも絶はて、あけくれ本意なく候て、悲歎のなみだにくれ候所に、内くおほしめし立れ候事、おのくこれあり候よし、ほのかに承りおよひ、優曇花の心ちいたし候、哀此たびの御人数にめしくわへられ、主人の御厚恩をも報しさせて給るまじく候や、左候は一命をすて、黄泉のそこにて、御勘氣をも御赦免くだされ候様に、御なげき申上たたく候かと、誠に余義もなけに申ければ、家臣浦之介涙をこぼし貴殿さほどにおほしめさるゝ条、日ごろの御行跡も粗ぞんじて候うへはまことに悦び入ぞんじ、殊には忠義のほども感じ入候へばへ九ウ、幸明日は主人御忌日に候間御廟所へ御さんけい候へ尊靈の御まへにて、御わび事申候へし、そのうへにてはともかくも申あはせその翌日笠右衛門を主人の御廟にともない、まつ笠右衛門をかたはらへしのはせ大西ひとり廟前にひさまづき笠右衛門義御かん氣の事ふかく愁歎仕り、わたくしまで再三御ゆるしの御ねがひを、願ひ奉り候よし、くれぐれ歎き申候まゝ、何事も御宥免あそばされ下され候は、ありがたく存じ奉り候べしと、主人のおはします時のごとく、つゝしんで申上、しばらく平伏して後、笠右衛門を呼びだし、此たび貴殿御なげき候よし、主人もきこしめし上られ、御かん氣御ゆるし遊され、先知のとをり式百石くだし置くゝむね、仰出され候、その意趣は、先頃御家来専十郎義、旧功と申殊にへ十ノ五オは忠義たぐひなきものと、御耳にも立候ほどの事に候を主人御加恩のきざみ、彼一人取たてにもあづからず候よし、ほのかに聞しめさるゝさへ、いかば

かり仕落の様におぼしめされ候所にあまつさへ暇をくれられ候事、御目かねに違ふよしに候ひしゆへ、しばらく御勘氣候ひしなり、然る所に貴殿事、主人御不慮の御仕合ありて後、おのく存念これあるの刻より、早速に一味たるべき御ねがひ候といへども、いまだおのくの心底さたまりがたく、人数にくわへかたく候おりふし、先年御隙出され候専十郎、出家いたしそれがしが宅へまいり、私事笠右衛門手まへいとま遣され候以後かやうの体とまかりなり候うへは、重ねておのくに面をあわせ候も、恥がはしく候といへとも、主人笠右衛門此たひ御勘氣の御ねかい申候よし、是元へ十ノ五ウ来わたくしゆへに候間、身のさんげをもいたし、恥をあらはし主人のあやまりなき程をも申ひらき、存念のとげさせ度これまで参りて候と申に付、次第をうけ給り候へば、一とせ貴殿御供の事ありて主君の供奉をつとめ、在鎌倉ののりふし、専十郎いまだ廿八才にて路銀のまかない役を請とりしが、与風あやまりて欲の心をおこし、私の要用のために、金子拾兩を掠めとり、帳面をくらましたる事ありけるを、主人物かけより此事を見とゞけ、後くらき仕かたと存ぜらるといへどもあへて露はかりも、心より外に色を見せずして、既に七年を経給へり、かゝる程に先年大守より御加増まし／＼ける悦を家来ともに配当し給ひける時、此専十郎には加恩なき事を歎き日へ十六オを経てみづから歎き申ける時、主人はじめて此事をかたりなんそや盗みせしものに恩をあたへんや、汝われにつかふる事、年ひさしく、忠義また外に越たり、我しらざるにあらずさりながら我七年を経ても露その事をいはざりに、今すで

に時あり。此事をいはずしては心さはげがたし。汝か悪事をいひ出し  
つれば、汝また我に恥る心あるべし。所詮旧功の恩に錢五貫文をあた  
ゆべし。これをもつていつかたへもたちのき心まかせに身をよすべし  
との。主恩かたしけなく、やがてかしらおろして此ていになり候主人  
笠右衛門身においてすこしも私の政道これなきうへは今一たび御かん  
氣のねがひを申ゆるし。何とぞ存念をはらさせて給り候へと。申おき  
て後とゝむれども聞ずしへ十六ウへていづくともしらず歸りて候。此  
人ありて、此下人あり此主人ありて此忠義をうけ給る事。めづらしき  
事ながら。あはれ御運こそつたなけれ。主君いまも御在世にて。かゝ  
る事きこしめさば。なをく御立身もあるべきに。それがしさへ此て  
い。何事も夢にこそとて。家臣もなみだせきあへねは。笠右衛門も詞  
なく。ともになみだにむせかへり御廟に焼香たてまつり。なくく宿  
へかへりける

## ○茶湯者不寒義をたつる事

今はむかし。矢川三平といふ武士ありけり。去大守に仕官し。徒小性  
をつとめたる人なり。子細ありて敵をねらふにつき。浪人して爰かし  
こ。うかれありき付ねらひけるか。年月をも経ずして本懐を達しける  
に一人二人へ十七才のみか。此かたき討には一味のともがらも多く。  
大せいの事なりければ。いかにことのふしのびかたく。却てねらふと  
も此人数ことくく討いるべき事は。ありかたきものなるを三平ぬき  
ん出てよき謀をめぐらし。多勢をおもひのまゝおし入たるは。敵の  
あんないをよく。窺ひ知りたるかゆへなりそのゆへはいかにとたづね

けるを。彼三平そのかみ仕官の身なりし時物まふでたりけるに。わた  
くしの用といひ。御用しけき身の事なりければ。わつかなる隙をくり  
て。馬に打のりつゝ。一さんにとかけさせて出たりしに。むかふより。  
あはたしく。人の来るあり。これもさふらひなりけるが色がへし  
てはせきたるは。たゞいま事にあひたる氣しきかと思見るに。よそめも  
ふらずつかくと。三平がそばにへ十七ウへ来り。乗りてはせゆく。  
馬の口をとらへ。うれしや此馬にてありけりとひきすへて。三平にむ  
かひ申けるはちかごろ卒爾の申ふん。いかゞと存候へとも。それかし  
義は。福岡嘉右衛門と申候て。何かしの許に相つとめまかりあり候。  
此ほど旦那さるかたにて。馬を所望せられ候。すなはち毛いろは。ひ  
はり毛にて五寸の馬。しかも此馬にて候。を口とりのおのこ無功ゆへ。  
とりはなし候て今日までしれ申さずさるあいだそれがしも。その日の  
使者をつとめ候に付。同じつみにおとされ此馬のゆくゑしれ申までは。  
かくのごとく有かをさためず方くと浮雲ありき。いづくまでも尋ね  
て主人への申わけいたせと。その場よりかやうの体に候なり定てそこ  
もとには御もとめ遊ばせし馬なるべく候へへ十八才へども。たしかに  
此馬にて露まがふべくも候はねば。御ことはり申候て是非に引歸り申  
かくごに候と。息もつぎあへず申かけしに。此三平が乗たる馬は。父  
三左衛門時分に。三平はしめて元服せしころ。御目見へ申せし時節。  
主人より下されたる馬なり板倉といふ名馬なれば。似てもつくまじき  
そら事なりしを。三平何とかおもひけん。つくくと顔をまもり何が  
さてさやうの様子うけ給り候て。子細におよふべき事に候はず。なる

程貴殿の御目かねにまかせ。馬ははなち遣すべし。御難義の段。さつし入候。しかしながらもし此馬。その御とりはなしの馬ならずと申事も候は。何かしが家来矢川三平と御たつね候て。早く御かへし下さるべしと。ねんごろにいひてわかれ。その身は歩行にて。参詣せしを。供せしものへ十八ウゝとは心得ぬ事にぞおもひける。かくて程を経ける内。三平が仕官せし主人。さる子細につきて人と口論し。あへなく討れ給ひしかば。一家中のものども。一揆をおこし。城を枕にしてたてこもり。敵をこなたへひきうけてや戦べき。又はおもひくゝに。しのび入てや殺すべきと。評議まらくなる所へ。いつそや途中にて。馬をもらひかけたる嘉右衛門。かの馬をひかせたつね来り。大手の木戸口へたゞ一人あゆみより大おんあげて申やう。折ふしと申御用心の節に候へは。態と直に推参申て候。此御城中に矢川三平どのと申御かたへちと御対談の事候て。福岡嘉右衛門と申もの。これまでまかりこし候間。木戸をひらいて御とをし候へと。高くと申入れば。三平いそぎ衣紋つくりい出むかい嘉右衛門にへ十九ウゝ対面しけるに。嘉右衛門がいはい。さてくいまさらに御意得候も御はづかし。おそれ入て候へども。いつぞやは拙者め。ぶねんゆへ。そこつの御所望申。御大事の馬をもらひかけ候ところに。何のせんさくにもおよばずやすくと下され候事今さら申も慮外ながら。寛仁大度の御しかた。それにつきても御はづかしや。右の馬を引かへり候所に。さき立て口とりの男。最前の馬ぬし方へまいり。御なけき申さんと道よりひきかへし候ちふん。彼馬ぬしより右の馬ひとり。いつとなく馳かへり候よ

しにて。人をそへ主人へをくられ候により。いよくそれがし無調法に極り。御屋敷は追放せられ候おわん。今はいつかたへ参り候へはとて。さふらひの一ぶんは立がたく。此おちどは。すゞぎかたく候まゝ。所詮せつふくとそんじまかへ十九ウゝ(図9)りあり候へども。先御馬を御返進いたし。そのうへの事とぞんじ定めこれまではるくたづねまいりて候。右の馬を御うけとり下され候は。もはや此世に心かゝりも候はねばはらをきり申たく候まゝ。此うへの御芳志に此事御聞わけ下され候へと。なみだをながし。恥いりて申けるを。三平つくくときとどけ。さりとは御神妙の御心ざし。誰とても心せく時は。さやうの楚忽あるまじき物にても候はず。それは時の不運と申ものに



〔挿画〕〈廿オ〉(図9)



て、一たび落度あるを恥て、心しづかならざる時はなをあやまりをかさぬる事、人情のつねに候なるほど右の馬は此方おぼえある馬に候へば御そさうとは存候へども、自然此馬にて、事あいすむ事もあらば当座の御難もすくはるべきやと、存の間、しばらく申へ「廿ウ」わけもいたさす候、さやうに候はざるほど馬は請とり申候さりながら、御切腹の義はしばらく、それがしあづかり申たく候といへば、嘉右衛門きよつとして、何と仰られ候ぞ拙者が切腹はしばらく相延候へとや、それはちかころ御なさけなき御事、もつとも武士たる御かたへ、筋なき無実を申かけ、よこしまに馬を申請たる御いきとをりに、生もせず殺しもせずして、諸侍のめの前にて、物わらひとなされんためか、たゞいまゝの御心ていと拔群のちがいと申物也、たゞとにかくに此うへは、御腹のい申やうに、御手にかけれなりとも、又は御家来中に仰られ、首をめされ候へし、これほどの不覚を仕出しながら、自身死すべしと申により、御ふくれと見え候、すこしも御うらみこれなし「廿一オ」と、みづから大小なけいたし、首さしのべていひける時、三平なみだをはらくとながし、さてく今の御一言身にとりて大悦、それがしを人と御らん候こそ、かたしけなく候、いよくしかと御命は捨られて候かといふに、なるほど捨て候と、こたへし時、三平またいはく、さてはたゞいま迄の越度ゆへ御主人より追放あれば、もはや御一ふんたゝぬゆへ、命ありて詮なしと、是非なくおほしめし立れ候かといふ、嘉右衛門がいはいく、主人手まへは右の越度ゆへ、追放にあひ候へば、いきてつらをさらさんも口おしく、一命ははや捨きりて

候、しかしながら貴殿の馬を帰し申までは、かへつて命おしく候ひしそのゆへは御当地の御主人ふりよの事候ひて、人のために御逝去のよし、敵はいまだ安穩なれば「廿一ウ」おのくもつて御存念の残るは治定、しかる時は自然それがし、御馬をかへすべきために、御当地へまかりこす内、不意に義兵をおこされ戦場となり候時は、それかしも随分味方にまいり、一たび馬を帰しわたすまでは、何分はたらきて、此いのちは全くもち申心に候ひしなり、これ義をおもんするより、事にのぞみては、貴殿のためにおしみたるの命、本望たつしぬれば早いらぬ命にて候へば、此たび籠城の御味かたにくはゝり、義戦をとけて、貴殿のために命をすてたくは候へとも、とても無骨のそれがし心ざしの程をつくしたりとも、無実を申かけしほどの者としてよも御承引あるましければ、たゞ御家来に仰付られ首をめされ候へと申事に候と、二心なきいひぶん、三平へ「廿二オ」かく居よりて、小声になり申やう、先それがしか方へ御一命を給るへき御心てい、ちかごろかたしけなく候、さやうに候はゝ、とても御すて候御いのち、それかしが申やうになされ下され候へと、みつくくにいひあはせ嘉右衛門を法鉢させ名を不寒とあらため、茶の湯者にしたて、敵の城下に、かすかなる庵をかまへさせ、茶道の一とをりを指南する、遁世者につくりなし、そのあたりの若ものどもにおりふしの手まへをまなばせ、よろづに風流をつくさせけるに、不寒も元来ゑせものにて、何事にもさし出がちに、見すくさぬ本性、しかも才知ある器量なれば、何かにつきても、しほらしく、作意はたらきて、一輪のはなをあへしらふにも、おもしろき風

景をうつしけるになつて、そへ廿二ウの辺のすき人とも、おのづから此家にたづねまふで、茶通のいきかた、風呂のかざりかこひの普請するにも、不寒りうとて、そのころのもてあつかひ草となりしをいつとなく彼屋しきにも聞つたへて、手まはりの小性をはじめ、一人くといり来りしたしみをなしけるが、はてくは主人にもゆかしがられ御目見へ事ゆへなく、相済、茶の事ども一つ二つとひきかれけるより、これもおもしろき行かたとて、とりわきねんごろにめしよせられしより、事おこりて、今こそとおもひしかば、三平かたへも兼て内通ありければ、さてこそ此屋かたに茶の湯の会ある夜を心がけ、おのくしめしあはせてしのびいり、終に本懐をたつしけるなり

〈廿三終オ〉

## 高名太平記

### ○卷之四

八田兵助他の契約違変せしを恨て病死の事

同名兵七古今のためしをひいて父を諫る事

並 父が心ざしを継て忠義をつくす事

頼朝範頼義経兩人に對して軍配替事

楠と義貞の事付りみなと川にて

正成うちしにの事

娘子軍の事付り孫武か事

吳王闔閭孫子をめして軍法を見給ふ事

へ一オ

帝の妃百八十人を出して勢そろへの事  
金岡伝五主人の敵をねらふ事

僕源助忠節の事

太平記講談の事

伝五主従講尺によせてたがひに義をたつる事

夜討の節源助殊に忠をつくす事

敵討の後主人の行衛を聞て源助殉死の事

へ二ウ

## 高名太平記卷之四

### ○八田父子忠義の事

今はむかし、八田兵助といふ侍あり、さる大守に仕へて、勘定役をつとめたる人なりしか、ふとしたる事につきて、叛逆のものゝために、主人を討せ、その仇をむくひんために、家臣大西と心をあはせ、一揆の党をむすひ、旗をもあげんとせし程の義士なりしか、事違変おほく、衆議まちくにして、首尾しがたく、つゝに落城して敵の本意となりけるを、無念の事におもひ、いよく大西をすゝめて、なにとそ此存念をはらせ給へと、忠義の色顔にあらはれ他事なく一人たちて、一揆のかたへもたがひに書簡をつうし、此はかりこと、もれさるさきにと催促せしに、家臣浦之助その心ざし変しかたきを感じて一揆のもへ二オのどもいひあはせ、神水をのみ、誓約を堅うして、おのく郡中に散居し、折をうかゝひ居たりけるか、何とおもひ定めたりけん

家臣浦之助・日ころ申かはし。取をきたる誓紙ともを封し。状をそへてめんくの方へ返してはいく。それかし一たひ主君の仇を報すへしと存。おのくと心をあはせ。しりそいて事のやうをあんじ候に。敵はいよく勝にのりて威勢つよく。要害にたてこもり。日夜に心くばりて軍に利あらん事を謀り。味方はわづかに五十人にも足へからずあまつさへ大將を失ひて候へば。たれありて指揮すべき器量の人もなく。たとひ軍配をなすとも。士卒の心またはかりかたければ。法令おこなはるへからず候。なましに此残兵をもつて。勝ほこりたる大軍の中へかけ入候は。身は金鉄をまろめ。十死一生の戦へ二ウをもつて。一人千騎を伐の勇士なりとも。なしかは本懐にかなひ候へきなれば。先これまでは家の名を重んじ。武士の義をかへり見ての事に候。向後それかしにおみてはいらさる。浪人かた氣をやめ。何方へもよろしき方につきて。身上のありつきをかせき申へしと存立候。且は一子何かしか事不便に候ゆへ。これをも心よくかたつけ申たき願ひに候へば。自然おのく方にも。よろしき事候は。御申きかせ頼のよし。くれくと書て遣しける。そのころ兵助は病氣にて。打ふし居たりしか。此文を見るより。大にいきり腹立のあまり。むくくと起て。子息兵七をよびこれ見よや世の中に。忠義たてをいふものはおほく。さしあたりて一命を捨るものもなきそとよ。かく一国一城の君に臣たりし身の。禄をむさぼり恩をかたしへ三才けなうして家中のものに崇敬せられ。日ころ極真丁寧の人よと。我目にさへ見置たる人の。かやうにたましいのくさりたるは何事ぞ。人面獸心とて。これらは人の皮

かぶりたる畜性そかし。よしく人と談合せねは。敵といふものは討れずや。いさおのれも尤とおもは。跡よりいそいて追つくべしと。太刀おつとりかけ出んとす。兵七はことし十五才なりけるか父かたもとにすかりつき。こは御短氣の御しかた。むかし吳王閻闔か。孫武に娘子軍を以てせんといひし類をおほしめし出されば。そのたはふるにしがひて。しはく忠義の色を見せ給は。人としてなんぞ義心動さるものあらんや。これひとへに右大將頼朝の。平家ならひに木曾を誅伐ありける比蒲冠者範頼にむかひて。将たるものはみづから太刀うちを好へ三ウまさらんものを將としては。諸軍たれか先にすみて。たかふものあらんや。されば戦場におもむき給は。かならず兵にさきたちて。みづから軍をしたまへと教られ。同じく兄弟なれとも九郎義経には。軍の事と殿にまかせ参らせ候謀よくくせさせ給へ。但し將たるもの兵にさきたちて軍し。射合切あいをこのまん事。不覺の頂上たるへし。自身は後にひかへて。さきかけの者どもの。高名不覺をも見。軍の法を重んじ。敵味方の強弱をも。よくはからひ給ひてこそ。軍には勝ものなれあなかしこみづから。太刀うちなどしたまひそとのたまひしとかや。兩人の將にむかひて各別の教訓いかぐとおもふに。範頼は心おくれ給ひ。義経はあまり心の剛なるゆへなり。今家臣浦之助勇氣たゆみてへ四オそのころおくれたるかゆへに。此比興を申せしなれば。一旦の怒によりて。我父また義経の勇氣あるに任せ。はやまりて事をしそんじさせ給は。臍を嚙の悔あるべき事。たなころをさして候。されは楠判官が。常に諫言をくわ



〔挿画〕〈六才〉(図10)

へ・義心をはけまして候へども。新田義貞不幸にして用る事あたはず。戦ふべき図をはづす事たひくなりしかは、湊川のたゝかひに。くすのき先死して義をすゝめけるに。義貞おほきに仰天し。さてはきのふ打死の事おもひとまりしといはれしは。義貞をたばかり給ひてげり今朝の軍の立やうふしんに思ひしかとも。いまゝて偽なかりし正成のよもやとこそおもひしに。よくも義貞かいくさの成敗をさみし。いきとほり給ひてけり。此正成を捨てこへ四ウゝろして。誰におもてをむくへき。誰もく打死の心さしあらんものはつゝけやものどもとて。軍のそなへをも見ず兵に下知をもせず。馬にむち打て懸給ふを。由良長浜かいさめにより。天下の大功をなさんとおもひ給ふ人。かほどの小事

に討死し給ふ事や候。正成かとふらひ軍とおぼしめさば。兵をそなへ軍兵を下知して。敵をほろぼし給ふやうにこそあり度候へと申せしかは。義貞も実とおもはれけん。さらば兵をそなへ。行あふまでむかへとて。軍令をくだし兵をとゝのへて。責かゝり給ひしかとも。此動転によりて。いくさなどいづにかはりて。拙き事ありしよし物にするして龜鑑とせり。父今家臣より書翰をもつて。約を変するの使あるを信し。その実否をも。はかへ五才りしらず。一旦のいかりに楚忽のふるまいしたまは。誰ありて君か黄泉のいきとをりをやすむへき。先御ころを静られ。なをく。一味同心のともからとも。深く謀り忠を探りて。そのうへに家臣浦之助が館へも立こゑよく心底を見とけてのうへともいかにとなり給へかしと。理をつめて諫しかは。実もとてとゞまりぬ。それよりいよく心をいため。みづから一揆のものとめかたへたづねて。事の実否をたゝさんとおもひしかとも。此いかりに氣を上せしより。病ついに快氣なく死にのぞみて。兵七をまねき。たとひ我こそ不幸にして。やみくと死すといふとも。汝我この心さしを繼て。かならず主君の仇を報し。父か黄泉のまよひたすくべし。我また靈鬼となりて汝が身に付へ五ウゝ(図10)そひ。ちからをそへて討すべし。おもへば無念至極の事と。眼をいらゝげ拳を握り分怒の色表にあらはれ息絶たりしは。類もなき忠士なり。されば古語に父父たれば子子たりといへるもいちぢるく。その子。兵七また一騎当千の生れにて。一揆の人くゝに与力し。終に本望をとけたりけるとぞ

## ○娘子軍の事

兵七か父を諫言せし詞に、娘子軍といひし事。もろこしに孫武といへる軍者あり。呉といふ国の帝・闔閭と申王にまみへて、軍法を以てありつきを願ひけるに、呉王のいはく、我汝があらはせる所の軍書を見、汝が用る所の軍法をことくく知れり。但その内に少たづねへ六ウ度事あり。もし女人を以て兵とし、法令を以て戦しめんとおもふ時はいかゞすべき。婦人をもつて兵とし、軍をおこす様を聞くとありければ、孫武はいはく、なる程それも心やすき事に候。先婦人を御出し候へと申せしかはさらばとて、宮中の美人ことくく出されしに、百八十人ありけるを、孫武これを九十人づゝに分て、敵味方とし中にも呉王の殊にてうあいしたまふ美人式人ありしを、双方の大將とし、手におのゝく剣戟をもたせ、孫武両方の軍將に法令を下していはく、汝等みづからの心と左右の手と背とを知れりやと尋ねしに、婦人ともいはいはく、それほとと事誰もしりて候と申。孫武はいはく、しからは前は心を見、左は左の手を見、右は右の手を見へ七ウ後にはせなかなを見よと、かくのことくいひきかする事三度におよひ、五たびおしへて後、先右を討しむるに、婦人ともその軍令にしたかはすして、大にわらふ。孫武はいはく、約束を變し、命令をわすれて、いひ付に違ふは、その大將の罪なりとて、深くいましめ、また始のこことく三たひいひきかせ、五たびおしへて後、その左を討といふ。婦人ともまたおかしかりて笑ふ。孫武大にいかりていはく、約束あきらかならず、軍中に令を下して、士卒もちひさるは、その大將の罪なり。すでに此法をいひきかせ、二たびおこなふ

に法の如くならざるは、士卒の科なり。今大將たる人、法を輕んし令をおろそかにして、みづからその規矩にしたかふ事あたはず、威を士卒にふるふ事あたはざるかゆへに、三度令をくたし、五度法をしめして、なをへ七ウ約束あきらかならず、兵をもちいて信をひとしくする事を得ざる、是大將たる人の罪なり。いそぎ誅すべしと、双方の大將をめしとりて殺さんとす。呉王は最前より台にのほり此孫武か婦人をもちひていかなる事をおこなふぞと見物してまし／＼けるか此式人の寵愛の美女を殺さんとするを見たまひ大におとろきかなし。令を孫武にくたして降をこひ給ひていはく、朕すでに將軍のよく兵を用る事を知をはんぬ。たゞし此式人の美女、朕かもつとも寵愛する所にして、彼らにあらされば、食も曾てすまはず、夜も眠りがたし。すみやかにその罪をゆるすへしと也。孫武申ていはく臣すでに君の命をうけ給りて、大將軍たり。それ一度大將軍の命を受て、軍士を指揮し、戦にのぞんへ八ウては、君の命といへとも用ひさる事あり。將軍一たび法を出し、掟をさためて、軍士その法にそむく時、君命もだしがたしとして、一人もゆるす事をせば、これ法令おこなはれず掟さたまらずして、士卒なにを以て正しかるべき。法度は士卒をおそれしむるの的、罰は人をしたかゆるの準繩なり。誅せんばあるべからずと申て、終に彼式人を引出し、目の前にて殺しつ。こゝにおゐて又その次なる婦人式人を以て大將とし、令をくたし法をおしへて討しむ。婦人ども大におそれれ心におのゝきて、孫武かいふ所に違はず、右を討左を討にことくく、令にした



〔挿画〕〈十才〉(図 11)

かふかゆへに。あたかも手足の一身にしたかふかことくなりぬ。孫武また台に人をつかはしてはいはく。兵すでにとゝのひて。進退心のまゝになり候。帝王いまたとへ八ウ。ひ此士卒をもちひて。水にひり火におもむかせ給ふとも。なんぞ難き事候べき。みづから台をくたりて。御多いらんあるべしと申せしに帝のいはく。朕寵愛の妾を殺されて。愁むねにせまりたる折からなれば。台をくたりて見るにしのびかたし。軍をやめてしりぞき休み候へと仰ける。孫武かいはく。されば帝王の勅。はしめより偽あるへからず。それがし始より君の御心をしれり。百たびたゝかひて百度勝の。誠の軍法を以てしたしみやすく。なづけかたき。婦人をあつけ。たはふれに軍を学は

しめ。いたつらに児女のもてあそびとせんとし給ふ我これを知るかゆへに。法をきひしく令をおこそかくたして仮の士卒をもちひて真の軍をなし侍り。君はいたつらにその事を好み給ひて。その実をしるしめさへ九才。ぬがゆへなりと申ければ。呉王大に恥給ひやかに孫武を拜して実の大将軍とし。先西の方強楚をほろほし。郢を伐したかへ。齊の国晋の国までをあはせて。威ふるはれし。ひとへに彼孫武がはかり事。より出たりとぞ。されば今家臣浦之介かたより一たん約を変せしも。世の聞耳をおもひて。心にもおこらぬ一揆の党をくみしかども。本心いつわりあるかゆへに。堪忍事あたはずして。かく違背せしかと。兵七か心におもひ付しより。父をいさむるに此事をかたり。孫武か婦人をもちひしことく。却てこなたより義を上げまし勇をあらはし給はゞ。世の臆病未練のものゝやうなる人にもあらされば。恥を生ずるの心も。などかへ九ウ(図 11)なからんといふ心にて。かくいひけるなるへし。

○かなおか伝五か事並下人源助か忠義の事

今はむかし。金岡伝五といふ浪人あり。敵をねらはんがために。身をひそめ名を隠して。うかれありきけるか。此人幼少よりめしつかひける僕に。源助といふものありさんぬる年。伝五らう人の節にも。馴染をおもひて。伝五もいとまを出さず。源助もはなれかたくて。かく浪人の身となりても。いよく忠義ふかく。心の操を変ぜずして。いくまでもつきまとひ。主人の先途を見とゞけたてまつらんと。肩をすそにむすひても。苦しとおもへる気色なく。あけくれかたはらをも。

はなれずして、大せつに勤仕せるものなりしに、伝五なに「十ウ」とかおもひけん。ある日源助を近づけ、我事久く浪人となりて、爰かしここにさまよひ、纔のたくはへをも、ついやし、身上をかせくといへとも、曾てありつきの様子もなければ近き程にまた他所へも立ちこゑ、何とぞ身をよするたよりを、思索し、たとひ禄かろく業いやしくとも、三斗の米に膝を屈して時節をまたんとおもふなり。しかれば手まへの払底、今までよりはいやまして、日々に貧しき浪人の身の果、さりともしとおもひつるあらましも絶たれば、その方事たゞいま迄も見すてかたく、爰迄はめしつれしかとも、此風情となりはてたる事なれば、なこりはつきぬ事ながらしはらく暇をとらするなり。いつかたへも立ちこゑ、心まかせ「十一オ」にありつきかせき、身命をよするはかり事をなすべし。此一腰は重代にて身にも替かたきやうにおもひこれまでもたくはへしかとも、汝に何がおしかるへき。これを形見とおもひ出ば、いつくいかなる里にすみ、いかやうの噂を聞にいたりても、馴こし年月の事おもひ出ばなきあとをもとふらひくれよ、もしわれさきたちて仕官もせば、早く立ちかへりて我につかへよと、こま／＼といひきかせ、さしそゑの一腰を源助にわたしけるに、源助もなみだくみ、まづは御意のおもむき、かたしけなく存候。さりながら君御幼雅のはしめより、御かたはらはなれたてまつらず、あけくれ御袖のしたにめしまつはり、御恩をうけ候わたくしに候へば、今かやうに御浪人あそはし、さま／＼の御苦勞なざる「十一ウ」につきても、身をかへり見ず命をすてゝも、主君を今一たび、御世にいたしたてまつり、憂喜とともに

して、勤仕いたすべき覚悟弓矢神の照覧もあれ、けふまでも変し候はす。たとひ今よりもなをまつしくなり、あやしき、暮しとなり候とて御氣つかひ候まし、それかし罷あらんほどは、身を匹夫に生れたるこそさいわい恥かしとも存せねば、肩に柙を置辻小路に頬をさらしても、御一人の御事は御はこくみ申べき心底に候、あはれいつくいかならん所までもめしつれられ候はゞ、一生の大望此事にこそと、かきくどき涙にくれ、中／＼いとまどるべき気色にあらず、伝五またいふやうさりととは頼母しき心さし、下臈ながらもけなけなる一言いつの世にわするべしとおもはず、かくいふも便なけれども、す「十二オ」こしたくはへたりし金銀も、此ほとまでに払底しけふよりしてはいかにとも、おもひよりたる事もなければ恥かしながら此身ひとつを、一族の方にたのみより、しばらく様子をうか／＼はんとおもふなり。されば浪人の身を人にあづけつゆのいのちをやしなふにいたりて、下人までめしつれ、人口のほどもいか／＼しければ、かくいとまといふなりとかたるに、源助しはらく袖を顔にをしあて、誠にかほどまで御いたわり下され候事、身にとりての面目にそんし候へとも、主君世にましくて、榮させ給ふ時は下人となり、露命をつなぐてたてまつて、尾羽をからさせ給ふ時、見捨て帰り候など、世間の噂も候時、いかはかりの悪名とおほしめし候や死たりとも此名はうせしとこそ存て候へ、さためて是は当然の御「十二ウ」事にて、拙者か不所存も候やと、おほしめしての御詞とこそ存て候へ、しかしながら御たくはへつきて、いまは御身を御一族の御かたへよせられんは、御もつとも候へは、御供

の義御は、かりも至極つかまつり候うへは、是非御ともいたし候とも  
いつくにもあれ主君の御こし候所まで御とも申。御逗留の内はそれか  
しめも、一ふんにかせき候て、朝夕の御足手かけ、拝見申やうに致候  
へし。私、吾人の身すきの義、御せわにもなり候まゝ。只御いとまの  
義御赦免候は、かたしけなく候はんと、余義もなき願ひに伝五もいと  
愁歎の色ふかく、心さしは感しながら、かさねていふやう、いやと  
よ源助、その方事はなしみといひ、我もはなれがたくて、今浪人の身  
となるまで、めししたかへたりといへども、誠は汝か奉公の仕かた、  
今までとは各別に、違ひたるやうにおほゑ。我もまたへ十三才、心も  
ひかみたるゆへか、一つとして汝かするほどの事氣にいらす所詮は身  
貧なるにつきて、ものことに心まかせならねば、それほどの奉公もあ  
るやうにおもはるゝゆへ、かくいとまをとらする也さりなからいまゝ  
ての心さし、馴染のほともたしかたければ今さらひ出しても何か  
せんなれば、すかしなためてかくはいふそ、しつかにおもひあはせは、  
我あしき事もあるべし、身のおこたりもおもひしるへければ、とかく  
にこれ迄の縁とおもひとて、いつくへも出てゆけど、なさけなくい  
ひはなされ、源助いまは詞なく、さてく、是非なき御意のほど、つ  
いにかやうの御詞うけ給りたる事なきに、かくおほしめし付られしは  
それかしが不運よし、御いとま給るへし、御ことはをかへすも、か  
へつて慮外なるべしとて、ふと立て勝手へ立けるけしき、なにとやら  
ん心もとなへ十三才、ければ、伝五つゝいてそつとたちうかゝひ見し  
に、案のこく源助わきさしをぬきはなら、すでに自害と見へける時、

伝五あはてゝとひかゝり、こは何としたる心底そ、おことは死て主人  
に憂目見せんとや、先くそこをはなして、存念をかたれとさまく  
にとゝむれば、源助いまは詞なくすゝりあげて男なき、それかしが心  
底はさらく、不所存候はずすいふんつとめ麗有候所に、御いとまと仰  
らるゝさへ、日ころの御心にたがひて、世に御うらめしくそんし候、  
ましてそれがし不奉公と見られたてまつる事死てわかれし父母をはし  
め、氏神の御あはれみにもはづれ冥加につきたるそれかし事、生て二  
たび主とりもすべきものと、御めかねにかゝりしは、是非におよはぬ  
所なれば、ながらへて此上に、いくはくの恥をさらし候はんより、御  
めとをりにて相果、せめてへ十四才、二ころなきむねの内、御めに  
かけん所存に候、たゞし御とめ下さるゝとならば、たゞいまゝでの通  
り、いつくまでも御めしつれ候はゞ、生々世々の御おんと、なくく  
わび事申けるに伝五もなまなかの事いひ出し、落涙しきりにして、や  
ゝしはし物をもいはざりしか、とにかくに死を留まり候へ、かやうに  
申も所存ありての事、しかし此存念ありのまゝに、かたり聞せたき物  
なれとも、ちと様子もあるなれば、一兩日のほとには、くはしき事は  
しるゝぞひらにおもひとまりてくれよ、何しにそりやくなるへき、ま  
ことにおのれば、下らうなれとも、はぢ入たる心底、世か世にもあら  
ば此まゝにはめしつれまし、今まで義心をしらすりしは、かへつて我  
智のたらぬ所、さりととはうれしきおもひ入やと手をあはせてよるこび  
けるにそ、源助ももろともにふかくへ十四才、(図12)の涙にむせびけ  
る、さて近辺にありける、傍輩の浪人しゆ式三人よひよせ、右の次第





〔挿画〕〈十五才〉(図 12)

を申きかせ源助か忠義をかたりけるに、人くも横手をうち、源助を此中によひ出し、さてくその方事恥入たるしんてい、是によりて大事をかたるぞ、伝五その方にいとまをくれしには、ふかき望あるゆへなり、その意趣は、先年われくか主君、佞臣の刃にかゝり、やみく／＼と討れさせ給ひぬ、さるによりて此ものとも、臣として君を失はれ、悪人の列に立ならび、ともに天をいたくべき理なし此義によりて一命をすて君の仇をむくいんとおもふ、されば汝はまた者の事、もしみだりに口の外なる噂を聞せは、此大もうのさまたげともなるへく、そのうへ右の一揆のものとも、一人も下人をつれしと、家臣浦之介といひあわせし、その手まへもあるなへ十五ウれば、さてこそいとま

をとらせし也、此詞いつはりあらば、弓矢の冥加ながくつきて、此大望をもとぐへからず、まったく虚言これなしと、おのく誓言にてなつとくさせしも又たくひなき忠義なるへし

### ○源助忠死の事

今はむかし、東武深川のほとりに、太平記の講尺して、世をわたるものありけり、いつもおなじものをよみて人の耳をよるこはしけるが、年月かさなるにまかせて、さのみおなし事もしかるへからずとて、三国志、呉越の軍談、大明軍談などをよみけり、彼源助おりふしの供につれられ、伝五がなくさみにとて、おりく此講尺にゆきける比は、かならず心をすまして、源助も外のものゝやうにもあらず、聞いたるしほどに、かたへ十六才は少しづつも心得たる事ありけるにや、此人く／＼の打よりて、大望のやうすをかたり、今は恨みをはらして、心よくいとまをとるべしとさま／＼にこしらへすかしけるに、源助かいはく、さてくかほとの一大事なれば、御つゝしみましけるを、いさゝかの事に御感のあまりそれかし式に御聞せ下さるゝ事、生々世々の御恩にこそ候へそれにつき存出し候は、さんぬる比、深川にての講談に申て候、家語とかや申書物に、人の臣たるものゝ節儀は、君の大事にあたりては、惟力のおよふ所のまゝにす、死てのちに止とこそ承り候へ、さりととも御先途を見とゞけ奉りたくゞいま迄もつき随ひたてまつり候心さし、哀とおほしめされば、その場まで御供の義、御免かうふり度候と申けるに、伝五またいはく、もつとも汝か心さしむそくにせんとにはあらず、しかしなへ十六ウからこの大せつなる主君の

かたきを討へき事。一味同心の外におゐては、彼門内へ害人もかなふまじきよし。家臣と堅く申おきしゆへ是非におよはず。されば講談の詞にも、莊周かいひし詞に、それその君につかふるものは、事を多らまずしてこれを安す。忠のさかななるなりといへり。此心をおもひ出して、我いふ所にしたかへといさめられ。源助また、説苑とかや申書にその食をはむものはその事に死す。その禄をうくるものは、その能を畢と申さす候や。あはれまけて御供申度こそとおそれいりて申に。伝五また、いやとよ国語の詞にもいはすや。君につかふるものは、君をもつて我心とす。制我にあらざとこそきけ。今われ主君なしといへとも此たくみをおこして仇をむくひんとするにいたりては、又主將あらずへ十七才してはかなふへからず。ゆへいかにとなれば、尋常の敵討には殊なれはなり。しのびて城中にいり、多勢を引うけて死をかるくし。わつかの人数をもつて此大望をおもひ立たるかゆへに、家臣何かしを以て主とす。われ今主命を請たり。此ゆへに汝吾人といへとも法令をそむきて、わたくしにつるゝ事あたはず。汝も智なきにあらされば、これほどの事しるへしたゞおもひとまるへしとねんごろにいひければ源助またはいく、それかしいやしき匹夫に出て、おさなきよりつきそひ奉り。見なれ聞なれたてまつりし。耳学文のみなれは何とわきまふる事も候はね共。さのみ御詞をかへして御供を願ふもかへりて慮外に罷なり候まゝ。ともかくも御意にしたがひ候へしさるにてもあまりに御なこりおしく候へ十七才なれば、敵の門外までは御見おくり参り度候ればかりは御ゆるしもやと願ひしかば、伝五しから

ば跡にさかり候て、ひそかに来るへしと申ふくめられ。世にうれしげにて居たりしか。実もいひしに違はず。此人く本望を達し。心よく引とりけるに、何ものともしらずたゞ一人ちかくと来るものあり。またあけほのうすくらき折なれば、おのくあやしみるるを。伝五はやく見つけ詞をかけ。拙者が下人にて候とするくとはしりより。源助ならずや。汝いまだ帰らざるやと申ければ、源助まつ御本望は達せられ候やと申。中く本望は達せしなり。おのれもよろこはしきやと申に。首尾よくあそばし候て。二度御顔を拝したてまつる事。身にとりて恐悦と申もおそれいりて候とて袖よへ十八才り密柑を取りだし。伝五をはしめおのくにも先御口をうるほし下され候へとめいくにたてまつり。さて是よりいづかたへか御のき候へきと申けるに。伝五かいはくさきたちていふごとく。心さしは忘れかたく。祝着のいたりながら。とても供はゆるさぬぞ。かへつて身のためにもなりがたし。一足もはやく立のけと。中くつるゝ色もなければ。承り候と。なくく跡にたちのこり。なこりおしげに涙をおとして別けるか。なをそのゆくゑありさまを。おほかなく覚へしかば。かしらおろし出家のていとなり。しばらく様子を聞つくろいける内。さまくの取沙汰ありて。さらに実否もしれさりしかば。心うくおもひながら。とやかくとせし。月日もたちて明る弥生のころも半に。あやしけなる侍の源助入道か隠れすみたるへ十八才庵の中にたづね来り。ちかころ楚忽の申事に候得ともまさしく貴殿を存たる事の候。是は金岡伝五どのゝ。しばらく御身をよせられ候。細川勝元の家来にて候。伝五どのつ

ねく貴殿の事を御うはさにて。おりふしは御落涙候ひしを。主人勝元もかねく承り。たくひなき御忠義をしたひ。それかしを以ていつかたまでも御尋ね申。御仕官の御心さしも候は。所領の一所もあておこなひ。御身をやすめ候はんとの事に候。申もおるか當時においては。仁木細川の衆などにかくおもはれ奉らん事。なんほう御くわほの事に候。あはれ御名を出され。御心をもむけられれば。それかしとても大慶なるへきよし。ねんころにいひけるに。法師此むねをつくくと聞。御なつかしき事を承り候ものかな。まつ伝五どのへ十九オ御ゆくゑはいかに候とたつねしに。はや御生害にて候。御大望はつゝかなく御とけ候なれば。今は世にのそみも。これなきよしにてある夜ふけ過て。心しづかに書をきなされ。いさきよく御腹めして候。すなはち御かはねをもそこくの寺にはうふり候なり。それかしも数ならず候へとも。御かたみとてこれをこそ給り候へと。袖より一通の文にそへて。九寸五ぶのあい口。古今集の聞書などを出し。此出家に見せけるにぞ。まことに是はそのいにしへ。御らうにんのおりふし都北野辺に。和歌の師をたつねられし比春日高倉の町にすみける。何かしとかやいひし人。此発見なりしかばそれにたのみてかゝせ給ひし物そと一目見しより袖もしほるはかり。せき上く泣居たりしが。やゝありて侍にむかい。それかしへ十九ウ承りおきし事候。それ命をしるの士は利を見ても動かず死にのぞみておそれず。人の臣たるもの。時に生へき事には生。時死のいたる時は死す。これを人臣たるもの。礼とすといへり。我いきて二たび主君につかふまつる事あたはす貞女

すら両夫にまみゑず。なんぞ臣として二人の君につかへんといひて。やかてふところより。こほりのごとくなる。さすかをぬき。さしつらぬかれてむなしくなりぬ。たぐひまれなる主従なり

## 高名太平記

## ○巻之五

妻賢にして夫を諫言せし事並離別の事

吉之愚にして諫を用ず却て立腹の事

老臣他国より来りて忠言を奉る事

鼻のなき猿鼻のある猿を笑ふ事

莊子が渾純のはなしの事

余りに珍しき事を好むは却て仇と成事

猿猴が月をとるといふ故事のおこりの事

漢の董宣法を立る事

死をおそれざる諫言誠に忠臣のする所なる事

公主の寵愛し給ふ乳母の子といへども

科あるにおゐてはゆるすまじき事

〈二十終オ〉

〈一オ〉

〈一ウ〉

## 高名太平記卷之五

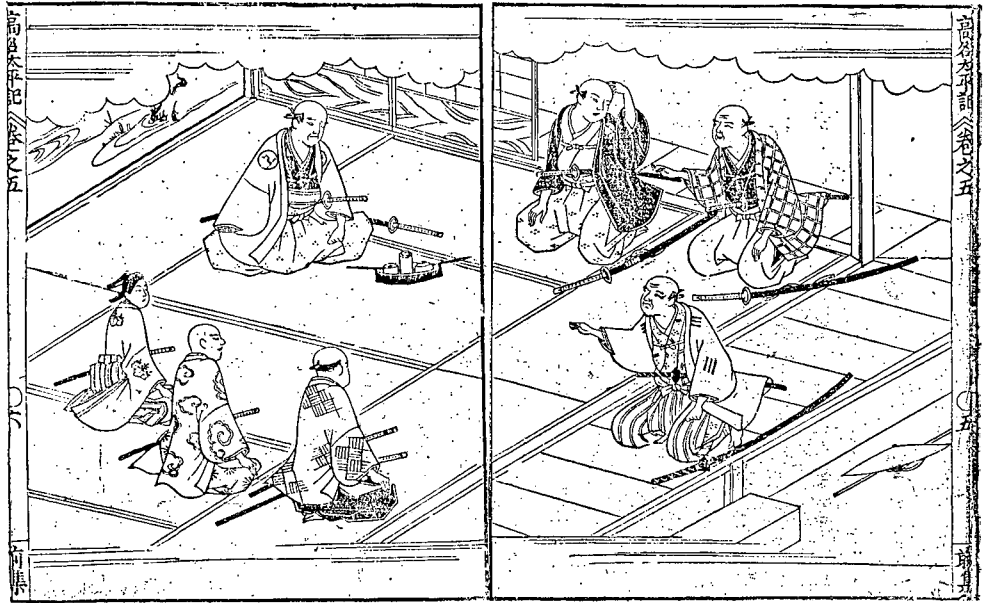
### ○妻賢にして離別せし事

今は昔、野上吉之といふ人ありけり。生得の心さしよからぬうへ。仕官も人なみより超。栄花も他に異なりけるを慢して。諸事につきても傍輩を見くだし。我意をふるまひて邪おほく。我に媚へつらふものには。功なしといへども。禄を重くして。忠義のさふらひと号し。質朴にして清廉なる人は我非を非と見しらるゝかゆへに。いかなる忠あり陰徳ある人といへども。心に憎み疎むかゆへに。よからぬさまにいひなし。又はしらざる顔に打すくしけるほどに。おもふ友どち打よりては。爪はちきしていきどほり恨ものもありといへども。まのあたりにては。彼か時の権にまかせて。おのづから口おもく。何といひへニオ。出たるふしもなく。したかふやうには見ゆれど。あはれ今とても。世の変もあらんは。かゝる人よりぞおこるべき。我も時にあふさまある身なりとも。此禍の根あらん時代に。立まはる名なれば。寝さめも安からぬものを。よし是にても足ぬべしなど心ひとつにおもひかへして。汝は汝たりと。たしなむ人もおほかりけりされば吉之いよく。橋慢の心いやましに。食欲の心さへ付てとにもかくにも聚斂を事とし。あたりに人もなけなりける。ある年の冬。さる子細につきて。筋もなき欲をおこし。むさぼり心あきたらぬ所やありけん。さしも忠勤のさふらひを恥かしめ。晴がましき場において。さんく。悪口の事もありしかば。此人また短慮なる本性といひ。度く。の無礼ともありけるに堪か

ねて真二つにとおもひ。詞をかけて。後よりたゝみかけ。二かたな切つけられしかどもへニウ。切さきさがりて烏帽子にあたり。そのあまりわづかに肩さきに切つけ。なをふりあげし所を。一座の諸武士おりかさなりあへなく相手を討もらし。無念の腕をさする所に。吉之はつねにいひし詞にも似ず。此勢ひにとうわくし。ぬきあはすにも及はず。起共なく転ともしらず。大手をひろげて逃たりしが。二太刀めにいたりては。氣もたましいも失はて真うつふしにたふれたるを。人々にかきおこされ。やうくとして人ごゝちとなりしかども。たゞふるひ戦慄て。中くものゝ役に立べきものとは見えさりけり。されども心はあく迄剛にして己が非をいひかくし。人の是をいひ消す事あたかも水にむかふ火のごとく。白粉の銀朱に化せらるゝに似て。反復時をかへす片時に舌の剣を振て。相手を非義の罪におとし。その身はかへへ三才。つてほまれあるやうに。弁舌をもつて人にほこり。此わづか逃疵を得しも。公儀を専としたるゆへ。私の事にかゝはり。相手とる心にあらざるゆへ。かゝる怪我もせしなど。口にまかせいひちらしけるを。此家に妻なりし人は。さる大家よりむかへて。もつとも武に長じ義をおもんぜしの余習ありければ。此妻また賢才ありけり。ある夜ひそかに。吉之の機嫌をうかゝひしのひやかに。うかゝはれるは。先頃楚忽の人ありて。君をあやしめんとせし。何かしの家財没取候よし。いかなる物か候ひけん便なき事ながら御たづね申候とありしかば。吉之はいく何が替りたるものゝ候べき。さる序候ひけるまゝに。追捕の目録を見て候ひしか。只金銀馬鞍国の絵図。さまぐの宝物のみと

いへとも。世にめつらしといふものもなしとかたられけ「三ウ」るに。妻のいはく。彼何かしに此さまくの宝あり。いかなればそのあまたの宝ありといへとも。身命を守る事あたはずして。やみくくと討れ亡ひけん。但金銀珠玉は宝とするにたらず。およそ人の身に宝あるべし。第一に衣食住をもつて三つの宝とす。人たるもの一生におめて。学を積武をけけみ農人は耕作をつとめ。工商の家には。おのくそのつとむべきの道をもつて。日夜にすてず。しはらくも此業をわするゝ事なきもの。妻子を泰山のやすきにおき。家の名日夜に榮へて。千歳といへども断絶事なし。そのみなかみを尋るに。飽まで食ひ。温に着て。おのか住家を動されざるにあり。されは古人の詞にも。つねの産あるものはつねの心あり。つねの産なきものは恒の心なしとかや。此うへに「四オ」又三つの宝あり。福と禄と寿となり。栄花を極るを身の福とし。君の恩を食を禄といひ。禍にあはすして天命をたもち。一生を終るを寿ありといふ。しかしなから此六つの宝を浮宝となづけた。此あまたの宝を生るものあり。如意宝珠といへり。賢聖の道を学ふ人。此如意宝を得るなり。君いま禄に飽武にほこり。栄花肩をならぶる人なきか如く。うへ見ぬ驚のおもひをなし給ふといへども。此如意宝。いまだ得させ給はずとこそ存候へ。そのかみをつくくおもひめくらし候に。一度は非義の謀叛に組し。天高しといへども背くまゝの愁をいだき。地厚しといへどもぬき足するの御あやふみも候ひしそかし。その貧苦も時ありて。二度御運をひらかれ。降参の名もいつしかに「四ウ」代かはり時うつりぬれば。おのつから富貴とならせ

給ふぞかし。妾つねに人のうへを見るに。産業厚く家富る時はかならず驕いたる物と見えたり。時命いたるときは逸いたると。古人も申せしは此事なるべし。家と国と各別のやうなれども。その理二つなし。これ人の常の心にして。ふかく戒べき所なるをや。妾君とそのむかしより付そひまいらせ貧にならひ苦しづみ。今富貴かくのごとくなるにいたる。しかれども妾つねに驕の心欲より生し。危事の極りは。人を蔑にするより出候はん事を恐れ候ひし君まさに今。さしあたりて人を非義の罪におとし身をかへり見させ給ふの知みしかくして。歓楽を日夜にねかはせ給へり。これ産厚より驕を生し。如意宝を失ひて三「五オ」(図13)宝その誠なく。茶の湯に万金を。出して。目をよろこばしむるの風流をつかくし。武家の産に疎くして。弓馬のたしなみを忘れさせ給ふ事。かへすくも歎かしくこそそんし候へ。伎巧は国を喪すの斧とこそ申なるに。これを専として武をすて。世の治れる時は文を守るといへる本文もあるを。学びの。道に遠く。貪りの。道に長じさせ給ふ。御心ざししますすゆへに。今君か御身に腹心の。病を生じ。時をかへずして。命旦夕にせまれる事の候。あはれ遊芸のたのしみをすて。せめては御心におぼしめし付られずやと涙にくれてしみくと。のたまひしに。吉之きよつとしたる顔つき。先その物かたりの内に。我命旦夕にありといひ給ふは。いかなるゆへぞと尋られけるに。妻のいはく。されば候「六ウ」いつぞや君を討たてまつらんとせし。浅井か家臣とも。よもや鬱憤をさしはさますといふ事や候べき。浅井の家は礼厚く。徳高くして。管仲かいひし旨にかなひ。主人は恵



〔挿画〕〈ウー六オ〉(図 13)

ありて高行をおこなひ。臣は忠を専として高行あらん事をねかふの家  
 とこそ。うけ給りて候へ。これひとへに君令して違さるかゆへに臣も  
 また共して二心なく。ふた心なきかゆへに義を重んず。儀によりて命  
 も輕し。命をかるんするかゆへに。燕丹がために感陽にのほるの人あ  
 り。頼朝をねらふ景清かためし。ひとつくひひかたし。されば正直  
 は一旦の依怙にあらずといへども。終には日月のあはれみをかうふる  
 とかや。君いま一旦弁舌をもつて。身をたのしみ給ふ。謀をなさせ給  
 ふとも。家臣なを世にあらんほどは。御膝の下よりあやまちおこりて。  
 禍かならずへ七オ。御身におよび。恥かしめを御家にうつして。永  
 く正統の血脉をたやし給ふへし。はやく御思案候ひて。御子孫にわさ  
 はひながらん事を御はかり候へかしと。理をつくしてのたまひしに。  
 吉之もつての外。立腹し給ひ。牝雞の朝するは家のほろぶるなりとい  
 ふ事をしろしめしたりや。それはおぬしたちのいふ事にあらずと。こ  
 れより夫婦の中も疎くなりて。離別せられしこそうたてけれ。誠に良  
 薬口ににがためし。ひがめる心にはさもありぬべし

○老臣他国より来りて諫し事

今はむかし。みちのくの何とかやいへる所に。押領使なりける人の息  
 女。さる武士の家に嫁せられて。年ひさしくむつまじかりけるが。い  
 さ。か夫を諫申されけるに。此夫こそろかたへ七ウ。ましく。智みし  
 かくして。諫言を聞に謙すかへつて多言なりとして。いかりをふくみ  
 妻を追うちて離別せられける。此妻の家に旧功をつみて。年半百にち  
 かき侍あり。此臣かの始終を聞て大におどろきさて。世には佞者の

みありて忠義を知れる人すくなき物かな。これほどの理は三才の童子も、学ひしして知るの事なる物を。一旦のいかりを恐れ身命をかへりみて、あへて心にそむかしとするは、愚昧暗鈍のいたりなるべしそれ諫争ても、君を輔て弘しめざるを、社稷の臣とすべしとかや。我社稷の臣たらん事を願ふにもあらざれども、いさめすんばあるへからず、唇つきて齒さむく、臍をかむにいたりても、その人なき時は、いたづらに家をほろぼすにちかし。家ほろび国やふれて後、我主君へ八オへに恥をおよぼしともに無道の名をかうぶらしめんは、なつかしき事ぞと、不日に国をたちて、夜を日につき、吉之に對面し、おほきにいさめて申けるは、君きこしめされ候はずや、それ上は下たる者の本なり。上あきらかなる時は下おさまる天子の尊きたも、三たりの老臣をゑらびこれを敬ひて孝になそらへ給へり。輔佐の臣を立給ふ事は、その驕あらん事をおそれ給ひて也。直く諫て、かくす事なき臣を愛し給ふ事は、そのあやまちあらん事をおそれてなり。今君いたづらに臣と称し、譜代と号して、左右に膝をつらね、肩をそひやかす人、かぞへは百人もあるへけれども、たちまち御身の大事ありて、不日におこり、わざわひ心腹にいたれども、申いたすものゝなきは、上くらく下和せさるがゆへなり。口をもつへ八ウへて非をかざり舌をもつて弁をあやどり、一人に対して智をうはふとも、天下の人何そ理にくらまされんや。国語と申ものに、民の口をふせくは、川を防ぐよりも甚し。川の水ふさかりて、あふるゝ時は人を傷る事必おほし民もまた然なりとかや。されば君權勢猛威をふるひて、横さまに利を得させ給ふ事あり、非義

の富不善の謀・神明これをにくみ、天地これを疎し給ふ所なれば。たとひその主人は殺されほろひて、しばらく怨憎たえたるに似たりとも、なを家臣あり一族あり、その中に何ぞ怨を、ふくみ、仇をむくひばやの忠心なきものあらんや。いはんや彼人つねに臣を見る事、手足を見るがごとくに愛せし人なり、いかんそ亡君を腹心のごとくおもはざらんすてに往しへ九オへ事をば、とかむるとも帰らざるべし、今をおほしめさばたゞ、みづから御手を出され、百年の御ことぶきをおこし、ほまれを御子孫に伝へさせ給へかしと、余義もなけに申て、つめかけしに、吉之なをく怒りをふくみ、譜代相伝の家臣すらあへて諫るの詞なし。我兼て近臣と、常に事を談し、いさゝかも私せさるゆへなり、下として上をはからふさへ、その位次をみたるゝの罪あり。いはんや汝何ものぞ、他国より来りてみたりに舌を動かすや、すみやかに死をもいひつくべき事なれども、別義を以てゆるすの条、さうく立かへるべしといひすて、簾中にいり給ふ、彼老臣なみだをおとしていはく、それ興王は諫臣を賞し、逸王はかへつてこれを罰すとかや。我心さしまつたく、君をさみせんとには、あらずへ九ウへ親家の故をもつて、いさめすんば誰あつて此事を愁ふべき、徳政すでになりて、また民に聴工をして、誦せしめ朝にいさめしむとこそいへ、故旧わすれさる時は、民うすからずといふ本文あり、かならず君を恨みんとするものあらん、手足所をかへて後、臍を荒原の叢に嚙たまはん事の悲しさよ、あはれ何とぞして今一たび、主人にあはせせ給、我皆て御心にさはるの諫を申上し、それく御とり次を頼みたてまつると。

さま／＼に申入れけれども、ありあふものどもは皆、理非の決断にくらく、すこしも主君の心にそむかじとのみおもひとりて、弁をかざり面をいつわりて、媚へつらふの族なれば、事を左右によせてとりあはす老臣またそのおもむきを察し、永／＼とむかし物がたりをして、一へ十才座のめん／＼を諫けるは、それかし此ほど国もとにおゐて、つれ／＼のあまりに、寺まいりを専とし、法談を聞候ひし中におもしろき物がたりの候、かたりてきかせ申候べし、元却本行経と申ものに候よしにて、上人のかたられ候ひしは、むかし劫初に弥陀羅国と申国あり、その国の帝を弥陀羅王といへり、彼国むかしより猿といふもの曾てなし、此ゆへに、弥陀羅王、他国へ人を遣し、猿を買もとめて国に放ちけるにもとより猿の住つけぬ国なるゆへ、放てとも／＼住つかず王その住つかぬをいかりて、また十疋買もとめ此たひは十疋の猿をとらへ、こと／＼く鼻をそぎて放ちければ、おのれが鼻なき事を恥て、おのづから他国へも逃ゆかず、いつとなく隠れ住けるほどに、子孫もひろくなりもてゆきしかどもへ十ウ／＼いかなる事にか、こと／＼く鼻のなき猿を生けり、そのうち、他国より来る客あり此国に猿を重宝とするよしを聞て猿を帝へたてまつりけるを、王よろこひて深山にはなさせけるに彼も／＼の鼻かけ猿とも、此猿の鼻あるを見て、手を打て笑ふかの一疋の猿おほきにいかりてはいく、我らむかしよりいづれも六根具足して、人間にちかつくが故に鼻あり、なんぢらか先祖の猿もしかなりといへとも、此国の王のために鼻をきられたり、我か身をかへり見、我宿世のつたなき事を恨むべき所に、かへつて我をわらふ

は何事ぞと、さま／＼に教訓すれとも、かのもの／＼の猿とも一円これを用ひず、汝いつわりをいひて我をまよはせり、先祖の十匹の猿ども、鼻きられたりといふとも、子へ十一才孫に鼻あらば、何そ鼻を生ぜざらんや、これ汝が不仁をいひ隠さんとして、かへつて人を不仁といふやと、いよく笑ふによりて、一つの猿もいよいよ詞をつくし理をあきらかにして、わらふといへども、多の猿ども終におのが理なりとして、国こそりて笑ふほどに、一つの猿わらひまけて他国に逃隠れたれども、彼論議に負たるがゆへに、いつわりある不仁ものなりとて、女猿の妻となるものなくて、子孫ながく絶たり世尊のたまはく、此一疋の猿愚なり、なんぞ当前のすこしき恥をしのびて、おのれも鼻



〔挿画〕〈十二才〉(図14)



をかゝざるやこれ当来の大得をしらさるかゆへなりとかや。のたまひしよしに候。もとより某も十失一得の身にて、その位次をこへて、君をいさむるの非ある事。はじめ鼻をかゝれたる猿へ十一ウ（図14）なるへく候。さりながら此君の、鼻高にましますを笑はゞ。何ぞまづその鼻を御かき候はざるぞや。ともに今恥を御しのひ候て、当分の悲しみ候とも。その鼻を御かき候はゞ。御子孫長久なるべしと存候にと申ける。

## ○莊子か渾純のはなしの事

今はむかし、去人の家臣・他国へゆきて、主君のために他国の主君を諫言する事ありけり。その詞にいはいく、むかし四方の国をたもつ帝あり。その中央をたもち給ふ帝ありその名を渾純と申けり。此王の富貴は四方の国の帝の、富貴よりもまさりて、榮花はかぎりもなかりしかども、いかなる宿業にか此人、生れつきて目も鼻もなき不仁なりけり。ある時渾純、四方の国王を申いれて、〈十二ウ〉昼夜五日のふるまひをせられけるが、さまくの馳走なかゝ詞にも述べたき事どもなり。四方の国王うち寄て、うれしさのあまり申されしは、われら此王の許へまねかれ、此ほどさまくと馳走にあひたれば、何にてもおのゝと申あはせ。此返礼をせばやとおもふなり。とても返礼を申ほどならば、此王のめづらしくおもひて、悦び給ふ事をなさいはいかゞと、おのゝ相談ありしに、東方の国の王申ていはく、我らつくゝとおもふに、およそ七珍万宝といへども、此国になき物なければ、曾てめづらしとおもひたまふべからず。しかるうへは、此恩を報ずへ

き物なし。所詮われおもふに、此渾純王の身において、不足したるものあり、それをいかにと申に、我らおのゝといへども、六根具足したるへ十三オがゆへに目ありて物を見、耳ありて声をき、鼻ありて香をわきまへ、口ありて味を知れり。此たのしみいふべからず。此王において此たのしみを欠給へり。いざや此たびの返礼に、おのゝと心をあわせ。耳目鼻口の四つを堀りて参らせんとおもふはいかにと申ければ、余の三か国の王此よしを聞て、これこそ究竟の思案なれ。さらは此よし申べしと、渾純王にうかゞはれけるに、渾純も大きによるこび、これこそ大せつの御宝なれ。ともかくもよろしくはからひ給はり候へとありしかば、四方の王いひあわせ、それゝに役を請とり、目口鼻を堀けるほどに、日数をかさねて、ことゝく六根そなはりぬ。今はとて引うごかしけるに渾純は、死なれたり。これ愚にして智の暗がゆへに、此まどひをへ十三ウなすところ承り候へ。此君の近臣たちも、これにおとり候まし。目前の利欲にまよひ、邪曲の心より、さまくの伎能をたくみて目をよろこはしめ、心をたのしましめ、その賞をむさぼるの手たてのみ、心にかけ給ふかゆへに、彼渾純の目鼻を付ていのちの終るをしらさるがごとく、誰ありてつよく御いさめ申ものなきは、歎きても歎くべき事にこそ候へ。一人貪辰なれば一国乱をおこす習ひ。砒霜は芥子ほど服しても、あやまたず命をおとすの愁を生し。人をそこなふものと知れども、川芎の薬毒、単服して日を積ぬれば、頓死の難をのがれざるをしらず。君すでに佞臣姦人のために、邪曲の川芎を服し給ひ、薬毒肺肝に伝へて、命をそこなひ給ふの脉、

すでにあらはへ十四オゝれたりといへども、良薬口に苦ければ、酒肉の味をおぼしめすかごとくならず。たま／＼むるの臣あれども陽にふくみて陰にはき。茶の会と号し。口切と名づけ隠遁閑居の世すて人を学び、武士たるものゝ腰のものをぬき捨、人すくなにして狭き座に蹲り、酒飯を手づからさ／＼けて、主人みづから配膳に立など、ひとつとしてあやうからすといふ事なし。かゝる事を見ながら、たれありて諫る人なく、いよく誉いよく称し、雪の上に霜を加ゆるの人たち。たとへをとりて申さは、百喻經といふものに仏ときてのたまはく、むかし過去世のとき、波羅奈国にに五百匹の猿ありて林の中にあそびけれが。尼俱律樹といふ木にのぼりけるに、その木の下に、一つの古井あり。夜へ十四ウゝの事なりければ、月あざやかにさし出彼井の底にうつりぬ。此五百のゑんかうの中に、老たる猿の長あり。此月かけの井の底に、うつりけるを見て、かの老たるゑんかうのいはく、われら生々世々にいたるまで、夜はかならず出て光りをあらはし、此三界をてらし。わかともから迄自由を得さしむる青天の月の、いかにしたりけん此井の底にはまりて、死なんとし給ふ也。いざや我ともから力をひとつにして、此井の月を引あげ、命をたすけて、長夜の闇を、闇冥とする事なからしめんとおもふはいかにといひしかば、おの／＼尤と同じぬ。さていかにして此井のその月を、引いだしたすけんといふにかの老たる猿、先かの尼俱律樹の枝にのぼり、此ゑを堅くとらへてはいはく、おの／＼来りて我おしへにしたがえへ十五オゝ。始にきたらんものは我尾にとりつけ、式番にきたらんものは、我尾にと

りつきたるものゝ尾にとりつけかくて次第に尾にとりつく時は、長くむすびあひて、つゝに井のそこにいたるへし。しからばその終りの猿かの月をとらへて、出したすくべし教へけるまゝに、おの／＼もつともと同じて、おしへのこととりつき。次第にさがりけるほどに猿はおもく枝はよはし、その木もろくおれて、地におちしかば、彼つなぎあひたる猿ども、こと／＼井の底にちて、いやがうへに沈みかさなり、おしにうたれて死けるとぞ。されは是を絵にもうつして、愚なる人をいましむるの鏡とせよとて猿猴か月をとる絵をかきて床にもかくる習ひとはなれり。此おの／＼の侍たち上下をへ十五ウゝ着こなし大小よこたへ、居ならひ給ふ所は、まぎれもなき御さふらひと見えて候へども、君をいさめ道をすゝめむるの智においては、まつたく彼月をすくはんとする、猿にも似て候はんか、家ほろび国うしなはれ、世上の人口にのり給はん時、いかゝ御いひわけ候べき、それがし事その道にあらず、その器にあらずと仰候ひて、そのもとをかんが見給はず、そのすゑを御とがめ候て、御ふしんかうふり、此ほど相つめ候へども、二度御目見えもゆるされねば、是非なくまかり帰り候、あはれ心あらん人、漢の董宣が光武をいさめ奉りし、心ざしをつくして、おりを過ぎ御いさめ候はゞ、すこしは笠のうへに笠をかさぬるの、御あやまちものかれさせ給ひなん、よく／＼御心をしづめてへ十六オゝすこしなりとも聞いれさせ給へ、あなかしこなをさりにおぼしめすべからすなど、かつはいかりかつはちしめてこまやかにいひ置、その身は国へかへりける

## 〇漢の董宣か事

漢の董宣は、光武帝に仕へて、洛陽の令といふ官にすゝみたる人なり。寧平公主の乳母の子、何がしといひけるもの、白昼に人を殺して、公主の家にはしりこみ、その身を隠しけり。このゆへに奉行といへとも、その咎人をめしとる事あたはす。帝の息女に乳をまいらせしものなれば、その權威をたのみて、よろづに我意をふるまふことかくのことくなれば也あまつさへ乳母は、我子のとらへられん事をかなしへ十六ウゝみおもふがゆへに、参内するにもかの咎人となりける子を車の内に隠し乗せて出ゆきけり。董宣これを聞て、にくきやつばらが振舞かな。いでその男いづくにかくれたりとも、董宣かあらん程、いくはくか通べきと禁裏の御門外にうかどひ居たりけるに、案のごとく乳母の車、花やかにかさりて禁中へいらんとせしに、董宣つとあらはれ出劔をぬいてさしかさし、汝が子放逸にして、權威をふるひ、上を軽しめ、おのが愚をもつて白昼に人をあやまてり、非義なる事を知るがゆへに今乳母の家にはしり、深くかくれて命をたすからんとす。乳母また子を愛するに似て、かへつて子を教て不道ならしむ。汝か一人の子に替て、公主のへ十七ウゝ惡名を天下にあらはさんとするか。人を殺せし罪まさに死すべし。たとひ公主たりといふとも、此咎人をいたわりたすけんとしたまはざ、ともに我劔にかゝり給はんするぞ、まして乳母をや、すみやかに彼咎人を出せもし異義におよば、車の内にかけいり、士卒の手にかけ汝ともにめしとるべしと、使三度におよびしかば、乳母ちんずる

に道なく、かの咎人をおろしけるに、董宣やかて劔をめぐらし、目前に誅しけるを、見るにしのびかねて、乳母はかほに袖をおしあて、車を馳て禁中にいり、寧平公主に訴ければ、公主つかひをもつて帝へ注進あり。董宣ほしいまゝに法をおこなひ、罪ありと号して乳母の子を殺し公主といふとも此子をかばひへ十七ウゝ給はざ、そのつみのがれましき由、大家を惡口したりといきどほりを、訴へ給ひければ、帝おほきにいかり給ひいそぎ董宣をめしよせられ、汝なに事の法をもつて、此乳母の子を殺し、公主を惡口せしや、そのつみ死にあたるべしと、逆鱗のめならざりけるに、董宣がいはいくまことに天下の法をおこなひ、人を誠ある道にすゝめしめんとするを、かへつて御いかりにあひ候事よ、さりながら天子命して死を給ふにいたりて、申べき所なしといへどもねがはくは我一言を御耳に達し、そのうちいかやうともなりたく候と申、帝さらは何なりとも申べしとありけるに、董宣がいはいく、帝王の聖徳中興してより、此御威光にまかせ、御身にちかきがへ十八ウゝゆへに、彼乳母の子を愛し、その可否をも御心みなくして、ほしいまゝをはたらかせみだりにつみもなき民をころさせ、天下の人の恨を得させ給ん事を思ひ法をもつて正せし咎と号し、忠あるそれがしを誅せられば、臣が死を見て後の人あへて、天子の誤を申さし、しからば何を以てか天下をおさめ、いかにして民なつき奉らん、臣人の手にかゝりて打殺されんよりは、みづから死せんにはと、すなはち頭をもつて楹にうちあて血をながして狼藉たり、帝やがて小黄門をめして董宣をたすけさせて

のたまはく、董宣が頭を叩とならば、乳母に對せで罪を謝せしめよとありしかば董宣この詞をきいて頭をたゞきやみけり。帝また、のへ十八ウゝたまはく、いやゝ頭を是非にたゞかんとしたり小黄門兩の手をもつて彼が頭をとらへて、地につけよとありしかば、又兩の手をのべて頭をおしつけんとするになをゝ挑て頭をたれず。帝わらひて錢三十万を給はりけるとなり、さればこれほどの器量の人ならでは、上たる人の非はいさめかたかるべしとかや。

## 高名太平記

### ○卷之六

竊のものども注進の事

主將愚にして浮説を信じ敵を恐るゝ事

七仏といふ隠し文の事

大西浦の介鐘木町にかよひ放埒の身持有事

競馬香といふ酒もりの事

三島久次大將某によせて酒もりの事

吉之方の忍ひの者欲にふけりて本心を

あらはせし事

新田藤王丸足利基氏家臣となる事

浦の介智略にて鎧を挑撓をあつらゆる事

## 高名太平記

### へ十九終才

落し文並ニ反簡の謀に落いりし事  
疑竊鉄の漢といふ事付斉の田単か事  
梵字党と名づくる忠義の士の事  
銘ゝの智謀を知らんため題を出して  
軍の仕第を入札にせし事

## 高名太平記卷之六

### へ二ウ

### ○ほそりのものども注進の事

今は昔、吉之の家臣ども、先頃みちのくの何がしが家臣、詞をつくし理りを正して、さまゝ諫言をなし、忠貞色を犯して帰りしより、何とわきまへたる事もなければ、人ゝいづれも虚気味わろく、いかさま何とぞ分別を出し外よりむさと夜討などせぬやうに、くめんあり度事とひそゝといひしらぶほどに、俄に出来たる事のやうにむねふさかり心空になりて、病氣付ものあり、口にては、何ほどの事があるべき、まさかの時にいたりて、花やかなる事仕出たる人もなき物也、それは侍の第一たしなむべき道なれば自然の事ありとも、おどろくべき道かは、比興なりなへ二才〇どゝはいへと、底意のよろしからねば、おのづから枕もとに有明をともし、閨の戸にしりざしして、帯しながら寝るやからもあり、あるひは時ならぬ祈禱立願など、情味かきて、寺社に金銀をはこび、主君の息災を頼めども、実は施主の心ねがひおほく、守りぶくる首にかけて、肌をはなさぬなど、誠に愚なる事ども、

傍なる人の階くだりたるに、賢きも立ましりぬれば、見るにおかしくて、かやうの事は先人の出入を禁し、むさと行末もしれぬ商人小ものなどを、とかむるために番をすへたるこそ、たしかなる備へなれ。君子は易きに居て、危きをわすれずとはかゝる事にこそといへば、おのゝ此さし図にかたぶき、今も事のあるやうに、口ゝに番をすゑ、つまりゝにさしつぽへ二ウして、主人の居間なども多もいはれず、事ゝしく普請し、一方口にして二枚戸などゝ、利口氣にさしづなど仕いだし、堅く出入をあらためけれども、兼て敵かたより入おきたるしのひのものどもの計なれば、諸事鏡にかけて通じけるをしらず、かた腹いたき事も多かりけりとぞその中に赤豆屋清兵衛といひける。町より出入をゆるされるたる男は、吉之かたより頼みおきししのびといへども、元来敵かたより来りし名譽のしのびにて、そのかみ楠正成か恩をうけ、河内の国に名を得たる、富田林の村雲といひしものゝ術を得たるものなり、そのかみは郡中の役などもせしほどの器量、殊に博学多弁の勇士とかや時ゝは、敵方の案内、見とゞけのためと号し、内通のためへ三オへに出京の事度ゝなり、しかれどもさかしき人かなれば態と吉之が身にちかき譜代相伝の家僕を、かりそめにも同道し、表むきに取かはす文章は、あらはに書てしたゝめ、上つゞみの紙にいたりて、七仏とかや名づけたる、隠し文をもちひしかは、たとひいかなる発明のものも見しるべき事おもひもよらず、その外の事にも相詞をさだめよろづに、丁寧をつくしければ、まして愚なる知のおよふへくもあらさりけり、またある時は此同道の侍ばかり、京都にいた

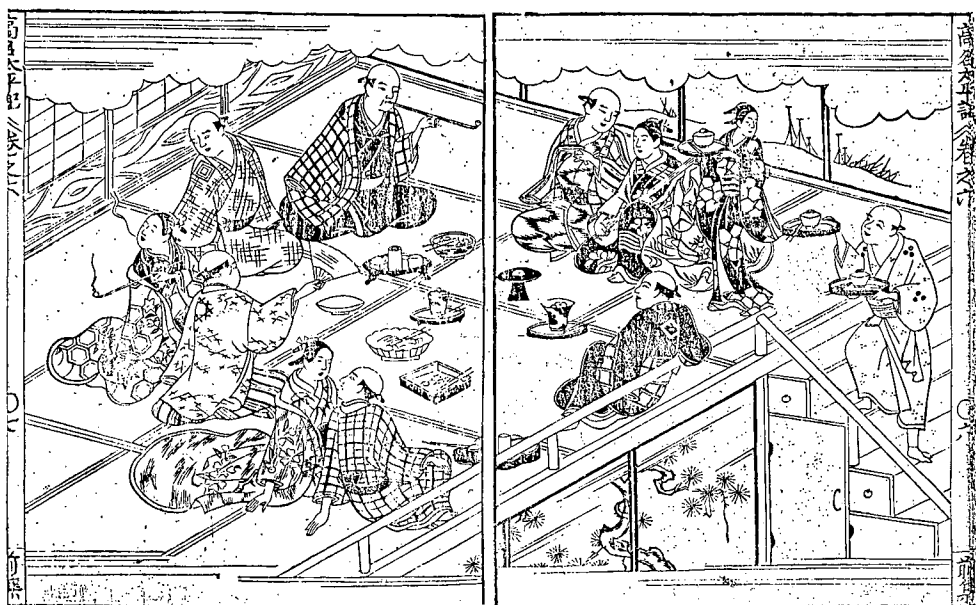
しうかゝはせけるに、敵大西が行跡、なかゝかはりたる事とおほく、明暮酒宴遊興を事とし、田畠をもとめ屋敷をかまへ、川がり漁し殺生をこのみ、放埒いふはかりなかりければいにしへより相なれし、妻にだにうとまれ、ほどもなくなりべへ三ウつせられ、よしゝおのれならては、世に妻はなきものかは却てこれまたのしひの一つと、色ある妾をあまたかゝへ夜とゝものたはふれをなし、昼は時ならず島原にかよひ、または伏見の里におもむき、とかく是ほどおもしろき事もなきふせひ、一子力の衆も誰ありて、異見する人もなければ、これに人こそゝのかされ、島原に行伏見へといそぎ、ある時は野かけ川かりに出たち、たまゝ辻的楊弓に立て、いざとすゝむる人あれとも、さやうの事は好しからず、平生に手なれたれども、それさへ人めおもひての事なり、おもしろからぬ態そかしなどゝ、四方山のはなしに仕替てとりあはねば、まつたく武道はすたりにけり、さぞあるらめとおもひし事など、しのびのものゝ帰て、つゞゝへ四オへ注進せし折などは、たれゝも手うちたゝき、大なる口をひらきて、心実よりよろこぶ氣しき、かゝりければ此しのびの者、二度に一度も偽りをこしらへ、底氣味わるき事の様子など、思ひ出したるかはにはなしつれば、いつとなく座申しらけて、色を変し目と目を見あはせ、かたづをのみてつきしろうに、又すこしも敵のゆたを語りいつれば、家こそりて悦ふほどのつきあひなりしかば、用心もなをざりになり、出入の吟味ものちゝは、ゆるかせになりもてゆきぬ、すはよき時分こそと、件のしのびとも、手くみなど大かたに、いひかはしひそめきけるに、彼

最前いさめかねつるみちのくの家臣、ひそかに人をつかはして京都の沙汰をうかゞふよし、さるかたより聞いたし、ほりゑ屋五郎兵衛かたへ「四ウ」より、さきたちて通しければ、大西方にもその心を得てあらましをしめしあわせ、くだんのしのびを窺ひける

### ○大西しもく町大さはぎの事

今はむかし、くれ竹の伏見に軒をつらね、章台の柳にあらねばと、桃の木原を程かく、路傍の情をむすび愛念にひかれて、我おちにきと女郎花のおほかる野へに仮臥の人もおほく、または暁のきぬくをいそぎ草葉の露のおきわかれんとするを、別んとして郎か衣を牽など、しのひやかに打誦し、あかつきはかりなど恨わたりて、ひかふる手には実よく、象をも虎をもとどめつべしそれがはける足駄にさへ、鹿そより来るときくも、いつわりならぬ心から、あはれにもゆかしくも、またいつかはと「五オ」わすれかたかるらめ、されは大西浦の介、いにしへの古傍輩とも二三、此里にともなひ、夜昼四日の程、居つづけにあそびあかし放埒の身もち、競馬香になそらへて、大酒を呑あひけるが、これも十種香の盤などにては、おかしからずと、伽羅を盤にひかせて、壹尺四方の板をこしらへ、廿番の人形を両方にたてならへ、主位客位によらず、相詞をさだめ、双六のさいを以て、勝負をわかち、山といへは川とこたへて、双方の人形を配り、次第に飲つづけとやくそくしけるに、高間といふ上郎、よつねにこへたる上戸なるを敵かたの大將とし、味方は浦の介か軍配にて見事に盤の上を騎かち、終に高間を飲つふしけるは、人こそしらね辻占の、心ためしの人数た

てとおもひ合する人もなく、たゞ「五ウ」大さわざのいたり遊ひと、聞みゝを立てうらやみける中に三島の久次とかや、田舎さぶらひと見えしか、同じあけ屋に泊り客なりける人此あいたの遊び浦山しがほに国もとへ帰りても一つばなしともなし度のぞみにて、此酒のぞみのよし、はしめて対面せしに、いつの程にかあつらへけん、金にて泥たる大將基の盤を此座中にかゝせ来り銀をのへて百式拾枚の駒をこしらへ、めづらかなる御あそびそれがしも酒好、はばかりながらいざ参りさうと、將基にあはせて歩一つ、金壹枚を、とりつとらるゝ度に、勝いくさの現賞と号し、宵より明るまで呑あひけるに、これも浦の介が駒くみに二枚も弱手なる呑人にて、中くおよふ所にあらねば、夜半すすさす飲たをされ、人なかと「六オ」(図15)もいはず、寝かへりして、見くるしき事もおほかりけり、はるかの後にいたりて、様子を窺ひきゝしに、此人吉之がたのしのびにて、このほど大西が行跡はうらつものよし、実かいつわりかを見てまいれと、大分の財宝をあてがひ、序なから茶の湯の道具などをも、めづらしきものあらば買もとめて来れとのいひ付あるよし、聞とくけしより大西かたには、かりそめながらひたくと取り、久次ならては酒事もしますと、私宅へも呼いれ、普請のてい、奢のてい、何つゝむべき事は、見たからぬ所までも打つけたるさまにもてなして、内証まで見とをさせ、御逗留中の御なぐさみにと、みめよき妾などもあてがい、金銀を湯水につかひて、よろづ心やすくもてなしければ、久次も今は欲に目「七ウ」くれ、ある夜ひそかに語りけるは、ちかごろ楚忽の申事ながら、自然軽き事にてても、



〔挿画〕〈六ウー七オ〉(図 15)

御仕官の望候ましや、か様にあたらず御器量を御持候て、いたつらに匹夫となりくだり年月を御おくりあらふする御かたとも見え申さず、もし御のぞみも候はゞ、我らか旦那なりとも、御とりなし申べし。いかゞおぼしめさるゝといふに、浦之介ことによるこびたるかほつき御心底かたしけなくとかう申におよはず候、しかしながらそれかしらも、その以前は纔の禄をも申うけ、勤仕いたし候ほどは、極真のみをおもしろくそんじ何事も角ありてこそ、存じつめて候ひしかいつぞのほどに心かはり、主人にふそくの事候ひて、御いとま申上がたにのぼり、万に氣まゝを致つけ、就へ八オ中色と酒とは此たびのたのしみ始、このおもしろさ、たとふるに物もなく、うへ見ぬ驚のおもひだし罷有候へば今さら中く仕官いたし候とも、此氣まゝさし出候はゞ、おもひの外に慮外などもあるべく、御見たて候貴殿にまで、御とがめかゝり候はゞ、いかゞとそんじ候間、それがし事は此まゝにて、一生をくらし申べしと存候、但一子力之蒸事、いまだ若年に候へば、彼めはしかるべき御屋敷へも事にふれては御出入を申させ度そんじ候よし、いんぎんにたのみけるに、久次またおもひづるまゝに、おかしたとへをかたりけるはなるほど御もつとも至極に候、御自分の事はさやうになされたるもおもしろかるべく候、しからは力殿は御仕官も候はゞ、此御ねんごろのうへ何しにそへ八ウりやくにいたし申べき、御相應の所へ、御きもいり申べし、もとの主人と不和たりといへども、世につゝれば仕へ申習ひ、むかしも、さるためしの候、一とせ鎌倉の基氏、世良田の城をせめおとし給ひし時、若杉の太郎が手に、十二三なる人

をいけどり。鎌倉どのの御まへにまいり。新田が一族のよし申て見参にいれしを。基氏みづから立出。事のやうをたづね聞給ひて後。御前ちかくめされ。あはれいつくしの人候や。敵となり味方となる習ひ。かやうに何の心もなき少人に。うき目を見するこそ不便なれとのたまひや。少人。父は誰ぞありのまゝに名のり候へと仰ければ。此人すこしもおくせず。顔ふりあげ。それかし不肖の身たりといへども。武の家に生れたるもの。かゝるおりふしに打死へ九才を決せずして。敵にとらはれ御前へめし出され諸人のまへにて恥を見ながら。何ぞ名のり候べき。怨敵のすゑにて候ぞ。はやとくく首をきり給へとありしかば。御そばの人くもおぼえずなみだを流しける。鎌倉殿もなみだにむせて。しばしは物ものたまはざりしが。やゝありてまたのたまふやう。父のゆくゑをしり給ひたるや。年はいくつに御なり候と仰あり。少人のいはく年は十四にまかりなり候。父はなきものに候とばかりなり。基氏あまりいたわしさに。三戸三郎にあづけ。高手小手をゆるしていたわり申せとなり。そのうちよく聞給へば。新田四郎が妾の腹に出生の子にて。藤王丸といふ人なり。されば日數を経て。入間川のたゝかひに基氏此藤王丸をめし出し給ふに。美童にて心さかしくへ九ウ。發明なりしかは。新田の一ぞくとあれば。当家にも一ぞくの端なり。人たるもの恩をうけて恩をおもはざらんや此ものめしつかふて置たりとて何の事があるべき。たとひことく断絶せさればともくるしかるまじとてめしつかはる。これより基氏したしく傍にてめしつかひ。夜々宿直にも参りけるが。十八才にいたりては力もつよく

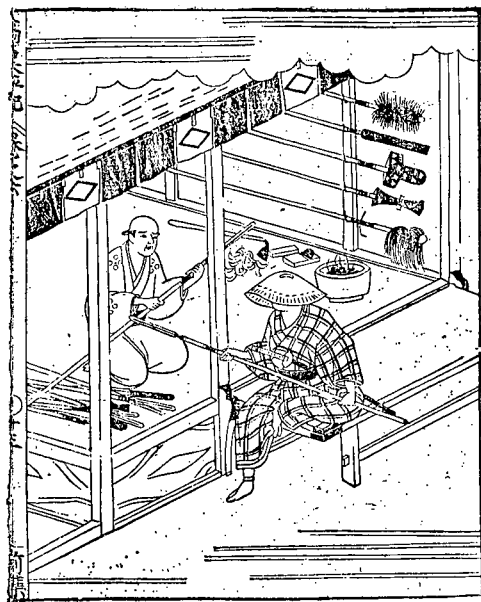
不敵にしてしかも諸人に仁をほどこし。和ありて愛もまたありしにより。すなはち義貞の本領を給り。新田四郎義一となりの。いよく忠をつくせしと申ためしもあり。しかれば此力の悉どのなども。たとひ敵たりといふとも。恩をあつくおこなはれ候はゞ。かならずよく御奉公候やうにとつねく御申おき候へなど。よそながらいふやうへ十才なれども。心にある事はかならず口にいつる物よと心ひとつにおかしく。かたはらいたけれども。たゞ承り候。何ふんいつかたへもよろしきにつきて。御とりなしたのみ入よし。ばかりそこくにいひすてまた大酒となりにけり

#### ○大西ちりやくの事

今はむかし。鎧をあきなふものありけり。名は三助とかやいひけるが。細工のめいじんにて方々の大守より。ためしの鎧といへばかならず此ものゝ承り聞事にて。年は五十ばかりのものなり。ある時此鎧屋の許へ。廿八九なる若もの鎧をあつらへんとて来りけるか。世にかはりたるのぞみにて。四十筋を請とりたり。あまり心得さる事ゆへ。ひそかに吉之の屋かたに行。御用心のおりへ十ウから珍しき鎧を請とり候まゝ。何事にてもかはりたる事あらは。御うつたへ候へとおほせにより。御めにかへ候と取いだすを見れば。ふとさ三寸の鎧の柄。中を操て竹のごとくにほりぬき。所々に穴をあけ。穂先はなるほど本身のきれ物来る八日までにわたし候へのよしせがみ申候とうつたへける。吉之屋かたには。これをきゝて此鎧のあつらへやう。いかさまふしきの仕かた。さしあたりてさのみ。何の役にたつべきやうにも見えねども



しや敵かたのものども、これにつきてかはりたるたくみあるまじきものにもあらず。しからば中をくらずして、常の鍵にしたて、本身を上げてつかはすべしといひつけにまかせて取かへりける。あとへ御近所の仕立へ十一オ、物屋のよし廿四五のおとこ文箱をもちて馳来り。わたくし此程仕立袴百くたり、いつくともしらぬ町人のかたより当八日までにと申やくそくにて、請取申候所に替りたる文彦通ひい申て候ゆへ、御注進申て候と申、やがてうけとりひらき見るに、吉之此たひ飯屋敷を替、新しく要害をかまへ。ちかくに移徙あるよし。たしかに承りとゞけ候、その節かならず申あはせ、一会もよほし申へく候との文彦、またおのく心をくれて、何をいかに見出したる事としもなけれど、われ人の中に心おきあひて、かゝる事は吉之の近臣二三人ならては、曾てつゆはかりも洩すべきにあらず。たれか此よしを敵かたに内通したりけん、一家中のものども、おもひく心くくに。うたがひあふはしとなりて、へ十一ウ、諸事につきての相談もとりしめたる事一つもなければ、いよく疎くなりゆくまゝに。たゞ一命をのがれいかにもして身のいとまを申請、心やすくつかかなからん方に。奉公をもかせがはやと、今日までも無二の忠臣と見えし人も、これよりそ比興なる氣を生ずる。手はしめとはなれりける。されはかゝる疑ひの心より見れば、さしもなき事にも讃をつけ、よのつねの事をもあやしと見る事、ひとへに疑竊鉄の漢にも似たるべしそもく疑竊鉄の漢といふ事、むかし唐の事なるにある時鉄をぬすまれし人あり。彼ぬし家のうちをさまくに吟味し、いろくにせんさくしけれども、鉄



〔挿画〕〈十三オ〉(図16)

のゆくゑしれさりしまゝに。その日外より来りたる人、誰くにかと工へ十二オ、夫せしに。此鉄をぬすまれしは、慥にむかひなる家の男にてあるべしと不図おもひ付けしより、先だめしてその人のふうぞくを見るに、立も居るも歩行も、たゞ彼鉄をぬすみて、ふところに隠せしと見えて、氣をつくるにしたかひ、心をとめて見るに、いかにも此人のぬすみたるに極りたれば、呼かけて此事を、ひそかにかたり、とりかへさはやとおもひて、つと立てゆくあしもとより、彼失ひたる鉄を見つけ出し、さてもふしぎやたゝいま迄、むかふの男のぬすみて、ふところに隠し持たるありさま、立も居るもまかふ所なかりしに、たゞしは我見あやまりたるにやと、又それより心をつけて、彼おとこの起居動静を見るに、いさゝかも鉄をふところにして、隠さんと

する風俗にあらさりへ十二ウ(図16)けりとかや、これを名づけて、疑竊鉄の漢とはいふなり。まことにさもありぬへく、此家中の人の心にうたかふ事ある時は、彼心のまよひ、いよく超過して本心の鉄をぬすまれしなるべし。されば此事におゐて、隔意をおこす事、はかりことのつにてみなこれ大西が分別より出、軍者のかならずとする所なり。たとへを取ていはゞ、いにしへもろこし斉の国に、田単といふものあり。燕といふ国より攻ける事あり。楽毅といふものを大将としけるに、楽毅つわものを卒して、日夜をいはずせめしほどに、斉の城七十余を攻したがへたりといへとも、なを莒と即墨との城式ヶ所はつくしていまだ落居せず。田単は即墨の城をかため居たりしが、そのおりふし燕の昭王死給ひてその子を帝とへ十三ウし恵王と申よしを聞出し、田単やがて謀を以て燕に沙汰させていはく、斉の王も此ころ死たまひぬ。しかりといへども七十余城は攻おとして莒と即墨の二城を拔得さるには、大きなたくみある事なり。その故は、今燕に王なし、此ひまをうかゝひて、楽毅たちまち欲をおこし七十余城を攻ほろぼしたる威勢にのり、燕の新王と心よからぬ事あるを以て、何ほど我忠ありとも、終には誅せらるべしと、死をおそれ居るゆへに敢て帰らず、ひたと斉を攻したかへんとする体にもてなせども、実は此兵を引いて南面し、みづから立て齊王とならん事をたくむがゆへなり。此心ざしありといへども、斉の士卒の心いまだ和せざるがゆへかく隙とりてゆるく攻るまねしていたづらに兵糧をつへ十四オいやし、日かすを経る所なりともつばら誰いふともなくいはせければ、燕王この取

さたを聞いていかさまさやうの事もあるにやと、大におどろきいそぎ大將を替て楽毅を帰らしめたり。士卒みな後の將を得てより軍配をはしめ軍令諸事、楽毅とは各別に相違しけるほどに士卒また働かたくて、軍立しどろになり、手配前後して心まゝならねは、將はいかりて令を出し法をおきてみだりに軍卒をおとろかし、成敗よくことなるに憤をふくみておのゝ和しかたく成もて行けるを、田単よくくうかゝひすまし、又令をくたして城中の人におしへて、食する時はかならずその初穂をとりて、銘の先祖を中庭に祭らしむ。日を経て飛鳥あまた城中にへ十四ウくたり。彼生飯をむらかり食事あり。燕の兵ともこれを見て、あれほどに鳥のむらかり下りて、城中に入は何といふ事そやと、あやしめぬものもなかりけり。かくあやしませ置て、かかねて城中に噂させけるは、かやうに城中人おほくこもりたる所へ、そのおそれもなく、鳥どものあまたに下りて、食をもとむるは、我おもふにまさに神か仏かとおもふほととのふしきなる智慧ある人きたりて我か上に立て師となるへし。奇妙の瑞相かなといひおりけるか。果して一人の卒を得たり。士卒かいはく臣をもちひ臣にしたかひ給は、我君か師となるへしと也。田単おほきによろこび、すみやかに立て彼士卒の手を引、うやまひあがめて師とし仕へ、軍中へ約束する度に神師の説と名つへ十五オけ、士卒をしたかへたり。さて程経てまた風説にいはく、田単は神師を得て、奇妙の事もあるうへ、此ほどたまゝく師といひあはせ給ふ事あり。我た七十余城にこもりて楽毅がために攻なやまされ、落城せし比降参に出たりし軍兵どもの、注進にまかせ

此二つの残れる城を賣るとも何ほどの事があるべきなれば。おそるゝにたらずといへとも。もし此降参人どもの鼻をそぎて。軍兵の前に立せ。此城を攻るほどならばいかにせん。歎き申されしよし。もつばら取さしたけるほどに。後の將これを聞て。もつともと思ひけん降参せし齊の兵。一人ものこらず鼻をそぎ。士卒にさきたゞせて即墨の城を責させけるに城中のものどもこれを見て。大きにいかり恨を生じあへて一人もへ十五ウゝうらがへらんとするものなく。いよゝ城を堅くまもりて出す。田單城中のつはものゝ燕の將のかくのごとく。降参人の鼻をそぎける不仁の仕かたを恨み。一人も降人となりて。此はづかしめを請んよりは。しかし城を枕にして打死せんにはと。堅く守るを見すまし。また風説させてはいくもし此うへに燕の士卒の。我城の外にある。諸人の塚を堀かへさば。それをかなしみて城を出。みなく降参せんとするなるべし。しからば居ながら落城を待の手だてなればかやうの事を敵のしらするやうにしたき物と。此中も申されたりなどゝいひふらしけるまゝ。例の愚將なれば尤とおもひ。やがて人夫をつかはし。城外にあらゆる。塚ともをほりうがたせ。死かばねを積上火へ十六オゝをかけて焼すてさせけるを。即墨にこもりたる士卒ども城中よりこれを見て。皆我父母兄弟の屍をほりかへさるゝさへあるに情なく焼すてらるゝ事。そもゝ何の仇がある。かゝる不仁の燕に降らんよりは早とく討て出心よく打死こそすべけれど。いかりをふくむ事十倍せり田單いまは士卒。いかやうに用ふとも心のまゝにして燕に降るもの。一人もあらじとおもひしかばみづから着到をつけて。

士卒の功をわかち。妻妾といへども恩賞の列をはづさず。ことゝく飲食を散じて賞をほどこし。士卒をふるまひ。中にも勇なる兵ともをすぐりて伏勢とし。老若の男女を城より出し。燕に降参すといはせ和睦を乞ひかば。燕の兵どもよろこぶ事かぎりへ十六ウゝなし田單また民に乞て。金千斤を得。即墨の富貴なるものにもたせて。燕の將にこくらせていはせけるやう即墨もし落城したりとも。我一族を掠給ふことなかれと。かの千斤の金をあたへさせけるほどに。燕の將も欲にほだされ何条さる事あるべきと同心したるゆへ。此度の落城にも。此金をおくりたるものゝ一族といへば。ことゝくゆるしけり。田單城中をおさめて。牛千疋をもとめあかき縋の衣をきせ外には五綵の龍文を絵かき。利鎗利戟を二つの角にゆひ付。脂をその角にぬりて火をともし。芦を束て尾にゆひつけ。ともに火をかけてやきたて。城の中に大きな穴を十ばかり堀らせ。夜半にいたりて件の牛を放牛の尾やかれて熱きに苦しみ。燕の軍にかけ入へ十七オゝしに火のひかり天をやくかとおびたゝしく。うかゝひ見るに皆龍文あり。少し触る人はことゝく死す。勇士五千人そのあとをしたひて。爰にはしり彼に隠れて。さんぐに。伐たてけるまゝに。城中あはてゝ上を下へとかへす所にはしめ帰り忠せし老若の男女みな銅の器をたゝきて声をひゞかしければ。その音天にこたへて雷のごとし。此はかり事におちて燕の軍おほきにやぶれ。はじめ樂毅かのりとりし。七十余城までとりかへしけらとなり

### ○忠臣智謀の事

今はむかし、梵字党といひて、悉曇の四十七字に、なぞらへ忠ある武士どもよりあひ、誓約をかため勇気をはげまし、事といはゞ何時によらずおのゝ心をひとつに「十七ウ」して、打死すべしといひかはし、無二のまじはりをなしけるものあり、ある時相談の事ありて一所によりあひ、酒などくみかはして後めいゝの勇気智謀のほどをかたりあひ、いさ後字にせましやとて、此党の組かしらより、題をいだしておのゝ計策を心みられけるに、その夜の題にいはいはく、たとへば町中に屋形ありて、東西に門をかまへ、南北の地とり窄、前後に長屋をかまへ、家中の面々軒をならべ、しかも用心してかまへたる所あり、此一かまへ多勢にして、武勇の人もすくなからざるべし、外に大家の武士ありてつねに心をあはせ、事ともいはいはゞ後巻し、引つゝみて討事もあるべしかゝる所などへ此人数をすゝめ、一せめに乗とらるべき手だてはいたさるべく候と、一人ゝに尋ねられしに、おもひゝの攻へ「十八オ」やう、心々軍たち、ひとつとして愚なる事はなかりき、それが中にも近町丹六とかやいひし軍者のいはく、かやうなる屋敷は、不意を討にしくはなし、只事の成就べき時節を待ち、敵の気を勞かし、体勞してよく眠る折あり機に臨て、兵をうこかし、相詞あい印をさだめ、夜討せんになどか勝て候へきとあれば、小野九内といふ人は、年五十あまりにて物に心ふかき人なりけるがむつゝとうちうなつき、なるほどおもしろき思ひ付に候、それかしもさのことく存候たゞし小敵あなとるへからすと申事候へは、彼方にもつねに用心の場所なり、悉くみな眠りの気さしあるべからず、大敵おそるゝに足すといへとも、

#### 高名太平記

たとひ臆病至極のものも、十人廿人と、組をたてゝ押時は、またあなつりにくかるべし、もつ「十八ウ」とも夜討の支度と見えざるやうに、先かたちをあやしく作り、いつわりをのゝしりて乗取候はんやとあれば、奥田彦介といひし人、なるほど尤に候しかし階子かけやとなくてはと申に、大將大西つくゝと聞て、いつれもゝ御執心ほと候て、うけ給り事の気配り、感し入て候、しからはよぶこ鳥をおのゝ所持あるべく候、その心はかやうにみだれいり候て、われさきと乱入いたし候へば、かねて誰か手にかけて、誰か大將を討申へきと申、定めはしれかたく候、さやうにては大將を討ても、もし見しらぬ時はひとと討入ゝ候て、いらぬ罪つくりいたし申物にて候まゝ、たれにても討たりと覚へ候時は、くだんの笛を吹申へく候、一つは引貝の心もちにてあるべく候と申されしかば、さすがは將へ「十九終ウ」の智なりけり、もつともと同じその夜のはなしはやみにけり、

#### 高名太平記巻之六

へ十九終ウ

#### 高名太平記

#### ○巻之七

海野九郎素姓の事並公事を誘事

欠落物の妻賢にして夫の死せざるを知らず

貪欲の侍みだりに人をあやまちし事

伊藤五、近藤六、阿附不臣の事

籠城評議違変につき家臣等心くゝの事

小野九内吉田長左衛門忠義の死を勧る事

海野重代の恩をわすれ臆して欠落の事

大西方の丞義勢富林等勇氣の事

大西方一味のものを義に依て命を軽する事

海野方配当の金を食ひ取逐電の事

片岡伝五藏川十郎大西が命をも請ず

忠義の勇をあらはす事並浦之介が目がね

に違す海野たちまち敗北の事

## 高名太平記巻之七

### ○海野九郎素姓の事

今はむかし、海野九郎といふものありさる大家に仕へて名高く、老臣の数に入のみか、国のまつり事に詞をくわゑ時の権をたくましくして、威勢おのづから花やかなり、外には極真の色をつくり、家門しげりほこえて、主君のおほへも他に異なるの人からなり、されば一とせ国に事おこりて、ゆへなきに主君命をおとし給ふ事あり、臣ら此うらみにむねをこがし、覚をむすびてひそかに仇をむくひん事をはかる、その中に大西浦の介といひけるも、海野に肩をならふるの臣なりければ、おのゝ心さしをひとつにして、ともに重代の恩恵を報じ、永く黄泉

### 〈一〇〉

### 〈二ウ〉

〈二〇〉のそこに怨念をやすめ奉らんとぞくわだてける、されば人の心はかりがたくいのちの惜き事は、恥にも替るほど、いつくしみ愛し、纔に百年のかぎりある身、その口腹をやしなひよき絹を着て温に臥、妻子をかへりみて、千秋我曾孫の絶さらんことをねがふは、これみな人情の常なりといへども、義のむかふ所は露命もおしむにたらず、恥を恥とするにいたりては、妻子なを捨べし、かくありて替たかく、これをつとめて身を立てるは、人世の大法にしてみつとも人たるものゝ常におもふべき道なるをや、今此海野九郎といひし人、そのいにしへをおもへは、そのさき三代の祖は、此家に仕へてもつとも忠あり、且博識にしていさゝかも行ひの道におゐて、あやまちそこなふ事なし、一とせ主君の国政をうけ給ひ、公事をさばく事〈二ウ〉ありけり、ある時同し家中に、よほどの役目をあつかりたる人、仮初に立出けるが、普通に帰らざりけるを、その家の、めしつかい、方々に手わけして、さまゝと尋ねもとめけるに、かいくれて行衛しれず、まして何をいかにといふ事もなきに、逐電せしやうに沙汰ありて、首尾よろしからず彼家出をしたりける何かしの組頭、法にまかせてその家を没収し、その妻を始家人とも、ことゝく主君へ出し、家中へ配当して、官仕すべきよし急度いひわたしけるに、此妻もちひす、みつから訴を書いて、御歎き申事、しきりなり海野訴状をひらき、一くよみおはりてはいはく、その方の夫かりそめに家を出たりといへども、帰らざるは何事ぞやさしあたりて何の越度といふ事もなしといへども、出て帰らざるに〈三〇〉おいてもつとも不審あり、又その家のみにあらず官所にきこ

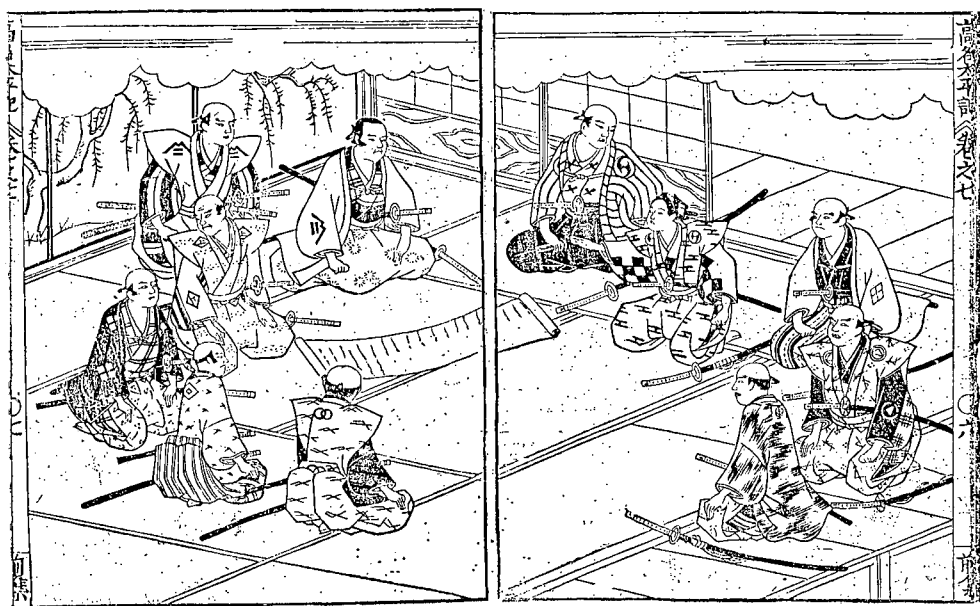
しめされて、人をはしらしめ、国に下知ありて、のこるくまなく尋らるといへとも、曾てそれかとおもふ行衛もなししかれば死に極るの所めい白なり、しかるをその方の訴をきくに、我つまさらに死せず、只行衛をうしなふはかりなり正しく御吟味候へのよし、再三にいたるは何とぞ心におもふ所もありやと、尋ねけるに、彼妻のいはく、我か夫わかゝりし時より、一人の姥の候を、母ともてはやし給ひて孝をつくし、一日片時もかへり見給はずといふ事なし、また一人のむすめあり、我つまこれを愛して、しばらくも見えされば、心をいたましめ、ねんころにたつねもとめて捨す、此これらの事をおもふに、一朝一旦の事にあらねば、我つまかろくしく家へ三ウ出でて、名を恥しむるの類ひにあらす候、このゆへにくはしく御せんき下さるへしと申事に候と申、海野又たつねていはく、しからばその方の夫誰にても仇かたきと悪まれたる人はなかりつるかとなり、妻のいはく我夫のつねの心さしやはらかにして義を重んじ、己をかへり見て人を責さるの人にて候へば、まして憎み疎まるゝ事、露ばかりも候はず、そのかみ大守より御恩賞の事候て、御秘蔵の馬に御鞍をきながら拝領せられし事候ひしを、宿所へひかせ候ひし刻、中間わたくしに此馬に乗、ひそかに馳てみさふらふ事あり運のつきにや又は冥加にまけ候ひしが、此馬おもひよらす仆れて、鞍に疵つき候を、我妻のいかりて、科におこなはれんかと、恐るゝのあまりに道より遁れて欠落せんとす、我が夫へ四オ、さらにその罪をいはず、すみやかに招きかへして、めしつかふ事いよく親しかりき、又我夫の家につたはりて、瑪瑙の盃あり異国の貢献

せしものにて、その形雀香炉に似たり、夫つねに珍客あるたひに、かならず出してこれを用ふ、ある時給仕せし中間あやまちて物を取りおとし、かの盃を打わりぬ、さためていかなる科にかと、一座手にあせをにきり、かたつをのみてひかへたれば、中間また頭をのへて罪を待けるに、我夫わらひていはく、汝ことさらにたくみてせしにあらす、あやまちは誰もする物を、それく盃をかへよと、さらに惜める色なかりき此さまの事いくらといふ数をしらず、終にいかりを見さぶらはねば、まして人をいたため、心に憎むの態なしと申せば海野かさねて、もししからは、誰にてもそこもの金銀などへ四ウ借用せし人はなしやといふに、妻のいはく、なるほどそれは度くゝの事に候、しかしなからおほくは借しても、切を定めず、利息といふ事もとらず手づかへたる折ふしいひも出れと、なしとさへ聞つればいつまでも乞事なし、これによりて人みな、程よくわきまへ給へり、たゞし何の何かしといふ人ありて、三十両をかり給へり、年月へたゞりても帰し給ふ事なく、そのうへにまた、ちかき比金五両の無心ありしおりしも他の用にたち給ふ事ありし上にて、手まへになかりしかば、借さすなりにき、此人したちに借たる金のおそくもありて借し給らぬにやと、おもひたるけしきに、いとよろこばすなる顔して帰りぬとかたるを、海野つくく、と聞てさて彼妻をかへし、ひそかに彼金を借りてへ五オ、帰さすといふ人をまねき、その方義、いつかたよりも金を借りたる覚えなしや、その事を訴るものありといふに彼人あらそひていはく、それかし身不肖に候へとも貧にならびて恥をかへり見す、一罎の食をあまなひ

て、あへて美味をむさほらす。身には絹をかさねされとも。木綿を以てたのしみをなす。なんそ此ほかに人の金をむさほり候はんやといふ海野されはこそとおもひて。その方武士として。大に表裏あり。先年何月いく日に。何かしが金卅両を借りて。かへし給はぬはいかにと尋ねられ。彼人色を変しさては事顕れたるよとおもひしかは。詞前後して陳するに道なし。海野またはいく。その方まへの金を帰さずして又五両の金を無心せしになしといひたりしを腹立し。心に「五ウ」邪あるかゆへに。人をうらみのために殺害せしは何事ぞやすみやかにそのゆへを白状し骸をうつまれし所を申されよ。すこしもいつわりをかまゑ。詞をかざらば。急度拷問におよふべしとあらゝかにいはれ二たび陳するにおよばす罪状ことくくあらはれ。終に斬罪におよびけるもひとへに海野か智のいたる所なり

## ○海野九郎不臣の事

今はむかし。伊藤五といへる武士あり。近藤六といふものあり。玉出七郎といふ侍あり。此三人は海野九郎か権勢をしたひその風をのぞみて。馬蹄の塵を追ふの組なりける。此度一城の安否いかんと。衆議まちくなりけるにも。海野か詞の可否にまかせて。ともかくもと見合せ。時へ六オ(図17)をうつし日を教へ莫太の主恩をわすれ。面友のちなみに表むきをかざり。奸曲弁佞の口さを動し始終の舞仕舞をまぢり。城中の惣勢三百人も。あるべき中にも。心を膠漆に交り。死生を義と共にする族は鳳鳴を庭樹に願ひ。鱗角を山野にもとむるよりも。なをすくなき世にて詞すしく舌をならして大西かたぞ海



〔挿画〕〈六ウー七オ〉(図17)

野かたそと、りこうげにいひちらし。けふも相談あすも軍談と、肩を  
いからし拳をはりて、あたりに人もなけに、菟いひ角いひ我わ顔に。  
いそくとしありくはかりなるものも多かりけり。ある時大西方より  
人をつかはして、惣勢をまねく事ありけるに、海野をはじめ与力して  
あつまり、来りし人く、物頭には大野庄兵衛、吉へ七ウ山長左衛  
門・笹小笹・甲村伝兵衛、近藤六・大山源五兵衛、佐藤伊七・原宗大  
夫岡野銀左衛門同八十郎、長沢六郎、稻生十郎、松瀬久大夫、綿辺角  
介、小野九内、同郷右衛門、瀬多又六、近町丹六、伊藤五、玉出七郎  
をはしめとして、百よ人ぞ、あつまりける。大西いはく、いづれも今  
日申いる義、別の子細にても候はず。先日すでに籠城いたし、おの  
く一命をすて、合戦を上げまし。死をいさぎよくして、亡君に追  
つきたてまつらん事を願ひおのくにも申談し候所に、いづれも主命  
を重くし、義戦におよばんとの御心底尤とそんじながら、さしあた  
りて大切な御命を亡君にたてまつらんとおぼしめしたれたるは、  
感悦申つくしかたく候。さりながらしりぞいて事の心をあんじ候に、  
たとひへ八オ此人数をもつて、当城をまくらとし、一人ものこらず  
討死いたしたりといふとも、亡君の仇を世にのこし、一太刀もうらむ  
事なくして、われく義戦いたしたりとも地下に何の面目ありて、亡  
君を見たてまつるべき。しかれば此一味れんばんの衆をもつて、かの  
国にしのび入一人なりとも身命をすて、亡君の仇を害し申さば、それ  
こそ厚大の主恩をも報ずるにて候へけれ。さるによりて第一に此事を  
申談しおのくの了簡をもうけ給り。よろしきにつきて片時もはやく、

此はかり事をめくらすべくと存候。いづれも心底をのこさず、おもひ  
入候はゞ、御申あるべし。御ゑんりよにおよぶ事にあらすと、申わた  
しけるに、吉田長左衛門小野九内、目と目を見あわせ、たがひにへ八  
ウ猶予したるけしきなりしか。九内まづ申ていはく、それがし風情  
の、かやうに申いだすも、傍若無人のやうに候へども、とても御詞お  
りて候へば、心底をのこし申もいかゞしく候間、申てみ候はんとそん  
し候。あしかるへく候はゞ御もちひなき迄にてこそ候へ、所詮それか  
しのぞんし候所は無勢なりといへともみな金鉄の武士にて、一騎当千  
の人くと見えて候うへは、百騎たりとも千万の敵になどか応せさる  
べきにて候へば、たゞ路次のほどはいかやうにも身をやつし候て、五  
人十人づゝ一手に組て、あき人となり飛脚となり、おもひくにかの  
国に下り、首尾にまかせて不意を討には、白昼といふとも恥べからず、  
表裏より我さきと責いらんに、纔の誓ほどなる城なれば、なじへ九  
オかは責おとさで候べき。但おもてだちておびたしくかり候に  
は、手だてあるへき事か御賢察いかゞと申たりしに、吉田のいはく、  
いかにもくそれがしが存よりもさのとをりに候。しかししのびと申  
事の候を、ぞんじ寄候はいかにといひけるに、海野九郎一つく聞い  
たりしか、人々の異見にもおよばずとりあへずしていはく、おの  
くの申ぶんもつとも一旦はその理候といへども、ちか比楚忽のやう  
にそんじ候。とてもたゞかひにのぞみて伐いり候ほとならば、此城に  
とりこもり、国中の民を催促し、兵糧をこめ兵を練りて一年も二年も  
大軍をひきうけ、金石の約をなしたるおのく我ら、策を帷幄のう



ちにめぐらし、忠戦をつくさば、主君の一族いかてかよそに見たまはんなればへ九ウ事難義におよば、和をいるゝにうたがひなし、和をまちて亡君の仇を乞出し、首をはぬる時は、手をぬらさずして本懐を達するの一つ、これにこしたる謀はあらじ、とても戦はゞ角こそといふに、富林はいはく、それはなるほど御尤のやうに候へども、我くはまつたく謀叛人にあらず、ただ亡君の仇を討んと謀るのみに候ゆへ、他の手をからずして、この一味のものども、何とぞ心をひとつにしてしのひ入、討とも討るゝとも、運は天にあり命は義によりてかろきなれば、一命のかきりはたらきて、みづからかけいり、みづから手にかけんと思んずる也、しかるうへは何の科もなき民をかりもよほし、心にもあらぬ劔戟を、ふらせ、父を討せ子を殺させ主君もなきわれく、たとへ十オひ忠ありとても、何をもつて賞をおこなひ、利ありて後何をほとしてその功をあらはさんとおぼしめすや、勝利を得て仇をむくひ、本懐をとけたる跡はおのゝ我らにおゐては殉死の身なり、千万に一つも死せざるやうありとも、終にまた離散のわれくか身をもつて、人質をとり軍令をきひしくして、一人ものこさしと責はたり、日夜に催促したればとて、心に感じ身をすてゝ、したがひ来るもの一人も候まし、ゆへいかなとなれば將たる人すでに死し、主君とあがめ来りし目あてをうしないしゆへなり、しからは我が主君の恩恵をうけ、一城のしたに妻子をやすくせし、譜代相伝の家臣ら、随分のちからをすぐさずして、誰か此功をなすべきと、理をつめて申ける時、近藤六へ十ウ玉出七郎、されはこそ誰あつて一人も、此列

にありあふもの、たれか命をおしみ、誰か身をいたはるには候はねとも、それは畢竟十死一生のたゝかひと申にもあらず、ひとへに、夏のむしのとんで火に入にてこそ候へ、たゞしそれかしかなる所は、彼國にしものびいり、吉之か物まふてか、又はおりふし茶の会と号し、他行をこのみ候よし、その節をよくくうかゝひ候て、半弓か鉄炮にて、ねらひよりて一打に、うちすてにして立のき候はんはいかに、これひとへに工藤すけつねか、川づを討せしはかり事にて、跡をくらまし害をしりぞけ、しかも存念をたつせしにあり、工藤は道ならすして殺害の科ありわれくは主君の仇をむくひ、身をたてんとするの手段、人を以て人を殺させへ十オつれば、その罪のかるゝ所なきにおゐては、その相手を出すはかりなり、もしかやうにはと申を、たかばやし定七すゝみいて申けるは、御詞なかに候へとも、その御さしつは手のひにして、しかも臆したる行かた、人をもつて人をころさせ、科を人におほせて、身をのかれんとならばこそたとひ身をのかるゝ様子ありとも、侍のすべき道に候はす、たゞいく度も富林とのゝ御詞肝心いたし候といふ、海野きいて、いやく十死一生のたゝかひとはいへども、時により事にこそより候へけれ、不意を討といふ義につきて申さは、手たてをもつていかやうにも、はかり事候べしゆへいかにとなれば此人数をすゝめて戦を決し、夜討にもせよ昼討にもせよ、強義にかゝりて攻候はゝ、たとひ一人当千の武士へ十ウ金鉄を身にまろめて、無二無三とぞんし、かけいりくきりいれく候とも、世に鼻高き吉之か家中、こなたのごとく勇士ありて、しかも大勢おしつゝみ、命を



〔挿画〕〈十三オ〉(図18)

かるんじ義を恥て、おもてもふらず切て出なば、多せいといひあら手をかへもみにもふてせめられ、味方の武士何ほどいさみすゝむといふとも無勢なればなとちからつきさらん、殊に後つめをまつといふにもあらず、敵は大ぜいといひ、ことに後つめすへきおほへなきにあらず、しかればいたづらに犬死して、本望をもたつせぬのみか、なましいの事仕いたし、物わらひにならんよりは、誰にても家来の内、一人をさしつかはし茶の水に毒をなかし、人しれずころす物か、事あらはれて難義ならば、尋常に打はたしれんゝに手をかへ品をかへ(十二オ)いかほどもねらひなば、終に討すといふ事有へからず、たゞしいにしへ阿新とのゝ、父のかたきをうたれしやうに、少人を小性にしたりて、

折をうかゝひて討するものか、いつれに御思案あるべしといふに、大西ははしめより、一言もいひいださず、海野玉出が顔のみつくゝと見ていたりしが、力の添まつるがり、父浦の介かたはらより、つかゝと立いて、さりとはいつれも、御了簡のほど、承り事とぞんじ候、まことにさやうにては百年も、いきのび申にて候はんすれとも、此節もちひがたき手段に候、ゆへいかにとなれば、おのゝやわれらが命は、はやことゝく死期ちかくせまりて候、しかるうへは、とても死すべき期の来りたる命、むけにひとり死をとげ候はんよりは、目ごろ習ひおき候武芸のほとをもためし、我ゝが露命を、は(十二ウ)(図18)ごくみ来り候その水上を断たる、かたき一太刀づゝもうらみ候て、いさきよく命おはり候やうにとの相談にこそ候へたとひその場をさり、その難をのかれたりて、生れながら武芸にそだち、弓馬の道を心かけしものその恩顧ありし主人にはなれ、たれあつて身をやすく世をわたるべき手だてあるへきや、しかればいたづらに浪人の身となり、ありつきを願ふとも、非義の罪に主人をうたせその敵を他に討せ、何のめんほくありて人にましはり、身上をかせぐやと、うしろゆひをさゝれ、にくみそしられは、ひとへに飢て死をまつり外は候まし、されは命はせまりたる身の、なにのたのしみありて、のびゝくとしたるはかり事はおほせ候やと、りくつをせめて申ける (十三ウ) ○浅井家臣とも口論の事

今はむかし、彼大西力の丞か一言につきて、小野九内を、はしめ、高林定七、近町丹六など、口をそろゑて、なる程力の丞との仰のとをり、

われ／＼は先此御れうけんにつく方に候と、は／＼かる所なくいひければ、海野すこし不興氣にてそれかしなどの申所は古風にて、若き衆中の心には叶ひ申さぬ筈とそんし候へとも、此一座にても古老といはれたゞいま迄も国のまつり事におゐて口をもそへ申たる身なれば、一とをりをり申てみたる分の事いかやうともおの／＼おほしめすまゝに、御はからひ候へとそれより大西にむかひ、先／＼城内にこめをかれ候、御用金なども候べし、もはやおの／＼我らとても離散の身、明日よりの糧も心もとなく候、へ十四才、早く／＼出し候て配当しかるへく候と申されしかは浦の介打うなづき、なるほどその義もさきたち候て、勝手まで取いださせ置て、扱一家中へ配当の義、いかやうにいたし候はんと尋ねしに、それは申にやおよひ候べき、知行高にあはせて配分候はんかといふ、大西はいはく、いや／＼さやうには致かたく候、そのゆへは、少身の人に眷属おほく、あしてまとひの子持たるか、知行にあはせて配当をうけ候ては中／＼請ぬこそましにて候はめ、高知の人はしかも子すくなくそのうへ分限相応にたくはへも候うへは、人別の頭数にて、此たひの配当は然るべく候と、目録をとりよせ御用金の高を見あわせ、先海野大野兩人に、配当を付て、墨付を渡しければ、海野世にうれしげにほ／＼ゑへ十四才、み、いたゞきて袖にいれけるはよその見る目もいな物なりさて銘／＼に配当の事おはり、又手当の相談すべし、いく度も／＼御家のため身のため、後の人口もあるなれば、多分につきて計略をめくらし候べし、今夕の事は、老たる若きによらさるへく候、めん／＼の心のたけ御申候へと、とりしきり相談するに

なりて、海野、大野兩人は、かりそめの用に立たりと見えしか、待ども座に帰らす、こはいかにしつる事ぞ、此人／＼よもや違変あるべきにあらじ、さらばたづねよと、残るくまなく尋ねもとむるに城中に見えねば、人を馳て呼せけるに、海野か屋しきははや立退たりと覺えて、妻子諸道具のこりなくとりはこび門戸もあけはなして、のこりとどまるものとは中間へ十五才、小もの下女はした、めい／＼の着類とりあつめ、主人我をいかになれとて、一言のいとまもなく、かくは捨置て出給ふぞかゝる人を今日が日までのみ来りつるおろかさよなどゝいかりはらたちけるありさまを帰りて大西に訴へけるに、ぞ力之悉をしめ一座の若ものさても憎き海野が仕かた、先祖の名をもおとし、数代の忠をもいたつらにして、よくそ命はおしかりけり、さればこそ宵よりかれかいふ所ひとつとして義にあたらず、おのれが身をかばふ心よりのび／＼としたる謀をいひ、人の義心をも奪はんとしけるあはれその時誰にても、短慮をおこし飛かゝり、討はたして捨ばかりけるものを、とりになしたるくやしきよ、かやうの不臣なるおこの物は、かへつて敵のかたにとりいり、一旦の命へ十五才をつかんとて、注進などすましきにあらず、いづくまでかはのかすべき、追つめて討とらん、何のひまどる事あるべき、たれにても御同心候はゞ、あとより追つき給へやと八田兵助すんどたち、かけいでんとするを、大西しはらくおしとめ、それがしさいせんよりつく／＼と、事のやうすをうかゞふに、彼めが心底のみこまぬ所ありしゆへ、有無に胸中の存念をかたらず、よろづおの／＼の仕方にかかせ置候、さるによりて火急



〔挿画〕〈十六ウ〉(図19)

に取かけんと、詞にあらはし義勢をはげまし一ゆすりゆすり候へば、おもふ図をはづさず座にたまられすして逐電いたしたるものに候、かやうの奴原はかへつて返忠をも得いたさぬものにて、とかく身のほどに屈託いたし前後を忘して、事ゆかず、あまつへ十六オ(図19)さへおのが恥をおのれとさらすほどの事もある物に候これしきに御手をおろされずとも少もくるしかるましく候、私の宿意をもつて公議をさまたげずとこそ古人も申おきて候へ但自業自得とも申候へば、さだめてよろしからぬ説もあるやう候へけれど、いとのどやかにいひけるを、片岡善五磯川十郎、きゝもあへず座を立て、いたわしや亡君、つねに御機懸をかけられ、いにしへの忠義を思召わすれず、禄をくたし威を

たくましようさせて脇股塩梅の臣とし、日夜めしまつはされしその厚恩をわすれ一人はたちまち大鹿となり、惣勢のいさきをおとしめて失ぬ今は大西との一人をもつて、杖にも柱にもたのみをかけ、此指揮を待の所に、〈十七オ〉かく穩便なる詞を出し、のどやかにておはしますかやうなる相談にては、中く事ゆくべき謀にもあらず、心たゆみ勢ひぬけては、猶予の氣生するものなれば一人も立とまり、亡君の仇をしたふものあるべからず、それがし共はさきたちて、片時もはやく敵国へとしのひ入、何とぞ窺ひ候べし、いづれもは御あとより、ゆるくと御したくあり、二三年が内には御出候へ、めでたくそれかしらが手にかけて、高名させ候へしと、いひすて、かけ出ける人くこれとは立さはき、もつとも義とはぞんすれ共あまりそれは我かちなる仕かたと、引とめくしけれども兩人はきゝいれず、ふりはなちて出てゆく、されども大西一ごんもいはす、しづまりかへりてひかへたれば、一座もしらへ十七ウけて見えたる内、玉出七郎、伊藤五をはじめ、海野かたのものども、此さわきをさいわいと、よびかへし引とどめ、御座につかせ候はんと、われもくと立いでけるか、夜あくるまで帰らず、夜あけてのち浦の介、人くむかひて、涙をながし申けるは定てそれがし事、宵よりのていたらくに、いひ甲斐なきものとおほしめさるへし、さりながら、海野かつらたましい、とくに見ぬいて候へば、討てやすてまし、国中を引わたして、武士たるものゝ見こりするためしにやせましと、さまく工夫いたし候へども、大事のまへの小事といひ、かやうの事につきても、謀叛の色を隣国にきこへば、か

へつて事の妨とぞんじ。もだし罷有所に事を左右によせて。奴めらは逐電いたし候。それも存しへ十八オて候へども。残る一座の内に。いまだ臆病至極のものどもありて。海野に心をよせ大野にへつらいをなして身のかたつきを待族。いまだ座敷をふさげ居て事あらば忠節に。海野に告んと謀り候ゆへ。いよく口をとちてひかへ。但海野か所作。あまり憎くそんじ候ゆへ。はや先たちて人をつかはし。謀をめぐらし置候。しかしかやうに心くなる中にも。おのく心をひとつにして。亡君のために忠をつくさん事をおぼしめさるゝ条かへすくも感じりて候就中片岡磯川の御兩人。別して義心むねにせまり。人ませもせずかけ出給ひし。御心さしのほど。草葉の陰にてもさぞや亡君の御よろこひと。おもはず涙にくれ候ぞや。所詮手のびにしてはいかゞへ十八ウと存するのあいだ。いよく神水のみ。金打して死を同時に御ちかひ候へと。みづから三ごんほして九内にさす。九内いたゝいて三ごんほし。次第くにもりながす所に。御城下の町人大津やといふもの。注進の状をさへげていはく。海野とのこよひ私所に来り先刻御封つけおかれ候賤宝ども相違なく相わたし候へのよし切刃をまはし狼藉におよひ候やうに相見え候いそぎ御出候て御支配下され候へと申。おのく悦ひ下部ともをつかはし。急度めしとりて参るへしと。もみにもふで遣しける所に。海野はさきたちて此やうすを悟りひそかに蔵の戸まへをねぢ切金三百両ぬすみいだし。裏道よりぬけく。足にまかせて落行けるを。浦の介かはからひととして。口へ十九終オく。に下知をなし百性ともをかたらひ伏勢として置たるが一

度にはつと立あらはれ。あますましと追かけしに氣もたましゐも身にはそはぬすみとりたる金どもなげいたして帰しけれどもなを跡についでしたひけるを。やうく。にたすかりゆくかたしれずなりにけり。

## 高名太平記卷之七終

〈十九終ウ〉

## 高名太平記

## ○卷之八

浦之介亡君の母君をとふ事

陳の呉明徹齊の国を攻し謀を用ひし事

官金配当のあまりを以て母公に奉る事

赤小豆屋清兵衛と不破笠右衛門か事

忠義ゆへ互に疑を生じ義絶せんとせし事

浦之介夜討の手配十ヶ条の掟を出す事

堀江屋五郎兵衛首途をふるまふ事

人数だての事付タリ夜討の事

一揆のものども亡君の仇を報し事

## 高名太平記卷之八

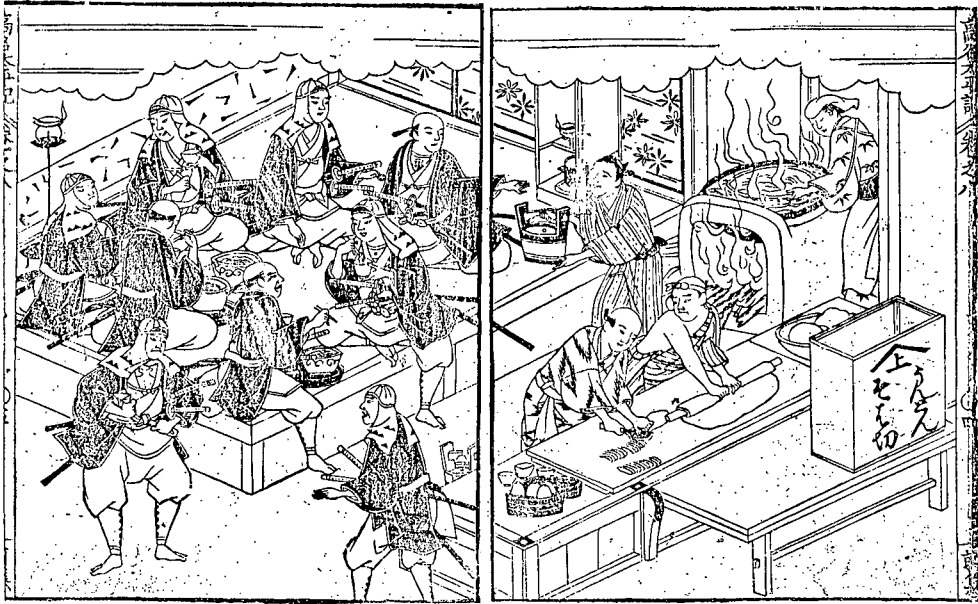
○浦の介亡君の母君をとふ事

〈二ウ〉

〈一オ〉

今はむかし。大西浦の介といふもの。亡君の仇を報せんために敵国にしのびいりけり。その道すぢなりければ。そのいにしへの主君のはゝ君。かすかなる住居して引こもり給ひける屋かたに。此世のなごりとやおもひけん。立よりて申いれるは。それがし事一とせ落城の後しばく御機嫌うかゞひにとて。参りもいたすべくと。兼て心にはかつて候ひしかとも。浪人の身となり候へは。よろづ心にまかせざる事ども。何かにとりまされ候て。心の外に打すくし候。此たひはありつきの事に。去かたへまかりこし候につき。路次のたよりにまかせ。御目見えをも申御勇へ二オ健の御ありさまをも。拜見いたしたく。まかりこし候よしねんころに申いれしかば。彼にもなつかしくゆかしとおぼしめされけん。人つてならで対面をゆるし。来しかたの事など仰られて。御なみたを催されけり。さてしもあるべきにあらねば。御いとま申とて。袖より目録のやうなる物をさし出し。これは先年落城の刻。一家中へ配当いたし。おのく離散の要用となし候。金子のあまり差上たくそんじ候てこれまで持参いたし候と。御局までさしいたし。しみくと御いとま申あげ。立かへりけるが。ほどなく騒動出来けるにも。夜をこめて人をはせ。いまだ何の沙汰もなきに。文箱一つ堅く封して。中間とおぼしきもの。此御門前に来り。番所にて渡し。いづくとも。しへ二ウへらずなりゆきぬ。いそぎおくに申次此文箱をさし出しけるを。ひらかせ御らんあるに夜前われら共四十余人亡君の仇をむくひんため彼地にたちこゑ。存念の通り事ゆへなく。本望をたつし。今朝故殿の御菩提所まで。引とり候よしの注進状にてぞありける。誠に陳

の呉明徹か侍となり。衆十余万統て。北のかた斉を伐けるに。斉には王琳を將とし拒守らせけるか。明徹王琳かはじめて至り。衆の心はまだ随ひ付さるを知り。夜軍をおこして急に攻しかば。斉のつはもの大に潰て。相国城と金城にわかれて逃こもりぬ。明徹また軍士に命して。攻具を益とゝのへ。又肥水を遮て城中にそゝきしかば。城中のつはもの。湿をくるしむ。多く腹へ三オを疾ものありて。手足腫て死するものあり。斉王。王琳はいくさ難義なりときゝて。かさねて皮景和を大將軍とし。十万のつはものをさしそへ。王琳をたすけしむ寿春を去事三十里にしてすゝみ得す。明徹か軍士これをきいてはいはく。城堅く支て落さるに。援のつはもの近くと来れり。明公の謀つきなんとするなりと。おちをそれけるに。明徹はいはくゝる時は兵をすゝむるに。速ならん事を貴ふ。援兵ちかきにあれとも。営をむすんで進み得す。味方はこのひまを窺ひて。急にとりかけ。その鋒を取りしに利ありといひて。みつから甲冑をとりて馬にのりつはものをすゝめて四面に疾せめしに一敵にして勝事を得。王琳をはしめ将六人をとり子にしたりといふためし。もへ三ウへかゝる事にや。されは此吉之方にも。大家の援兵ありて守護する事ありといへとも。衆心いまた信付せざるを知れり。これいよく夜をもつて攻いりしの一つ也。茶の会うちづぎ客来おほくて。中人以上はくたひれ。外よりしのひの党をかたらひて此時節をうかゝひしり。中人以下は私の酒もりさせしゆへ。事にあたりて沈酔をくるしむ。酔臥て騒動をしらず。伸吟ふしたるの失あり。これ彼肥水をさくりにて金城にそゝぎつるのためしな



〔挿画〕〈四ウー五オ〉(図 20)

るべし。後に大家あり時刻うつさばなどかたすけの兵来らさるべき。急にその鋒さきをとひしきしかは、彼四十余人を以て、数百の人をおひやかし、将吉之を手につけ、年来の素懷をひらきたり。たぐひなき武士の手下にこそと、はゞぎみもいま〈四オ〉(図 20)さら御悦ひのなみだをおとし給へりとぞ

○人数たての事並笠右衛門が事

今はむかし、小豆屋清兵衛といふものありけり注進の事ありて大西か  
方に行けるか、途中にて不破笠右衛門といひける浪人に出あひけり。  
これもいそかしけに見えけるが清兵衛を見かけ、ちか／＼とあゆみよ  
り、吉田とのにてはなきか、さて／＼御ひさしやと詞をかけ、来しか  
たの物かたりそこ／＼にしかけ、先かはりたる御所作、そなたはいつ  
かたへ御出どいふ清兵衛こたへしは、我ら事御ぞんじの一義以後、方  
くとかせき、何とぞ似合しき事もあらばと、心かけ候へどもおもはし  
き様子も承るに道なく、朝夕のけふりも絶／＼に罷成につきて、所詮  
身命をつなくべき、今日の〈五ウ〉はかり事には、うかふ瀬もあれと  
おもひとり、恥をすて名を隠し、むかしのつるき鏑たる世帯をくらさ  
んとて今はかやうの棒手ふりとなり候、なをくわしき事は途中といひ  
殊さらけふは、やくそくの事ありて、去かたへあきなひに参り候、何  
さまちかき内など、そこ／＼にあへしら立わかれんとするを、笠  
右衛門しばしとひきとゞめ、それにつき少／＼申たき事あり、さいは  
ゐそれかしが宅は、此一二町あとに候ま、しばらく御たちより候へ  
かしと、余義なくいはれ今さらに因をすて、隔意ありかほに、いなと

もいひかたくて、不肖顔に立もどりけるに、笠右衛門が宅は今日宿かえたるかと覚えて、纔なる道具ども取したゝめ四五疊敷の場所に畳などもあけ渡し、狼藉なる中に、簾一〔六オ〕枚ひろげて清兵衛を座せしめ、みぢかき抱にたばこなともてなし、小声になりて申やう、彼屋形の義いかゞ候やらん、兼ておのゝの宿意、御ひらき候首尾も、すでにこよひとかや、承り候に付、喜悅の心むねにせまり、とやかくとしてしのび暮し候身代、今朝ほとより仕舞がてん御覧のごとく見くるしき物どもかたづけ、市に出して売はらひ、三界無安の身となり候、貴公は殊に当地御あんないの役と承り候、いかゞ首尾のほど、それかしにもそと御きかせ候へかしなど、しみぐとたつねけれども、清兵衛心得ぬ顔つきしてこは珍敷御詞にあづかり候ものかな、何の事に候やらん、それがしは一円うけたまはり得ず候、それがし事は世上のとりさたにも御聞候ひつらん、去年主君御落去の後、めん／＼各／＼〔六ウ〕に妻子をかたづけ、資材雑具を持はこび候て、まつ身のかたつきを第一とし、離散のみきりは一族といへとも、たかひの患難をかへり見るにいとまなく、東西にわかれ南北にちりて礼義を正し極真をたて、よろつ丁寧の人と見しも、かゝる時には道にそむき、法をたつるによしなく今日の暮るに宿りを尋ね、明るあしたに糧をいとなむ老たる親いとけなき子、足よはなる妻に心をいため、譜代と号し家の子と呼し、下つかたのものとも、見るにむねふさかり養ふに手たてつきぬひとへに無財餓鬼の悪趣におちて身ひとつさへ心ならねば、主君の恩、国家のいきとをり、わすれたるにあらずして報するに日なしまし

てや高祿をうけ大官に除せし、海野は貨殖に〔七オ〕ふけりて民にくたり、大西は田地をもとめ、農業をつとめて、富貴をきはめ、生れなからにして得たるものゝことく、温に着飽まで喰、故主の事は夢にたもいはず、洛のかたはらに居住のよし、風のたよりに承り候、まして某など一人としてたとひ忠義の心さしをふくみ、景清が大仏供養に主徒となりて頼朝をねらひしごとく身命をすて、謀をなすとも、此これらの旧臣とも、手をおろさず忠をもわすれ、名を隠して渡世するほどの末世にありては、よも忠義とは人も申さし窮鼠かへつて猫を噛とやらん、きやつは尾羽をからして飢渴を苦しむかゆへに、死期せまりて亡君の仇と号し忠義たてを好みてかくは行ひしなど、彼人らにとなへら〔七ウ〕れて、一向くわだてさるこそましならめとおもひかへして人なみに、我／＼もかやうに商人となり候へは、夜に日にまして家業せわしく、古傍輩のかたへもたづめるにいとまなく候、何事をいかにと、その方にはいひきかせたる人候や、まったく身にとりて覚えなく候、かゝるうへにはさやうの噂も承るにつきては、疎ましくこそと陳しけるを、笠右衛門つく／＼ときゝて、いかさまに是はそれがしか不念にこそ候へ、拙者義は先年亡君の御汗気を蒙り、御落去の節も存ながら、身のほどをかへり見、さしひかゑ罷有候、しかしながら旧恩のほど、いたつらに致べき心底にあらねばたとひ火の中水そこといふとも、心をひとつにしてねらひ候はんに、なか達変の事候べき、某〔八オ〕かつね／＼の機嫌、申さずとも御目かねにも有べき所、さやうに隔意かましく候ては、何ともめいわくいたし候大小の神



祇も照覧あれ。我らも一味に紛なく候。くはしく御かたり候へといへども。清兵衛一ゑんがてんせず。いやさやうに御申候ても。我らにおゐては。曾て様子ぞんじ申さす。何ふん御心をはらされ候へ。定て人たがひにこそと再三ことわりを立けるに。笠右衛門今はこらゑかね。よし／＼御そんじなくは。御そんじなきまで。さすがに某も武士ならずや。諸侍の心底をつゝまず無二の忠義を吐て。断金の盟をなさんとするにそれを見ずしらぬ無眼の男。木石にとりたる犬さふらひ。ともに大事を語るへからず。あわれ命かな二つ。おのれ安穩には帰さし物。口惜しやと齒かみし。白眼つけたるへ八ウ。眼より。涙をなかし反を打。ねめつけ／＼恨げれども。清兵衛もしれもの。何ともいはいひ給へ。ゆめにも存せぬ事なれば身にとりては無実といふもの。浪人かたぎとて誰も／＼ひかむものにこそ候へ。先それがしは急用候あいだ。御いとま申候と。心こはくてわかれけるが。去にても此おとこ。いかさまにも無二の心ざしあればこそ義心おもてにあらはれ。いられるけしきもつともいつわりなき所。いはねどもいちしるし。といへ亡君いまた肝氣をゆるし給はずして。あやなく早世ありしといへども。かやうの忠貞なる士を。今度の徒党にめしくはへすば。天の冥理いかゞ也さりとて家臣大西に内意をも遂ずして。わたくしにもゆるしがたしにもかくにもかゝる時こそ談合する所なれ。一あしも。はへ九才。やく大西方へゆき。此通りを演説し。早々に一味させんと行んとしては。いや／＼きやつか色め。いかにしてもせき切たる風情なれば。宿所はあのとをりに仕舞ぬ。もはやこれからは死一段とおもひ

つめ。殊に頼にせし我事。案に相違の返答せしかは。短慮をおこしてかけいり。猪むしやをはたらき事しそんぜば却て邪魔なり。さはいひながら我一人の事ならねば。ゆるしてつれでも行れまし。進退／＼に極しかと。さきへもゆかず跡へもかへらす。しはらく隙とり居たるを。笠右衛門おもひかけなくうしろよりかけ来り。また犬めはそこ立のかぬか。武士たるもの。門立に。軍神の血まつり。刃をあつるも勿躰なしと。はしりかゝりて蹴る所を。かいぐどりて清兵衛。やれまで。笠右衛門はやへ九ウ。まるな不破との。これには段々様子あり。先同道して行かたあり。いさ／＼せ給へと引たつれども。笠右衛門聞もいれず。何といふぞ畜生め。うぬが陳し得ぬによりて。それがしを引たて宿なしの素浪人と。注進がほに訴出。我にも恥をかゝせうとのたくみ。四も五もくはぬとふり切を清兵衛口に手をあて。さりとてはさにてなし。今は何をかつゝむべき。我もなる程一味なるぞ。先まち給へ／＼と。いへとも／＼合点せず。人に何かと肝せいをいらせて。しらす顔はせぬ筈。今事急にせまりて。同意との偽り。せきたれはとて此笠右衛門か。だまさるゝ物でなし。身は大西に手をつかね。さま／＼といひこみ。亡君の御まへにて。御勘当御ゆるされ。死を一途に帰して。露命ししばらく預へ十才。りをきたる身。うぬめらに捨るいのちもたねばこそ。最前より手のびにして。おとがひをたゝかす。此宿意とぐるまては。汝か命を大せつにして。我手にかゝるを待べしといはせもはてず清兵衛。なみだをながし手をあはせ。さりとては。笠右衛門殿。せきもせいたり不破殿。その御一言を今までは。なせいひ聞せ給はさり

し、それがしも其うたかひゆへ。左右につけていつわりたり。まことに忠義のさふらい。おほしといへとも。大西をはじめわれ／＼まで。のかれざる所の忠節。貴殿はさいせん御かん気なれば。たとひ此事そらしらずして。奉公をかせきたればとて。うしろゆひもさすまじく殊にはまた新参なり。しかるを此度銚をになひ楯をつきての忠義。抜群の勇士。これをきゝてわれ／＼物の数にへ十ウもあるへからすと。感涙をなかしけるに。笠右衛門納得して心さしを疑からはいつわり給ひしも科ならず。武士たるものゝ惡口せられ。なか／＼生てもあられぬ所。堪忍ありしも御主のため。忠義のほどかんし入候。たゞいま迄の慮外のたん御ゆるし候へと。たがひに心うちとけ。謀こよひにせまりぬといふは誠かといふに。清兵衛ふところより。敵の屋かたの差図をいだし。夜うちの手あてを見せけるに

#### 定

一此度一味同心の衆中。亡君の仇を報するの外さらに余義の企これなき上はたとひ刃むかふものありといふとも。銚くちけ力たゆみて。逃る事あらんには。見のがしたるへく候。へ十一オ一  
一敵は兼て申ごとく多勢。味方は十分か一つ。等同せざる人数に候。しかれば戦は十死一生の働たるへく候。但懸るも引も。心をあはせ拍子にのり。指揮のまゝにしたかはるへく候  
一みたれ入り候刻。ひとり立候て深入御無用に候。もし深いり候て取こめられ給ひ候はゞ。御一分の儘にいたしみつぎ申間敷候。其上打死候とも。義士の数たるへからず候

一肌着はおの／＼渡し置候浅黄両面の半切たるへし。上着は思ひ入次第。但腰切にして着込たるべく候上がさねは皮羽織並に頭巾。尤その中に鎖銚巻か又は胃の銚を仕込。脚半の下すねあてたるべし。手ふくろの下も小手をさし。六具を堅申へく候。是は武士たへ十一ウゝるものゝ。誰もたしなむべき事にて。申に及ざる義に候へ共。兼て心しづかに御用意なくては期にのそみ失念あるものに候。

一相じるしは練を短冊に切候て。おの／＼の交名をしるし銘／＼皮羽織の肩に。一方をぬい付可申候

一たすきは白布たるべく候

一本望達し候刻。誰によらず。笛を吹て相図をなし給ふへく候。

一道具がらの義。火消の行列に出だち火のまはり警固いたし候体に見せかけ。取かけ候節もすでに乘こみ候刻失火とよはゝり候を相

図に。おの／＼多勢の体に見せかけ。夥敷騒動させ可申候。右相図これなき内。へ十二オ一随分静にあるへく候

一乗込候節近辺の大家へ相断。そのゝち打いり申べき事

一門戸など打放申用意に。かけや三挺拵置候。但し長道具は路次の見聞を存。鳶口に仕込可申唯半弓大刀鎗等の事。銘々常に御殿

練候得物たるへく候。

右之外委細の事面談に申触へく候

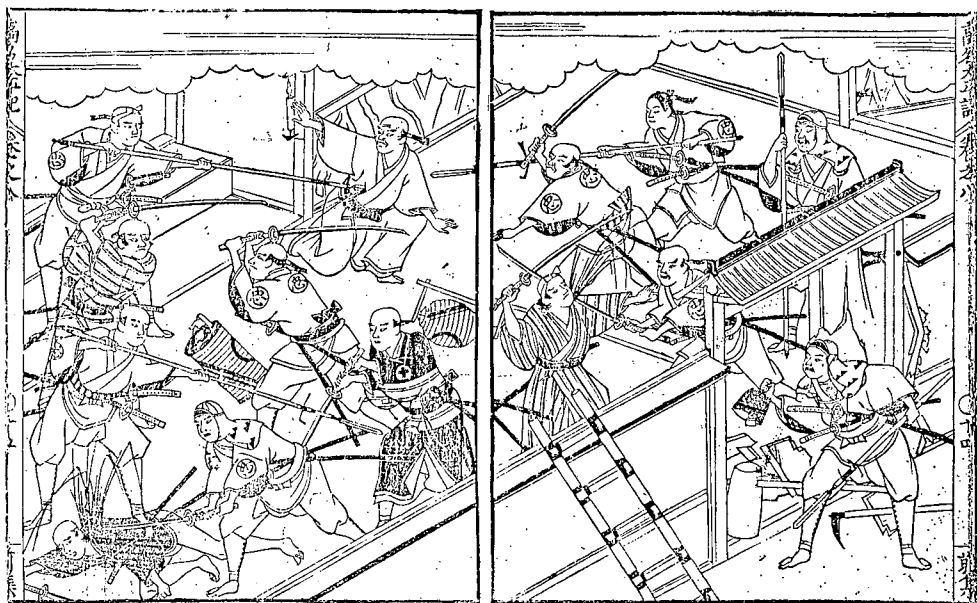
とありけるに。笠右衛門いさみたち。よろこひあへる事なのめならず。しからは一刻もはやく。大西方へ同道すべしと兩人うちつれいそきけ

るに、堀江屋五郎兵衛もいそかしげにこなたの方へ来りしか。清兵衛を見つ。さてもうへ十二ウレしや只今その方へ用の事ありて行所なり。内くの事首尾よろしく候よし。先大慶に候と一礼し。兩人をかたはらへまねき。扱大西事も早今朝宿所を仕舞遊山所に日をくらし暮候てよりおのくに合。かの相談も候手くみに候。それ迄とそんじ今日は貴殿たちをも同道申。芝居にても見物いたすべき支度いさこなたへと、打つれその日の暮るを待ける内。五郎兵衛かたりけるは。それかしも早二三日以前より宿もとを仕舞。宿なしとまかりなり。店屋ものにて朝夕を過し。けふとてもその通り。此よしを大西も聞れ候て。晩ほと義は。諸事それがしに申預けられ候ま。打たち候刻おのくに首途ふるまい致す役めへ十三オ。遠所の人は舟にてまねき。近所はそれかしめぐり候ま。何事も今宵面談にと申のこし。その身はひとりかへりける。

## ○首途の事並夜討の事

今はむかし。温鈍屋何かしとかやいへる。麴類屋ありけるが。そのちかき辺に住けるおとこ。五郎兵衛とかや。刻たはこを商売せし宿はいりありしか。身上ほどなく沽却して四五日も過けんとおもふおりふしつねに念比にかたりしかは。温鈍屋か方へ与風来りていふやう。我くもとは田舎ものにて。去方に奉公せし身なり。ゆへありて隙をもらい。当地下り手なれざる商などせしかども中く食こみて詮なければ。いかせんとおもふ所に国へ十三ウもとより俄に呼かへされ候ま。夜をこめて今宵旅立候はんと存る也。さるによりて此辺にて。

仮初ながら徳意となりし人。または国もとにての友なとも大せいあるにつき。情にあづかりし人く。首途をふるまはれ候ゆへ。けふまでもひたと遊山しありき候。それにつきそれかしも。又の面談もしれざる事ゆへ。こよひ右の人くを。一度にふるまはんとせんすれとも。御存のこく宿なしになり候へば。無心ながら。貴殿の宅御かし候へかし。すなはち壺入いたし候て。温鈍をふるまひ申度よし。金子二三両いだして。たのみければ。亭主やすき事と請合さて何ほどの用意すべきやといひしに。五六十人の心あてと申を。仰山なる事かなと。あきれながら。その用意へ十四オ(図21)して待しに。初夜過れども来らず。四つにかたぶけとも見えず。夜半のかねも音づるれとも。なを音もきかねは。いかゞしたる事ぞとおもふに。寝もやらぬ門の戸ほとく。とた。たそやととかめられ五郎兵衛なりといふほどに。いそぎくざり戸をひらけば。五郎兵衛まつはいりて。大戸をあくれば。大小さしこなししたる。くつきやうのおとこ五十人ばかり。どやくとはいるに。亭主も今さら肝をつぶしこはいかにと興さめ顔なるを。五郎兵衛うちわらひ。きづかいめさるゝな。押入強盗のたぐひにあらねば人を苦しめ邪の財を心かくるにあらず。やくそくの温鈍たべ申さんとて。みなく同道いたせしなりと。おくに通打つるぎ。したゝめよくして休息し。八つのかねともろへ十五ウともに。此宿を立わかれ。さて人数たてしたりけり。浦の介かさねて。五か条の掟を出していはく。先打いらん時。玄関広間にかけたる鍵の穂さき。又は弓の弦を切べき事。山とたつねば川と答ふる相詞をよくく覚へらるべき



〔挿画〕〈十四ウ—十五オ〉(図 21)

事三人組四人組にくみあはせ列をみたらす切てゐるへき事。目あかしのために何ものにもあれ手ごめにして案内させ可申事。たとひ仕損し切腹におよぶとも夜あけて後たるへき事と申わたし。大てうちん二張まつさきにたてさせ。階子かけや薦口。おもひくくに打かたげ。表門のそなへには。片岡。岡田。富林。八田。高林。小野九内。同名郷右衛門をはじめとし。浦の介か下知をうけ。廿人余おしよれば裏門へは磯枝。中村。堀江屋の亭主。岡田。倉橋。吉田なへ十六オををはじめ。力の丞を副将とし。よぶこ鳥を吹たて。大手からめてもみあはせ。やれ失火よといふほどこそあれ。高塀に階子をかけ。我さきと飛いりけるより。かけやをもつてさんくくに。門のくわんぬき打はなち同時にとつとみたれ入。浅井高見か家臣とも。亡君の仇をむくいんため。推参いたし候なり。我とおもはん人くは討とめて高名せよと。大音あげて名のりかけ。縦横むじんに切て入るといへども。味方は期したる事なれば。ぬきまふけたる太刀かたな。鎧の穂さは美のごとく。いきほひ炳焉として鉄石のごとし。敵は寝おびれて途をうしなふといひ茶香のあそびに夜をふかし。酒には酔ぬ手足は倦弓箭の道に疎くへ十六ウ。名利におほれしものどもなれば火事といふに動転し。太刀も刀も取あへず。肌着ながらにかけいづるもあれば。帯巻筋を二人して引あひ。ちぎり木を取おとしてみつから怪我をするもあれば。楚忽におもてへはしり出。盗人よとのしり。逃疵おふて臥もあり。殊によせ手は用意して。つむのやうなる物を手にもち。これに蠟燭をさして。玄関よりみたれ入し一間くにくらともなく指たれば。白

星にことならず半弓とつて打つがひ矢つきはやに射かけしかば、たま／＼恥あるさふらひよと見へしも、かいふつて逃かくれ、手にたつものなかりし所に、廿ばかりの男、長刀を杖につき、のがすまじと声をかけ、まじぐらに切て出しを定七へ十七才〇これにひかえたりとすきまなく渡しあふ。味方はもとより死武者にて、糟手薄手を事ともせず身をわすれてこみいり／＼、無二無三にせめあふほどに、あまりつよく切たてられ、眉間にあたりしきつさきにおくびやう神や引たてけん長刀をすてゝ逃てゆく定七つゝいて追つゝき、一打にときりつけしが、少すんやのびけん、肩さきすこし手をおほせしをなむ三ぼうしそんぜし、いづくまでかのがすべきと、つゝいて追て行、小わきより、六十ばかりの男、かけへたゝりていふやう、いひかひなき人／＼の振舞やいでいさぎよく討死し、目をさませ候はんと、人ませもせず、切てかゝるを、堀江これにひかへたりと、もみにもふで火花をちらし、たがひにしのぎへ十七ウゝをけつりけるが、老人といひ素肌といひ堀江は卅有余のおとこ、血気はやはりつ手たれものゆへ、たゝみかけて討太刀に、あへなく二つになりてげり、その外少／＼手むかふものありといへども、さのみ仕出したる事もなく誰ありて寄手の内、一人も仕とめずあまつさへ逃かくるゝに道をうしなひ壁をこぼち垣をこゑ、這まろびて身をのがれしやからもありとぞかくておくにみだれいりのこるくまなく、たつねもとめけれども、吉之がゆくゑをしらず、いかゞせんとあきれしが急度おもひ付、居間の辺にてさゝへんとしたる侍を、馳よりて手ごめにし、腰のものもぎとり、おのれいのちおし

くは案内せよと、手燭とらせてさきにたて、吉之が寝間へ導引へ十八才〇せけるに、命は恥をおもはぬものかな、此おとこおめ／＼と主人の寝間へつれゆきしに、一間なる所をおし入のやうにしつらひ、二枚戸にさし坪して、外より錠をおろしたり、人／＼よりて戸をこぢはなし、内にいりて見てあれば、床には刀を残り置て、吉之は這かくれしにや行かたを失ひしが、されども床にはいまだあたゝかなる氣のありければ、遠くは逃もせざりけりと、いよくいさみてとめしに、曾てそれに似たる人だに見とめず今はせんかたなくなりて、腹をや切べき打死やすべきと齒かみしておの／＼いたるに、吉之も爰をせんと逃るには功者に人／＼のさがしたるあとへ／＼とまはりしが、天運の来る所、此ものども機をおとしてへ十八ウゝ切腹といひしに心たゆみ、炭薪を入をきたる、雑小屋にわけいりけるを、大西江左衛門耳はやき男にて、此音をきゝつけ、すは物音のするはと、錠の石突おつとりのべ、戸を打やぶり手しよくをあげ、吉之にておはしまさずや、まさなうも御しのび候ものかな、とてものかれぬ所なり、尋常に出て勝負をもせさせ給へと、こゑ／＼に恥しめられ、池田炭をつかみ出し、何の返答にもおよばず、雨のふることなげいたせとも、さび矢の一すぢにもあたればこそ、われも／＼とかけ入所に、物がけより二人切ていづるを、あまさじと切てかゝれば、いきほひにのまれ、かいふつて逃てゆく、早馬十郎つゝといり、錠を取のへ一もんじに、炭たはらの陰なりし、人影になのりかけ、鉄壁もとをれと丁とつく、そのへ十九終才〇錠眉間をつきはつじ穂先は手へんにはづれけれども、あつとい

ふて仆るゝ所を。高林かいくゞつて。おこしもたてず一討に。やがて首をとりてけりさてからめ置し家人をめし出し。首の実否を正しけるに。うたがひもなき。吉之のよし。さてこそ本望とげたりと。惣勢一所にあつまり。よろこびの時をあげ。いさみにいさんてかへりけると也。

### 高名大平記卷之八終

### 高名大平記

#### ○卷之九

忠臣四十余人亡君の廟所に首を手向事

大西浦の介殉死をいましむる事

片岡善五はやまりて切腹の事

野見宿禰土偶を造り殉死にかへし事

織部弥平兵衛亡君をしたひ切腹に及ぶ事

波多宗右衛門切腹の刻愁歎し未練に見ゆる事

妻義をすゝめんとして一子をさしこらす事

小野郷右衛門自殺の事父九内なげきの事

浦の介四十余人忠臣のために金をた

くはへし事

帝都の勅によりて浦の介立身栄花の事

後集十卷右の書に洩たる義士等悉注之者也

#### 〈十九終ウ〉

### 高名大平記卷之九

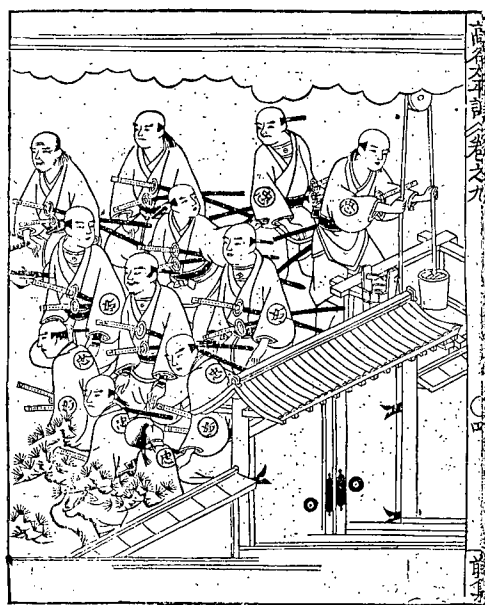
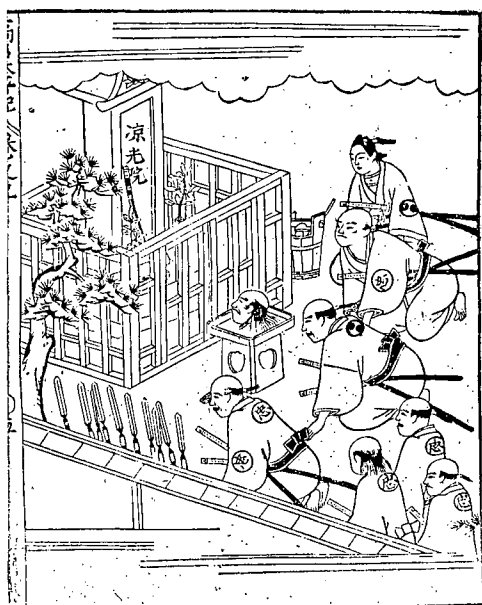
#### ○忠臣四十余人が事

今は昔、大西浦の介が党をむすびたる。四十余人のものは、多年の本懐一朝に遂。昼夜の愁眉たちまちにひらけしかは。いさみにいさみて行伍をととのへ。高見の森の古墳へと。吉之が首を守護しいそぎけるに付ても。大西かはからひととして。もし敵あとをしたひ。人口のそしりを恥て。死を塵芥にきはめ。追きたらば。たとひおのゝ磐念をはたらき山を裂岩を砕のちからありとも。戦ひつかれたる身をもつて逞兵の鋒くちくべきにあらず所詮かくるもひくも。忠のひとつ。そもく此事の〈二オ〉おこりいかにぞや。只亡君の仇をむくひ。吉之が首を廟前にそなへ。地下の故殿に手むけ奉り。幽魂をすゝめ驚し。愁鬱の蒙気を散せしめ奉らんと願ふより他なし。しかるを白地に讐敵の首を守護し。白昼に列をそなへ。遠路にもちはこばんと企る事。たとへば鳥の卵を抱て。盤石を押んとむかふよりも危し。先此首をひそかに御廟に送り。静に例を備へしと。吉之か肌に着したる。白小袖の片袖を切て。彼首をおしつゝみ。首桶に入て上を紙つゝみにし。中にも勝れて功ありける人々。二三人をゑらび出し。首にそへて一番に送り。此使もし人に見とがめられ。事難義におよばぬき合せ。命をかきりに打死したまへ。それまでは此〈二ウ〉屋しきにひかえ。事の

#### 〈二ウ〉

やうを窺ふべし。事首尾せば引かへして、一人なりとも早こ。此屋かたにはしりかへり。よぶこ鳥を吹給へ。かならずかけつけ給ふべしと事こまやかにしめしあはせ。火のまはり見ありき。敵うちたるよしの口上をしたゝめ残しなと。心しづかにとりまかなふ内に道中つゝがなく相達し候よし。注進を聞しより。しづかに次第を操りて列をたて。あらぬものゝ首を服沙につゝみ。鎧の柄を括りさし荷はせ。老功の武士とも前後にそなへ。若き武士どもを左右にそなへて。操引に引とりけるにも。大西が指揮として跡よりしたふ事もやと。兵具少くたづさへさせ。辻小路に眼をくぼり。しづやかに菩提所まで。おのゝへ三オ守護し来りしかども。彼らが武威にやおそれけん。臆してやありけん。ついに事ゆへなかりけり。さて廟前にさきたちではせつきけるものども。吉之の首をあらひ。三方にすゑて。待いたるを。大西うけとり廟所にそなへ。高見とのゝつねくに。秘藏ありける重代の鎧とし。雲上か。打もの九寸五分ありしを懷中よりぬき出し。柄を廟前にむかへてさしあげ。吉之か首に三度あて。そのゝち焼香礼拝しなを口上を以て廟前にかきくどきける詞にいはいく

文祿の冬十一月日。家臣大西浦之介をはしめ。をのゝ唯今尊靈の御廟前におゐて。名乗たてまつる所の四十余人。心をひとつにして一命を抛。尊靈へ三ウの御心ざしをつき。昨夜彼陣中にかけいり。粉骨の忠戦をぬきんて。終に素意のことく。吉之を討取廟前にむかひ奉る。哀こひねかはくは。此心ざしを感じ。亡君尊靈の御手をおろされ。愁憤を御達し候へかし



〔挿画〕〈四ウー五オ〉(図 22)

となく／＼申おはりけるに。おの／＼も一同に平伏し。かしら地につ  
けしばかり落涙したりけり。や／＼しばらくありて大西めん／＼にむか  
ひ。まことに只今までは。おの／＼われらもるともに。忠義のはしを  
心かけ。弓馬の家<sup>いけ</sup>のたしなみに候へは。亡君の旧恩もたしかた。当  
然の理のすゝむ所をそんし。旦暮に心をつくし何とそして。国家のた  
めに仇をむくひ。先君のたましいをやすへ四〇〇〔四二〕んじ奉らん事  
をこそ第一とはからひ候いしが。多年の素懐心のごとなり候うへは。  
いづれもおなし浪人の身貴賤高下の礼あるべからず候。只このうへ  
は御廟前におゐて。殉死の礼を尽し。泉下に故殿を拝顔いたし。おの  
／＼の忠勤をも申あげ。無二の御はたらきをも。ふいてう致候はんと  
存るの間おの／＼は是より心／＼につきていづかたへも。御立ちのき候  
て。御身のかたつき候へし。定て此忠心むなしからず。泉下の尊靈御  
めくみ候て。めてたき御出世あるへく候。今まではたがひに心やすく  
申あはせ。肩をならべ膝をくみしもかぎりありてけふの日。おの／＼  
に別れまいらす事衆鳥の別れ目<sup>わかれめ</sup>の境界。おどろくべきにあらねとも。  
御へ五ウなごりをしく候へなど。さしもの大西なみだぐみ。しみ  
／＼とかたりけるに。おの／＼かうべをうなたれ。そごるになみだを  
おとしける。中にも片岡善五。すゝみ出で申けるは。大西殿の御一ご  
ん。今めかしく改りたる様に承り候ものかな。誰あつて此中に一人も  
不所存の人あるべうも候はす。ちかころすいさんなる申事に候へども。  
それをいかにと申に。先年落城いたす刻。千騎のなかより百騎のこり。  
百騎か中より十騎ゑらまれ。身命を主恩に抛。妻子眷属をかへり見ず

して。ある時は野にふし山路をわけ。都鄙遠境に散在し土民百姓らに  
たしなめられ。弓矢をとらずして歩荷の枒に肩をいため。乗馬に御せ  
ずしてへ六オ小荷駄の跡に塵をかうふり。身を身ともせずして名を  
いたづらに恥しめん事を悲しみながら。天運循環ゆいてかへらずと  
いふ事なく。年来の本意を達せしも。みな人／＼の心手足腹心のこと  
く。膠漆紫蘭のの契りふかきがいたす所ならずや。しからば誰ありて  
か義心をひるがへし。今は望たりぬ。死はおそるべし。功成て名とげ  
しうへは。おのがさま／＼の世わたりをいとなまばやなど。おもふべ  
き人此列にはあるべからず候さはいひながら家臣たる大西どの御目  
がね。いかさまに見所こそ候はめ。とかくに他の御心ていはそんせす  
それがしにおゐてはかくのごとくに候と。さしぞへをするりとぬき。  
太刀のつはもと御廟所の敷石におしあてへ六ウかいあしたのつゆ  
とさしつらぬかれ。つゐにはかなくなりけるを見て。おの／＼目とめ  
をあはせ。いざまいりさふとさしむかい／＼。すでに自殺と見えける  
時。大西あわてゝおしとどめ。さりとははやまつたり。日ころの心  
底しらさるものならば。たかひに心をひき見るなと申うたかひも有  
へけれ。まことに人として身命をおしまざるもの。一人もあるべから  
す。しかるを御座につらなる人人ひとのおしむ所のものを塵芥よりも  
軽し。一命のために父祖の名を汚して。恥とさせるは匹夫の心と申  
せとも。はやすでに落城のきざみ。名をかへて命をおしむ恥をいと  
ずして妻子を愛し。れき／＼の人の落うせしもあるに。おの／＼の心  
はそれに引かへ。人の軽しとへ七オする所の名をおもんじ。かほと



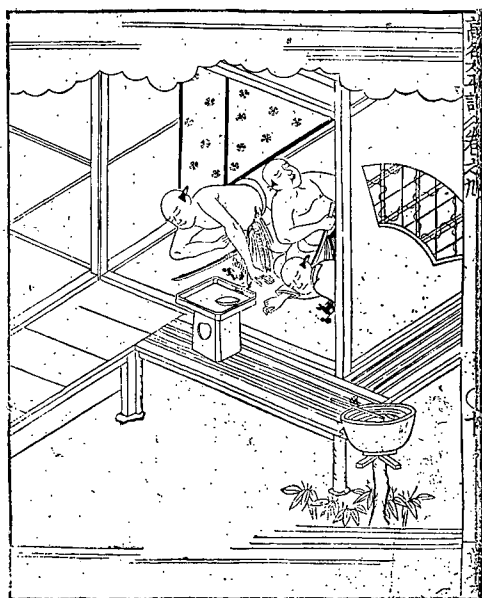
までちからをあはせ、ともに亡君の仇をほうじ、義心を今古の人口にのこす人々、今さらうたかひて申にあらず、しかりとはいへども予が申所は、もたしかたき国法のありて、一所に自殺をゆるしかたけれはなり、そのゆへを尋るに、おの／＼も御ぞんじの如く、先君浅井高見、叡殿の御遠祖・野見宿称と申せし御代まで、禁庭につかえて陪臣たりしか、その御代までは異朝の法に準せられ、天皇崩御申しませは后妃をはじめ侍婢にいたり近臣は申におよばず、殉死と号して生ながら、同じ土中に埋けるゆへ、是を憎ておの／＼のはからひとし、さしちかへ／＼幾許の人か御供と号し、一同におほくの人も、亡ひうせしと申伝ふ、さるに「へ七ウ」より野見宿称、此事をふかく難き、君臣の礼をいはゞ生て後主に忠をつくし、国家をおさめ民をあはれみ、君の君たる御めくみを継せたまつこそ、股肱あれば惟人良臣あれば惟聖といへりしを、書経のむねにもかなふべけれど、土をつかぬ偶としはしめて殉死の臣にかへけるより、此徳なく伝わり、当世もつて美談とせり、かるかゆへに、高見の叡家、たとひ寵愛の臣秘蔵の器物、まして児女の色をもつて幸せられしものといへども、あゑて殉葬をゆるしたまはず、されば此理をもつて四十余人、一同に、死をゆるさんも、地下に亡君にあひ奉り、此いひわけ申べき道をしらず、此ゆへをもつて、我まつ人々／＼に別をとり世をはやうせんとおもふ所を若氣「八才」にまかせて彼人、はやまりて死せしうへは、それかしとてもいひかひなく、しばらく命をながらへんと存ず、此事たとひ申さずとも、おの／＼かねて承知の所ぞかし、何と心へ給ふぞや、人臣は欺さ

るを以て忠とすと、陳俊卿が教し所、臣子は身を愛し自佚するの理なしとは、朱子ものたまひつればつれなき命をなからへん事、ねがふ所にあらざといへども、君につかふるものは、君をもつて我心とす制我にあらずとは、国語にいへる詞、此これらの道にしたがはんとすれば、一日もいきなからへん事の苦しく、すみやかに死せんとすれば、片岡とのに先をこされ、殉死の国命をそむくになれり、進退こゝにせまり是非いかんともわかれがたし、たゞねがはくはおの／＼、此心さしをきし「屈へ八ウ」けふの命をそれかし親子に給るへしと、ことはりをつくしていひければ、四十余人の人々／＼も、忠あり義ある大西か一言あつたら武士を此まゝに、朽はてさせんも惜からずや、かほどまで旧恩をおもひ、死するにも義をたつる、忠臣のいさめを、たれかそむき申べき、ありがたき御心と、みな／＼かんるい袖にあまり、しからば生るも死するも、忠にまかするわれ／＼なり、ともかくも御さしづにまかせ、心／＼になり申へし、あかぬは君が御ことばと、心ならずめん／＼は、宿もさためず東西にわかれしばらく時節をうかゝひけり

## ○浦の介立身榮花の事

今はむかし、浅井家の侍とも、心／＼に立わかれ所／＼「八才」に住しかども、義をもつばらとし、心ざしをひとつに合體したるものどもなりしかば、絶す音信の文をつかはし、ある時は尋ねてみづから対談し、それとはなしにめい／＼の最期をうかがひ同しくは、一同にいさぎよく追腹せんと、折を見あわせ居たりける内、小野九内の息同名郷右衛門といひける人の方へ、波多宗右衛門より状一通来りけるを、郷

右衛門何事にやと。ひらきけるに今夕少々申談したき事候間、かならずと書ながしたるを、何事にかとやかて立ちまけるにおりふしその座に織部弥平兵衛も来りあはせしと見えて宗右衛門と何やらん密談の体なりしが、郷右衛門をまねき申けるは、われく事本望はたつしつ。主君とたのみつへ九ウゝるはさきだちて失給ひぬ。今は一日もはやく世を去候て泉下にまします尊君に逢たてまつり。しかるへくは幽冥の内に、功を賞せらるゝの祿をも申うけ。此たびの憂喜をも申さんと存し。大西殿より指図もやと。さまくうかどひる候へども先比御廟所におゐて、伝五殿の御手きわ中く出しをくれとなり候て。あつばれその時節、それがしめも御とも申べかりしを浦殿にさへられ。うかくとたゞいまに相延候。しかれば貴殿を申入候義、別の事に候はず。ちか比御無心の事に候得ども貴殿を頼み、検使ながら介錯を致もらひ度よし。くれくと頼れ郷右衛門大きにいさみ誠に貴殿の仰られ候通此列のものども誰か命をおしみて一日も生なへ十オ(図23)からへんと、ねがふものも候はず。とかく何とそして、殉死の名をのがれ黄泉の底にいたりて。申わけ立やうにさへ致候は、死は何時もある事とぞんじ。いろく父子ともに相談いたし罷有といへども。浦の介方より指図あるべきよし。是又心得ぬながら。只今にての首將としたる人殊に家臣の随一といひ。落城より夜討にいたるまで終に彼人の指揮を請ずといふ事なく。智謀またならぶかたなき事に候へば。かゝる事に付ても。猶品のよろしき事もやと申あひて。ひかへ罷有に候さはいひながらとても死は極りたる所なり。たれとてものがれぬ場なれば。違



〔挿画〕〈十ウー又ノ十オ〉(図23)

背申べき様なし。いかやうとも御意にしたがひ候はんと。いさぎよく申ければ、弥平兵衛世にうれしげにへ又ノ十ウて。さらば死出の首途を祝申さんと。宗右衛門もろともに。酒さかなとりわたり。おのく三献つゝほしてさしずてに。先弥平兵衛おしはだぬき。さしぞへをするりとぬき。腹一もんじにかきやぶり。りよぐわい申とその刀を宗右衛門がまへにをき。さらば御むしん申さんと。莞爾と笑て郷右衛門を招く。おゝいさぎよく候。御心やすかれ追付それがしも御とも申さんずるぞと。ずんど立て腰刀をぬき。弥平兵衛か首。水もたまらず打おとしけるに宗右衛門は盃手にもちながら何事をおもひけん。さめくゝと泣て取みだしけるを。郷右衛門興さめ。こは宗右衛門どのには未練の御ふるまひ。いかにや命おしく候かあまりに。ふかくの御落涙候はと。あらゝかにいへども。宗右衛門これをもへ十一オんきゝいれず。たゞさめくゝと泣いたる所に宗右衛門が妻此ていを見て。忠次郎といひける五才の男子夫婦の中にまふけたりを。かきいだきて宗右衛門が前にをき。父がさかづきをととりて忠次郎にいたゞかせ。かきくどきて申けるは此場にいたりて申もかたはらいたく。おかしき申事に候へども命長ければ恥おほしとかや。人死すべき時死せされば辱をうくるのもとひ。先君の仇を心に憤り。忠義を胸に隠して。昼夜謀をめぐらし。つけねらひ給ひし程は。金鉄の魂。蕩とも朽べからさしし人の。願ひの心。解望の事叶ひしかば。志。撓ちから衰へふたゝび人情のあさましき迷ひを生じて。愛念にひかれ貪着にくらまされ父がおことや母が身に。人面獸心のそしりをかうふらせんとし給ふぞや。

さすへ十一ウへかにおことも何がしか未そ眼前の未練を見て。いとけなくともおことばかりは。いさぎよく死をとげ給へ。母もたゞいま追つくべきぞ。いざといはれて忠次郎。おとなしくおし肌ぬぎ守りかたなの九寸五歩をとりなをし。いたひけしたる手して。左の乳のしたを爰ぞど母のいふにまかせつきたつる所を郷右衛門もなみだながら。ふりあげて一討にと。心つよくはおもひしかども。あまりの事に手もなへて不覚のなみだにむせびけるを。こはいひかひなき人く。一大虚を吼る時は。あまたの大これにしたがふならひ我妻の義をすゝめんとて。おさなければども忠次郎。義には命をおしまざるに。一人の未練より貴殿もおくれ給ひたるな。よし。今はと宗右衛門か妻。忠次郎をひきよせ一へ十二オん刀にさし殺しそのかたなを口にふくみ。うつぶしにたふれ死ければ。宗右衛門も郷右衛門も。あまりの事に途うしなひたがひに目と目を見あわせ。しばしは涙もおちさりけり。やゝありて宗右衛門。やうくになみだをおさへ郷右衛門にむかひいひけるは。さてくそれがし事存の外の愁傷ちかごろ未練とおのくもおほしめさるへし。女ながら我つまは。おどろきいりたる心底。申も中く便なけれども。それがしたゞいま落涙の事命おしきのなみだにも候はず。また恩愛にひかれて死をかなしむにてもこれなく候。ゆへをいかにと申におのくの父九内殿も御ぞんじのごとく。それがし義は就中。故高見泰厚恩をかうぶりたる身にて候。元来へ十二ウへそれかしは仮初の渡り奉公人にて次第になり上りそのかみは主君の道具持となり候身の猶御目かねを以て足軽に申付られ。程なく歩行のものとなり候ひし

ぞかし、是にも猶あきたらずやおぼしめしけん過分の高禄を下しおかれ、式部五拾石の身とまかりなり役義まで申付られしをおのく譜代相伝の衆に対して申さば、道具持などの分として、かく侍なみに立ならび、切腹におよひ候事、たぐひなき身の冥加、厚恩をおもひくらぶるに報すべき道なく候を、一つく存つけ、さてこそ落涙におよひしぞかし、最早おもひのこす義なし、御介錯たのみ申といさぎよくおし肌ぬぎ、これも切腹とげしかは、郷右衛門も死骸ども見ぐるしからぬへ十三才やうに取したゝめ、二人か上にのりかゝり、同じく自殺したる所へ小野九内、富林助大夫、兩人何こゝろなく尋ね来りしが、此ていを見るよりたがひに肝をつぶし、兼く申おきし覚悟のまへといひながら、いまだ大西殿より何のさしづもなき内かやうにおもひつめし事、楚忽のいたりといひながら、よくもおもひきりたりと感し、も九内は、郷右衛門か死骸にとりつき、さりとては某ほど罪ふかきものは候はず、当年六十になり候まで、子といふものゝなき事をかなしひ、老のゆくゑのたよりとせはやの心に、大高善五かたより郷右衛門をやしないとり、甥は猶子のことしかや、愛念日々にまさり彼もまた父母とうやまひ朝に問夕に省るの孝あり、今心やすしなど人にもいひ我もおもひ、君に仕ふるの日は短へ十三ウといへども、尽すべきの忠は長き事を悦ひ、人しれず多きをふくみしに、一朝のいかりに百年のよはひをおとし主君永く憂世の交を絶給ひしより、父子心をあわせ義忠をもつはらに重し、敵城にかけいり虎狼の中を挫て、あやうき中にも親をかへり見、子をたづね、水魚塩梅のはなれぬ生死

をちきりしも、先我死てこそおもひしに、年来のあらましも空たのめとなり、かへつて彼がさきだちけるは、そもいかなる宿世にやありけん、よし／＼時刻すしおくれたりとも、ましてしばし追つきて、黄泉の旅にもめしつれんするそと、腰刀をするりとぬけば、富林此しを見てまづしばらく御まち候へ、もつとも子息郷右衛門殿さきたち給ふを御覧のうへは、すこしも早くと死を御いそぎも、断とはへ十四才へ、そんじ候へども、先頃亡君の御廟におゐて、おのく死せんと申し候ひし刻、浦殿の御一言もかゝる事にてこそ候へ、かやうに一人二人ならず、三人まで自殺候うへに、またおのく我らまで同じ所に骸をかさねは、殉死のつゝしみいかゞいたし候べき世俗のたとへにも申さずや、仏をつくりて眼をいゝの時ぞかし、いざ我くともろともに、所をかへて御生害あるへしと、富林にいさめられ、つきぬなみたをとゝめかね、今はたつあしもたよくと前後を忘してゐたる折ふし、何心なく浦の介、此所へたづね来り、此段々を見聞し、おのくの忠死、九内父子か恩愛のなみだとりあつめたる事ともに、しばしは袖をぬらしけるが浦の介申けるは、それがし義さきたち候て、死すべかりける身の伝五とのに先をこされ、あまつさへおのくまで御異見へ十ウを申切腹をとゞめ候事、いさ／＼か存るむねありての事に候、そのゆへは、亡君のかたきを討ての後、早速おのく申合腹をもちいたし候事、理の当然と存候へども、兼て申おき候通殉死は国法のゆるされぬ所をそんし、しづかに日を経て二人三人つゝ、所をかへ品をかへ、死し給へと申ふくめしにつきて、此方より一左右を相待給り候へと申

せしも、後日に人の申候はんは、此家臣とも剛にして、主君のかたきを討は討しか、身のかたつきの言立にせんとて、しはらく義士の真似をもせしにや、殉死にせずして、方くと流浪し渴命におよひて一人く、切腹せしにやといひつたえんも口惜く、さすがに恥あるおのくなれば、後難をのかれんには、一つのはかり事をめくらし、様子よく死せ申さんため、此ほどいへ十五オ、ろくと手をつくし、金子百兩とへの申て候、このころは四十余人の人く、おのく二兩つ所持いたさせ、そのうち所くにおゐて、自殺をゆるし申時は、すなはちこの金子を以て追福のたすけともいたさせ、且又おのくの義士たち、飢て死をいそぎしと申惡名をのがれ給ふやうにと存、さてこそ一左右をまち給へと申わたして候に、心みじかく人くのやうに、先だち給ふこそ本意なく候へさりながらも、此金子いたつらにはなり候ましと、それくの死骸にも、おのく二兩づを分ちて懷中させ、銘くに状をそへ、のこりなく配当し、さて是よりは心まかせに、死をいそぎ給ふべし、但目を同しうして死する事、よろしかるましく候と、こまやかにいひわたし、再会期し難ければとて、九内助太夫の兩人とへ十五ウ、なごりのさかづきくみかはし、たがひの別れをおしみる所へ一子力の承あとしたひて尋ね来り、ふところより一通の状をとりいたし、浦の介にかたりていはく、それがしら此度忠戦をとげ、本型をたつし候段、委曲帝都にきこしめし上られ、かゝる忠節の武士どもいたつらに浪人させ、匹夫のまじはりしかるへからず、功ありて賞せざる時は善勸す、過ありて誅せされは惡おそれずといへる本文あ

り、浦の介をはしめ四十余人、向後帝都にまかりのぼり、禁庭に相つめ洛中を守護すべし、賞は勞によりて行はれ、来る春の除目にはおのく国を給ふへしと、時の外記史仲原の師賢、勅をうけてむかはるのよし、在京の一族かたより、数通の状に人をそへて、隠家にたづね来り候、いかゞ御はからひ候やと、息をもへ十六オ、つぎあへずかたりければ、浦の介もおもはずなる事にてやゝしばし頭をかたふけ、いがせんと案せしかども、いやく君の論言はおもく、私の義は輕きに似たり忠臣二君につかへすといへとも、それは列国の主につかふにあり、これは一天の君の武功を感じ、まねかせ給ふ御めくみにはづれ、君恩もたし奉らば、かへつての恐なるへしとて、おのく残りどまりたる人くにも状しあわせ二たびさかふる大西の家貴賤上下もつはらとそのころのもてはやしき、うらやまぬ人もなかりけりとぞ

高名太平記卷之九終

《十六ウ》

京寺町通御池下ル町

芳野屋徳兵衛板行

洛陽書林

《後表紙見返》